

大賞

「Ici」 いうかわれきし

優秀賞

「透明な不幸」

冬野ヨル

「流れ星の里」

河原谷まち

「ブリキに花束を」

松本愛海

# 第13回熊本大学

# 東光原文学賞作品集



2021年3月発行  
熊本大学附属図書館  
Kumamoto University Library

# 第十三回 熊本大学東光原文学賞作品集

第十三回熊本大学東光原文学賞作品集 目次

館長のことば

熊本大学附属図書館長 山田 秀 / 4

第十三回熊本大学東光原文学賞作品集の公刊に寄せて

大賞

Ici

いなかわれきし / 11

(文学部文学科二年)

優秀賞

透明な不幸

冬野 ヨル / 66

(文学部文学科二年)

優秀賞

流れ星の里

河原谷 まち / 105

(文学部総合人間学科四年)

優秀賞

ブリキに花束を

松本 愛海 / 143

(文学部総合人間学科三年)

選考を終えて

坂元 昌樹 「東光原文学賞総評」 / 169

松岡 浩史 「講評」 / 174

岩瀬 茂美 「講評」 「混迷の時代」の通奏低音 / 178

# 第十三回熊本大学東光原文学賞作品集の 公刊に寄せて

附属図書館長 山田 秀

熊本大学附属図書館は、本年度（すなわち令和二年度）の重要事業の一つとして、「東光原文学賞」の作品を募集いたしました。厳正な審査をおこない応募作品のうちから優秀賞三篇と大賞一篇を選考し、その結果を公表しました。本冊子は、その受賞作品四篇を上梓して広く学内外の読者に供するためのものです。

本事業の趣旨眼目は、当然のことではありますが、まずは学生諸君の読書への関心を喚起すること、日本語の表現能力の向上に資すること、これを好機として学生諸君が図書館を身近に感じてより一層活用していただくこと、こうしたところに置かれます。

このような趣旨で小説作品の投稿を募ったところ、本年度は、応募締め切り日の令和二年（二〇二〇年）十一月五日（木）までに、幸いにも十五篇の作品を受理しました。その内訳を見ると、文学部（一年一篇、二年三篇、三年一篇、四年一篇）、理学部（一年三篇、三年一篇、四年一篇）、薬学部（三年二篇）、工学部（四年一篇）、自然科学研究科（一年一篇）となっています。

『第八回熊本大学東光原文学賞作品集』の山尾敏孝館長の巻頭言に做つてご参考までに、これまでの投稿状況を記しておきます。

- 第一回…二十九篇(学部二十一篇・六学部、大学院八篇・五研究科) 大賞一、優秀賞二  
第二回…二十篇(学部十九篇・五学部、大学院一篇・一研究科) 大賞一、優秀賞三  
第三回…二十五篇(学部二十三篇・六学部、大学院二篇・二研究科) 大賞一、優秀賞三  
第四回…二十一篇(学部十九篇・六学部、大学院二篇・一研究科) 大賞一、優秀賞三  
第五回…十四篇(学部十三篇・五学部、大学院一篇・一研究科) 大賞一、優秀賞三  
第六回…十九篇(学部十九篇・七学部、大学院なし) 大賞一、優秀賞四  
第七回…十二篇(学部十二篇・五学部、大学院なし) 大賞一、優秀賞三  
第八回…十四篇(学部十四篇・四学部、大学院なし) 大賞なし、優秀賞四  
第九回…二十八篇(学部二十五篇・七学部、大学院三篇・三研究科) 大賞一、優秀賞四  
第十回…十三篇(学部九篇・一学部、大学院四篇・三研究科) 大賞一、優秀賞三  
第十一回…十五篇(学部十三篇・五学部、大学院二篇・一研究科) 大賞一、優秀賞三  
第十二回…十五篇(学部十四篇・五学部、大学院一篇・一研究科) 大賞一、優秀賞三  
そして  
第十三回…十五篇(学部十四篇・四学部、大学院一篇・一研究科) 大賞一、優秀賞三

このようにデータで振り返ってみると、東光原文学賞の作品が開始されてから第六回までは投

稿作品が多かったということ、第七回以降は第九回を除いてやや少ないかなとの印象を受けるように思います。その間にあって山をなしている第九回は熊本地震を経験した者ならではの動因が執筆を後押ししていたものと容易に想像されます。その後、微増してそれなりに安定しているように見えることは一応の安心材料であると受け止めてよさそうです。

以下、表彰式当日の附属図書館長挨拶（原文）を掲載いたしまして、受賞者の皆さんへの祝辞といたします。併せて、審査の労を取って下さった委員の方々および本事業実現に尽力された方々にこの場をお借りして謝意を申し述べます。応募作品の中に腹を抱えて笑わせてもらったものがあり、本当に楽しい時間を過ごす貴重な経験もありました。一言添えておきたいと思いません。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

本日二〇二一年一月十五日（金曜日）「第十三回熊本大学東光原文学賞 表彰式」をこうして執り行うことができますことを、ここにご列席・ご参列いただいている皆様方と共にまことに目出度いことと思えますと同時に、何よりもこの式典の主人公であり工夫推敲を重ねて投稿してくださった方々、それら投稿作品十五篇から九篇を第一次審査で委員として選出して絞り込んで下さった第一次審査委員の方々、第二次審査で慎重に投稿作品を読み解き読み比べ、それを持ち寄って昨年十二月十六日（水曜日）に雪がちらほらと舞い降りる如何にも文学賞に花を添える趣のあるなか実施されました選考委員会で貴重な評価の遣り取りを踏まえて受賞作品の決定に至るまでご尽力くださった選考委員長坂元昌樹先生（大学院人文社会科学研究所・文学系教授）並びに選

考委員の松岡浩史先生（大学院人文社会科学研究所・文学系准教授）と岩瀬茂美先生（熊本日日新聞社編集局次長）、そして第十三回熊本大学「東光原文学賞」募集要項の作成から「東光原 News Letter, No.37」の印刷配布まで黙々と周到な準備をしてくださった我等が誇る縁の下の力持ちの方々、こうした総ての関係各位に、附属図書館長として心から厚く御礼を申し上げます。

私は一昨年四月に附属図書館長に就任しましたので、今年度が二年目。従って、新米ですという逃げ口上はもはや用をなしません。昨年に引き続き今回も多くの投稿作品を実際拝読させていただきました。そして自分にはない優れた才能とその開花を再び目の当りにして、楽しさやら妬ましさやらその他の細かい交ぜの心の声を聴く思いがいたしました。本当に私館長には備わっていない作品創出能力を有しておられる応募者の方々には、その優れた現実に存在する潜在能力を、何らかの形で将来的にも育んでいかれたらいいなあ、と思います（昨年は、けしかけちゃいけませんよ、と或る御仁から嚴重注意を頂戴したのでありますが……）。

感心するばかりのプロット、よくもああ、こういう筋書きを構想できるなあ、と思います。今年度の作品には、コロナウイルス騒動も何某かの影響を与えているのでしょうか予想もできないような不思議な情景描写とかもふんだんに織り込まれていたように記憶しております。それだけ投稿者の方々の発想力が自由で豊かなのだらうと思うことでした。

前に言及しました選考委員会での充実した審査の精髓はこの館長挨拶に引き続いてご披露され

ようかと思えます。

この度の東光原文学賞に投稿していただき、厳正な審査を経て見事に受賞者としてここにお越しいただいている皆さん、ほんとうにオメデトウございます！（あいうえお順にお名前を発声してみます）

進藤さん

濱田さん

堀添さん

松本さん

本当に、おめでとう！

この四名のなから本日この場で初めて大賞が発表されます。さあ何方（どなた）がその大賞の栄冠に輝くか、たいそう楽しみです。

以上で、附属図書館長山田からの祝辞といたします。

二〇二一年一月十五日（金）

熊本大学附属図書館長 山田 秀

小説を書く素養がないこの身には本当のところは分かりませんが、何でも一朝一夕に成し遂げることなど出来ない相談ではないのでしょうか（実際、今回の受賞者は小さい頃から創作してい

たと表彰式の際に語ってくれていました！  
また、アイデアを長年温めていた方も。もちろん初めてチャレンジされる方もおられてバラエティーに富んでいました。まず開始しないことには、文字通り何も始まらないし、その結実もありえない訳ですから。であるならば、学生、院生、留学生の皆さんには、是非とも日頃から研鑽を積みまれますようお願いいたします。とともに、来年度も（もちろんその次の年度も……）多くの意欲的で素晴らしい作品のご応募がありますことを祈念鶴首しております。

以上をもちまして、刊行のご挨拶といたします。



上段：松岡・坂元・岩瀬  
下段：堀添・山田・濱田・進藤・松本



# Ici

## いなかわれきし

流れ落ち、滴る水の音を、はるか遠い地からの微かなものとしてきいた。ともすればそれは幻聴のようでもあった。あるいはどんな手段をもってしても辿り着けない天上の世界を流れる川の音……。

そんな泡沫に似た空想をしてみても、その音は人に触れうる世界の空気を震わせ、たしかにぼくの鼓膜を揺らしている。それに出所はすぐそばだった。

使い古され、まだらにレザーの剥がれ落ちたソファにぼくは丸くなって、午後のなめらかな光が染みこむレースカーテンの向こう側をみていた。ベランダには膨れ上がるような光が満ちて、半ば開かれた窓からの風がカーテンを広げるときには、その光の奔流が押し広げているようにも思えた。

そのまばゆさにかき消されるほどはかない様子で、一樹は両膝をつき、石に水を与えていた。

水の音がきこえる。一樹が右手に握る透明なカップから、水はたおやかな稲妻のようにこぼれ

落ち、足場に置かれた拳サイズのごわついた石の上に弾け、一部は表面を滴り、また一部は跳ね回る。その気ままな運動が様々に音を放ち、ぼくの耳に心地よく届く。やがてカップの水が尽きると、一樹はカーテンを押しつけ室内に戻り、台所の蛇口からカップに水を注ぎ、再びベランダに出た。そして両膝をつき恭しく石に水を与える。何度も何度もそれを繰り返す。その間ぼくはずっと水の音をきき続けた。

しばらくすると、一樹は湿った石を手に取り、しげしげと眺めはじめた。手の中でゆっくりと回し、まるで植物の芽生えでも期待するかのように徹底的に観察する。しかし湿ったほかに変化がないのを見ると、落胆するでもなく、そっと立ち上がりのそのそと室内に入ってきた。ぼくは音を立てずにソファを離れ、できるだけ一樹の視界に入らないよう部屋の隅に移動する。一樹は台所まで行くと、カップを無造作に置き、その横に敷かれているハンカチの上に、甚だしく注意を払って石を載せた。そして愛撫するように石に触れ、祈るように口を開く。それは声にならない声で、たとえ響きをもって耳を打とうと、たしかな意味をなさないものだと思われた。

一樹は先ほどまでぼくがいたソファに横になり、眠りについていた。本当に睡眠のうちにあるのか、それともただ目を閉ざし静止しているだけなのか、ぼくには分からなかった。石に水を与えているときや食事をするとき以外の時間、彼はずっとこうして過ごしている。その姿はどこか岩のようにも見えた。

ぼくは玄関に立てかけてあるモップを手に取ると、部屋の掃除をはじめた。それはとても楽な作業だった。この部屋にはソファの他に何もない。テーブルも椅子もなければ棚もなく、電化製品だってなかった。

手早く掃除を済ませると、ぼくは部屋のゴミをまとめ、作ってきたおにぎりを保冷バッグから取り出して台所に置き、玄関に向かった。ドアを開けると、暮れがかかった陽光が入り込み、部屋に淡い光の帯をつくった。カーテンは閉め切り、蛍光灯も消していたので、薄暗い室内は燃え上がっているようだった。

一樹もまた炎にまかれて死に向かおうとしていた。ひび割れた唇、痩せこけた頬、艶もなく伸びきって荒れ果てた頭髪、薄物のTシャツでは隠しきれない病的に細い肉体。それらが跡形もなく燃え尽きようとしていた。

胸が苦しくなった。やめてくれ、もう少しだけ待ってくれ。強くそう思った。そのためには、すぐにもぼくが部屋を出て、ドアを閉ざせばいいだけだった。

それでもぼくは、もうしばらくの間、一樹の顔を見つめていた。二度と開きそうにない臉の線。長く、今にもこぼれ落ちそうな睫、それに絡みつく埃のきらめき。

やがてそっと目をそらし、ぼくは部屋を出た。

帰宅する前に、近所の古書店に立ち寄った。中心街の脇の通りに位置する長い歴史を持つ古書店で、同級生の父親が経営していた。今日はその同級生が店番をしているはずだった。

歴史を持つということとは、それだけ古びているということだ。外装は爛れ、看板などは掠れて文字も読めず、いまだにぼくはこの古書店の名前を知らない。内装も掃除は行き届いているものの、雨漏りや床のきしみなど古さは隠せなかった。

狭長な店内には十分な隙間もなく書棚が並び、そこには黄ばんだ書籍が詰め込まれている。ぼくはレジそばの腰掛けに座り、蛍光灯の寂しげな光に埃がちらちらと可視化されるのを、何の気なしに眺めていた。

「今日もバイトだったの？」

そのようなぼくの様子があるさげに見えたのか、小柄でか細い身体が千切れそうなほど書棚の本に左手を伸ばしながら、森下さんが声をかけてきた。右手には大量に本を抱え込んでいるから、見ていて気が気じゃない。身の丈に合わないエプロンが華奢な体型を際立たせていた。

「いや、別件だよ」

「珍しいね。いつもはろくに講義にも出席しないでバイト詰めでしょ」

「そんなことはないけど……。でも、明日からは一週間休みがない」

森下さんは低い位置の本をしゃがみ込んで取りながら、呆れたように視線をこちらにやった。

「いくつ掛け持ちしてるの？ そんなにお金に困ってるようには見えないけど」

「有り難いことに、実家暮らしだし、学費も生活費も親が負担してくれてるからね」

「……じゃあ、彼女とか？　もしかして今日も……」

にやにやした表情から発せられた思ってもみない言葉に、苦笑がもれる。

「そんなんじゃないよ」

「へえ」

疑うように森下さんは目を細めた。

「ほんとかなあ」

また苦笑する。

「欲しいものがあるんだよ」

「そんなに高いものなの？」

「でも、生きていくために必要なものだ」

森下さんは興味深そうな顔をした。書棚からこちらに身体を向け、続きを待つようにぼくを見つめる。けれどぼくはそれ以上説明しようとは思わなかった。

「それより、本、選んでくれたんでしょ」

森下さんが抱える大量の書籍を指さして、ぼくはそう言った。

「育人くん、そういうところあるよね」

不満げな声をもらしながらも、側に寄ってきて、レジの机上にせっせと本を並べる。それらの本は森下さんがぼくのために見繕ってくれたもので、時代も国もばらばらの作品群だった。どれも辞書のように分厚いことや古めかしい表紙から、非常に難解なことがうかがえた。十冊を超え

たあたりから、辟易とした気分になってきて、

「このなかで、一番おすすめのものは？」

と投げやりに言った。

「全部」

「ベストスリーは——」

「ぜ・ん・ぶ！」

「……流石に読み切れないよ。森下さんが薦めるから最近は多少ふれてはいるけど、ぼくはもともと読書家ってわけじゃないし」

「読書はね」

森下さんは両手を勢いよく机に置き、強い口調で続けた。

「人の生きた意味を繋いでいくことなの」

ぼくは黙っていた。

「どれだけたくさんの経験をして、どれだけ素晴らしいことを考えても、いずれ人は死んで、私たちのないそれらはうしなわれちゃう。でもその土地、その時代を生きた誰かが書き残した文章は、それらの意味あるものを保存し、より長い時間、広い場所に向かってその意味を投げかけることができる。それを手にし、読むことで、私たちは彼らが生きた意味を引き継いでいくことができる。だから、私たちは本を読まないといけないの」

その語りには熱がこもっていた。

「じゃあ森下さんは、いま生きてることそのものには、なんの意味もないと言っただね。それらは残り続けることで、はじめて意味になると、そう言いたいんだね」

「そこまでは言わないけど……でも、上手く言葉に出来ないけど、時間と空間、時代と人間関係、そういう縦と横の拮がりのなかで、はじめて人は存在できるんじゃないかな」

「なんだか、リリカルだね」

「あーもう！ とにかく本読んでよ！ プレゼントしてもいいから」

ぼくは机の上の本を一冊手に取って、ぱらぱらとめくった。詩だか小説だか分からないような文体で書かれていて、何となく読みやすそうだった。他のものもきつと、ぼくが興味を持ちそうなものを選んでくれたのだろう。

「そもそもぼくは、本を買いに来たわけじゃないんだけどな」

「ではお帰りください。ここは古書店です」

森下さんは真面目くさった話し方でそう言った。

「そうするよ。ところでこれ、全部でいくら？」

森下さんは、にひひひ、と笑った。

「ありがと。税込み一〇〇円だよ」

お金を渡して、本を袋に入れてもらうと、ぼくは立ち上がった。

「またくるよ」

店を出ようとしたところで、森下さんがぐもった声でぼくを呼び止める。振り向くと、真剣

な表情があった。

「大学にも、ちゃんと来た方がいいと思う」

「まあ、時間があつたらね」

今度こそぼくは店を出た。

○

森下さんをはじめて知ったのは小学五年生の頃で、二年に一度のクラス替えで同じクラスになったことで関わりを持った。最初のホームルーム、順番が回ってきて、自己紹介のために教卓の横に立った森下さんは、一年生の列に並んでも違和感がないほど背が低く、両手を捕まれて歩くあの宇宙人のように痩せ細って、そして何より左手の小指と薬指がなかった。

それは学校では周知の事実らしかった。幼い頃、地震で倒れてきた本棚に挟まれ切断する事態にまでなったのだという。切断面は梅干しのようにしわくちゃにしぼんで、痛々しかった。大学生にもなれば一特徴として片付けられるそんな物事も、小学生の幼い認識と集団心理のうちでは、容易には受け入れがたい相違だった。

森下さんはいじめを受けていたのだった。ものを隠されたり、仲間はずれにされたりといった程度ではあつたけれど、集団のうちでひとりの人物を異端視する雰囲気というものは、十歳に満たない少女には耐えがたいものだったろう。

当時ぼくは、強く握りしめられた小さな拳や、歯を食いしばってうつむくあどけない横顔や、そこからふいにこぼれ落ちる涙を、よく目にしたものだった。

でもぼくは、森下さんを助けようとは思わなかった。そもそもぼくも彼女と同様にいじめられていたわけだから、助けるも何もないのだけれど、きっとぼくが学校社会においてもっと強い立場にいたとしても、森下さんに手を差し伸べようとは思わなかったと思う。ぼくにはそういった現実空間における問題のあれこれへの興味があまりなかったのだ。

ただぼくは、森下さんのことをずっと眺めていた。

それはもしかしたら、憧憬のような感情だったかもしれない。

いまのぼくは、当時の彼女を思い出して、水のようにだと表現する。水は柔軟で、忍耐強く、そして寛容だ。降りかかる出来事を柔らかく受け止め、砕けながらも再びもとの姿を取り戻し、自らを傷つけたものさえそのうちに住まわせる。

森下さんもそうだった。幼い悪意の渦中にあって、彼女は確かに深く傷つきながらも、他者との関係を諦めなかった。何度裏切られようとも何度でも手を差しのびし、そして何度も涙を流した。

ぼくは、森下さんがいつか人々に受け入れられ、愛されることを、心の底から願っていた。

小学生の頃、たまにだけけれど森下さんは笑った。小さな顔にえくぼをつくって、白い八重歯をちらりと見せて、ぎゅっと目を細めて、「にひひひ」と不思議な声をもらして笑った。授業中、先生が冗談を言ったときとか、分厚い小説を読んでいるときとか、クラスの男子が馬鹿やったときとか、ふいにそうやって笑った。そのたびにぼくは、少しだけ笑うことが出来た。いまでも彼女は同じ笑い方をする。

自分の部屋で、たまにぼくは森下さんのまねをして、にひひひ、と笑ってみる。その声は、ひとりの部屋に、むなしく響くだけだった。

○

バイト漬けの一週間だった。明け方から夕方にかけてはコンビニの店員、その後は塾の講師か居酒屋の接客をやった。どれも人と向き合うもので、得意な職種ではなかったけれど、お金が必要だったのだ。

働いていると、人の弱さ、醜さに触れることが多い。いろいろな人がいる。心優しく見える人も。けれど誰もが、誰かの前では弱く、醜い。人とはそういうものだ。そういうふうに出てくる。

そんな中でも、必ず毎日一樹の部屋には足を運んだ。一樹は住宅地の片隅に佇むアパートの一室に住み、そこから外出することも、他人と関わることもなく暮らしているのだった。

ぼくは彼の生活の世話をしなくてはならなかったし、アパートの賃貸や光熱費、食費などを負担しているのもぼくだった。

その日もぼくは、バイト終わりの重い肉体を引きずって一樹の部屋を訪れた。

夕方だったが、一樹は眠りから覚めたところだった。寝ぼけまなこで立ち上がり、高い身長を揺り動かしながら、おぼつかない足取りで歩く。そして台所の石を手に取り、カップに水を注ぎ、ベランダへと向かっていった。夕闇は一樹の姿をひた隠しにし、ベランダで石に水を与える彼の姿はほとんど見えなかった。

夜からはまた別の仕事があるので長居は出来ない。ぼくは急いで掃除や食事の準備を済ませ、一樹の様子を一目見ておこうとベランダに向かった。

呼び鈴の音が聞こえた。窓の手前でぼくは立ち止まり、しばらくの間玄関の方を眺める。僅かな静寂の後、もう一度呼び鈴がなった。一樹の気が散ってはいけない。ぼくは玄関に歩いた。

相手は分かっていた。鍵をあけドアを開くと、その男がのしかかるような夜を引き連れて立っていた。

「……君か」

「ええ、ぼくです」

ぼくは部屋を出てドアを閉めると、目の前の男をにらむ。

細身ながら高い身長や、はえ広かった濃い髭、するどい眼差しは威圧的だが、気の弱い男だということとはよく知っていた。弱り果てたカラスのような風貌だった。

「一樹はいるか」

細く、うわずった声だった。ぼくは答えなかった。

「会わせてくれないか」

「何度も言っているでしょう。彼はそれを望んでいません。それに他者と少しでも関わることは、彼にとって大きな害になります」

「でも、君は……」

ぼくは少し大仰な身振りをした。

「彼曰く、ぼくは空気だそうです。いてもいなくても同じで、触れることはおろか、認識することも難しい。ですから彼にはほとんど害がありません」

「……君には感謝しているよ。一樹の面倒をみてくれてるんだろ。でも流石に——」

「いまさら、父親面ですか？」

男はたじろぎ、うつむいた。やつれた顔が鈍く歪む。

「見谷さん、そもそもあなたは彼と会うことを認められてないでしょう。警察を呼んだっていいんですよ」

男はうつむいたまま、ひどく弱々しい声で言った。

「でも……愛してるんだ」

辺りはもうまるきり夜闇のうちに沈んで、晩夏の重苦しい空気が漂っていた。空には星もなかった。ぼくは、バイトの時間には間に合わないだろうと考えながら、泣き出しそうな男の顔を眺

めていた。

「どうして、そんなことが分かるんですか？　もう何年も会っていない人のことを、愛してるなんて」

何気ない疑問を、ぼくは投げかける。

男は眦にひかるものをたたえながら、一瞬、間の抜けた表情でこちらを見たが、やがて微かに笑った。

「君にはまだ分からないだろうけど、たとえ紛い物でも、親っていうのは、そういうものなんだよ。どんなに時間が経っても、たとえ顔や声を忘れてしまっても、子どものことを愛しく思い続ける……」

ぼくは乾いた笑いを我慢できなかった。

「そういうものってことは、そう決められている、ということですよ。あらかじめそう設定されているということですよ。誰がそんなことしたのかは知りませんが、そんなただの仕組みに、価値、ありませんかね」

男は何を言われたのか分からないようだった。

「異性愛も、師弟愛も、親子愛も、あるいは過去のあなたの自己愛も、自己保存の仕組みにすぎないんですよ。何を美化してるんですか」

男はしばし押し黙って、やがて絞り出すような声を出した。

「人の心って、そんな単純なものじゃないだろ……」

「単純ですよ。定められた単純なものが絡まって、複雑に見えていただけです。だから感情論抜きにしてちゃんとひもといていけば、結局はひとつの単純な原因に帰結する」

呆けたように男は掠れた笑い声をもらした。

「君、生きてて楽しいか」

ぼくは夜空を見上げた。やはり星はひとつたりとも見つけられなかった。たとえ宇宙が数多の星々を潜ませている、見えなければいけないのと同じだ。濁りきった空。それは陰鬱そうにとぐるを巻き、ぼくはそこから滲み、したたり落ちた空気で呼吸していた。

「……楽しかったとして」とぼくは答えた。「それに何の意味があるんですか？」

○

鍵を開けて自宅に入ると、ぼくはまっさきに風呂に向かう。ゆっくりと湯船に浸かっていると、やがてお湯は熱を失い、ぬるま湯と暖められた身体との温度差によって、徐々に自分の肉体の輪郭がはっきりしてくるよう感じられる。その感覚がぼくは好きだった。

風呂からあがると、歯を磨いて、森下さんの古書店で購入した本をしばらく読み、自分の部屋のベッドにもぐりこむ。けれどいつもなかなか寝付けないので、眠たくなるまでリビングでひとりお酒をのむことにする。

缶ビールをあけ、つまみを用意することもなくただのむ。空になれば次の缶を冷蔵庫から取り

出す。テレビは点けないで、音楽を流すこともない。ときどき思いついたように本を開くが、長続きはしない。やがてビールに飽きると、今度はワインをあける。味が分かるわけではない。たまたま冷蔵庫に入っているというだけのことだ。時間をかけて飲み終わる。かなり酔いは回っているが、どうしてか眠気はやってこない。濃霧のような意識の中、しかしその最奥は、鈍い痛みに似た冷徹な光が鎮している。それが消えてくれない。忘れようとした現実を、何度も目の前に提示してくる。もうどうしようもなくなって、ウイスキーを数杯、勢いよくあおる。舌と喉が焼けるように熱くなり、その熱と香りが全身へと広がる。肉体がそれになじんだ頃には、すでに意識は闇のなかにある。

いつもぼくは、そうやって眠りにつく。

○

しばらくぶりに大学に足を踏み入れると、もう蝉は鳴いていなかった。置き去りにされたようなしずけさが耳に寂しく、風にまかれる落ち葉の匂いが鼻孔を刺した。疲労を宿した太陽は、ひどく繊細な日差しをよこしていた。

秋が近かった。命が燃え尽きる季節だった。やがて命の灰が冷たく吹き散らされる季節が来る。人々は互いの胸の内のせつなさを埋め合わせるように身を寄せ合って歩いていく。

講義が行われる教室は開始五分前だというのに空っぽで、ぼくはうんざりしたような気持ちに

なった。掲示板を見ると、やはり休講だった。すぐに帰ってしまおうかとも思ったが、何となくそれも面倒で、適当な教室に入ってつまらない講義をきいた。

建物を出たところで、友人たちと談話しながら歩いてきた森下さんと鉢合わせた。

「大学来たんだ」

「大学生だからね」

「そうだった」

にひひひ、と森下さんはぼくを見上げて笑った。

森下さんはつばの短いこげ茶色のキャップをかぶっていて、ポプカットの黒髪によく似合っていた。キャップのかげがひとみに半月をつくって、きれいだった。森下さんは一度友人たちに声をかけてから、分かれてぼくと歩き始めた。

「何の講義受けてたの？」

「講義名は分からないけど、テロリズムの話だったよ。どうしてテロをなくすために人類を滅ぼそうという発想にならないのか不思議でたまらなかった」

「それ、本末転倒だよ」

呆れたように言いながら、森下さんはちらりと別れて歩いていった友人たちに目をやっていた。

「よかった？」

「え……何が？」

そう尋ねると森下さんは目をしばたかせる。

「彼女たちだよ」

「あ、うん。後で合流するし……」

僅かな憂慮が、声音に紛れ込んだ。森下さんは思いをうまく言葉に出来ずもどかしそうに顔をしばめていたが、何となく考えていることは分かった。離れていく友人たちを観察すると、森下さんが加わっていたときの和気藹々とした雰囲気は霧散し、会話も少なそうだった。その関係はどこか歪に思えた。

「森下さんはすごいよ」

ふいにぼくが言うと、森下さんは訝しがるようにこちらをあおぎ見た。

「森下さんが核になって、明るくて、暖かな関係が成り立ってる。それって本当にすごいことだよ。元いじめられっこに出来ることじゃない」

森下さんは苦笑した。

「ありがと。元いじめられっこがいうと説得力があるね」

うつむき、キャップの影が深まった。艶のある髪がゆらりと垂れる。

「でも……人と関わるってそういうことじゃないでしょ」

その声は自嘲気味な冷たさをはらんでいた。

○

森下さんとぼくは中学・高校が違ったから、小学校を卒業してからの彼女のことをぼくは知らない。けれど水のような森下さんはきっと、様々な物事を必死に受け止め、必死に耐え忍び、必死に交わっていったのだろう。そして多くの人から必要とされるようになった。多くの人に愛されるようになった……。ぼくはそれをとて嬉しく思う。

森下さんと再会したのは一年前の春、大学の講義でだった。ぼくはいまよりもずっと大学からは遠ざかっていて、その講義に出席したのは本当にたまたまだった。

何の講義だったかは忘れてしまった。ただ、果てしなく退屈だったことは確かだ。大教室で、無理矢理詰め込まれたように学生がひしめき、それぞれに惰眠を貪ったり、携帯をいじったり、友人と言葉を交えたりしていた。ぼくは一番後ろの席で机にノートを広げ、頬杖をつき、シャープペンシルを回して遊んでいた。シャープペンシルは何度回してもぼくの手の内にあって、何処にも行かなかった。当たり前のことだ。くる、くる、くる、くる。シャープペンシルは何処にも行けない。

ふいに視界の隅で、何かが光った。

教室前方、左端の列に、数人の女子学生が固まって座っていて、目を向けたときにはもう光るものはなかった。ときどきおしゃべりはしているものの、比較的真面目に講義に耳を傾ける集団のようだった。視線を戻そうとしたとき、もう一度それは光った。

隣で誰かが何か口にして、それに対して向けられた無邪気な笑顔……。無防備にさらされた白い八重歯……。ほのかに香るような光……。

森下さんだった。覚えある笑い声がきこえてきそうだった。相変わらず小柄で腕は棒きれのように細く、机に投げ出された左手には小指と薬指がなかった。

ぼくはその、僅かな遠慮も躊躇もみられない自由な左手と、彼女の周りにいるやさしいな女子学生たちを見て、心に重く、けれど温かな感情が湧くのが分かった。

手からシャープペンシルが転げ落ち、机にぶつかり、黒い芯が飛び散った。

講義が終わっても、ぼくは席をたつことなくじっと座っていた。森下さんは友人たちと話しながら、出口があるぼくのほうにゆっくりと歩いてきていた。あちらが気づかなければ、ぼくからは話しかけないつもりでいた。気づかないだろうとも思っていた。

小学生の頃、ぼくはよく彼女を見ていた。でも森下さんの方からすれば、ただのいじめられ仲間といったところだったろうと思う。いまとなっては、他人だ。旧友でさえない。

「育人くん？」

でも、森下さんは気づいた。その宝石のように透明な目が、ぼくを捉えた。

○

正午だった。晩夏といえど日差しは強まり、地面のアスファルトはにわかに発光したように白くなった。木々は残りの命を使い果たすかのごとく燃え立ち、そのほむらのなかで鳥があえ

いだ。ぼくはシャツの袖をまくった。

森下さんと別れたのち、帰宅しようと同門を出たぼくの前に、ひとりの女子学生が立ち塞がった。さきほど森下さんと一緒にいた友人のひとりだった。眼鏡をかけた真面目そうな女性で、まっすぐにつり下がるような長い黒髪が印象的だった。

女子学生は名を乗り、引き絞った弓のように張り詰めた声で告げた。

「あなたと千枝ちゃんがどんな関係かは存じ上げませんが、もうあの子と関わるのをやめていただけませんか？」

「……なんで敬語なの？ 同学年でしょ」

「親しくない人には敬語を使うようにしててくれます。そうしないと勘違いしてなれなれしくしてくるから……」

と言ってから、苛立たしげにこちらをにらんだ。

「話をそらさないでください。そんなことより千枝ちゃんのことです。あなたのような不良と千枝ちゃんが一緒にいてはいけません」

ぼくはしばらくの間黙り込んだ。何の気なしに地面を見やると、名も知らぬ小ぶりの甲虫の死骸がアスファルトにへばりついていた。死後であれ、こうしてぼくがその姿を認識したこと。このことを森下さんはどう考えるだろうか。

「どうしてそう思うの？」

やがてぼくは尋ねた。女子学生は怪訝な表情をした。

「どうして？ 分からないんですか。千枝ちゃんにとって悪影響だからですよ」

「仮にそうだとしたら、その何が問題なんだろう」

「千枝ちゃんはきつといままで何の悪意もない世界で生きてきたんです。だからこそあんなに純粹で、明るくて、やさしい子に育った……。誰のことも拒絶せず、誰とも関わっていく。私はそんな千枝ちゃんに救われたんです。こんな人がいるなら、世の中捨てたもんじゃないなって、そう思えたんです。だから守りたい。千枝ちゃんの無垢な笑顔を……」

「……正しく人を見ることは難しいよ」

甲虫の死骸に蟻が群がりはじめていた。ぼくは身体が徐々に取り崩され、運搬されていく様子を、じっと見つめていた。

「というより、不可能だ。ぼくたちは神じゃない。神になろうとすれば灰になってしまう。でもさ、正しく見ようとしなかったら、一体何のために見るんだよ」

「千枝ちゃんが、やさしくないって言うんですか？ だったらなんであなたみたいな人と……」

「そういうことじゃないんだ」

ぼくは覚えず自分の口調が熱を帯びていることに気づいて声音をおさえた。

「そういうことじゃない。ぼくが言いたいののは、ただ、森下さんのことを、君のただで完結させて欲しくないということなんだ」

「まるで千枝ちゃんのことをなんでも分かっているとでもいいかげんですね。なんです、彼氏面ですか」

「そうは言わないよ。そもそも複数人の目がまったく同じものを見ることはないから。それらの交錯のなかに……いや、とにかく、たとえ彼女が、君の思っている通りの人間だとしても——」  
そこで言葉を切った。この話をするべきはぼくじゃない。そう思った。

「……ねえ、普段森下さんと君らはどんな話をするの？」

「それを言えば、千枝ちゃんを解放してくれますか」

「……それは無理だよ。だって彼女を縛っているのはぼくじゃないから」

「もういいです。……本当に訳が分からない」

女子学生は心底うんざりした様子だった。

「失礼します。これから千枝ちゃんとお昼ご飯なんです。引き留めてすみませんでした」

そう言って女子学生は校門をくぐり歩み去っていった。ぼくは再び足元に視線をおろした。そこにはもう、あの虫の死骸は転がっていなかった。ただ、僅かにそれらしき残骸が取り残されているだけだった。あれは脚だろうか。あれは頭部。あれは内臓……？

でも、それが一体何の慰めになるだろう。いずれすべて食い尽くされる。蟻にか、あるいは細菌にか。

ぼくは、この虫のことをずっと覚えていようと強く思った。アスファルトにこびりつく生命の残滓を。少なくともぼくが生きているかぎり。……

「よくぼくのこと覚えてたね」

森下さんと再会した日のこと。ぼくははじめて森下さんの古書店を訪れていた。その古書店が存在することはずっと知っていたが、彼女の父親が経営しているのがその書店であることには気づいていなかった。

その日は森下さんの父親が店番をしていて、ぼくたちは店の奥の休憩室に入って、テーブル越しに向き合って座っていた。森下さんがいれてくれた紅茶が湯気を立て、ふたりのあいだを漂っていた。

「そりゃ覚えてるよ。いじめられ仲間だったでしょ」

「でも、ちゃんと話したことなんてなかったよね」

森下さんは含みのある笑みをみせた。

「そうだったかな」

しばらく考えてから、ぼくは首をかしげる。

「そのうち話すよ」

そう言って森下さんは紅茶を啜った。「あつっ」とあわててカップを離す。上目遣いでこちらをうかがい見て、ぼくが見つめているのに気づくと、恥ずかしそうに笑った。

いつ知ったのだろう。そういえば森下さんは猫舌だった。

「変わらないね。森下さんは」

「そう？」

ぼくは頷く。

「少なくとも、ぼくが見ていた森下さんとはね」

「そうかあ……。ちなみに私ってどんな人？」

しばし逡巡する。

「言ってもいいけど、きっと間違ってるよ」

「いいよ。関わるすべての人にそれをきけば、私はできあがるから」

ぼくは眩しいもののように彼女を見た。彼女は危うげなく左手でカップを持ち上げると、ゆっくりと口元に運んだ。紅茶が発する湯気の帯は、少し細くなっていた。

「なるほど。……じゃあそのためには、ぼくのことも知ってもらわなくちゃいけないのかな」

「そうだよ。育人くんのことを知らない私は、育人くんの知るわたしじゃないでしょ」

森下さんは、にひひひ、と笑った。

「だって、こうして会って話してるんだから」

ぼくは思わず笑みをこぼした。森下さんが笑うたびに、こうして笑うことができるのは、彼女が傷つけられていたからではなかったかもしれない。頬にかかった髪がちらちら揺れて、左の親指がそれをのかす。そのときに閉じられた澄んだ瞳が、そっと開かれるまでの一瞬が、どうしてかぼくにはとても長く感じられた。

「森下さんは水のような人だよ」

やがてぼくはそう言った。

「水のように柔軟で、忍耐強く、そして寛容だ」

「水かあ。そうだといいなあ」

森下さんは何かに気づいたように片頬をつり上げた。

「あ、育人くんはちょっと石みたいだよね」

「石？」

「そう。考え方がしっかりしてるっていうか、大人びてるっていうか、うーん。……石あたま？」  
今度は声を出して笑った。

「それはちょっと喜べないけど……でも」

「でも？」

「また来てもいいかな」

森下さんは不思議そうに首を傾けたが、すぐに微笑んだ。

「もちろん。ぜひ来て。だけどどうして急に……」

「ぼくが、ただの石あたまじゃないからだよ」

そう言ってぼくはにやりと笑い、紅茶をぐいと飲み干した。それはすでに冷め切り、宙を漂っていた湯気も消えていた。

森下さんの表情が、ひどく鮮明にうつった。

様々な表情が、連続的に現れては消えていく。

判然としないような顔、なんとなしにもらされた笑顔、ねめつけるような不満顔。そして、縫り付くような憂い。

それが、走り抜けた。

○

森下さんはいつも、ぼくに本を読ませようとする。それは小説だったり、戯曲だったり、詩だったりする。

いくつかの手記・書簡体小説をのぞいて、ぼくは小説が嫌いだった。だいたい意味が分からぬのだ。あの主人公達は、一体誰に向かって話しているのだ？ そもそも、普段からあんなに明確に言語化された思考のなかで生活しているなんてことがあるのか？ もうリアリティを追求する時代は終わったのかもしれないが、だとしてもある一定の重要さを残しているのであれば、主人公の思考など書くべきではない。人は、何も考えることができないのだから。人は思考などしていない……。あるいは三人称小説で、神の視点というとき、神とはいったい誰だ。どこにいる？ どうして登場人物の内心が分かる。神だから？ だとすれば、なぜ神が言語などという不完全なものを扱っているのだ。神はきっと、ぼくらには及びもつかない仕方で意思を伝える。神は物語ることはない。

小説はたぶん、いくつもの矛盾を孕んだまま大人になってしまった。たった数百年の短い期間

で、またたくまに。十分な反抗期も持たないまま。

だから、ぼくは戯曲や詩の方が好きだった。戯曲の持つ客観性と、詩の持つ飛躍が好きだった。人の心とは、むしろそういうものだ。

○

私は詩人ではない。そういう言い方で、自分こそが本当の詩人であると言い切った男がいる。きっとその境地は、あらゆる信頼を削ぎ落とした先にある。

○

一樹が熱を出した。近頃の急な冷え込みに、虚弱な身体は耐えがたく、脆く崩れてしまったのだ。普段からの不健康な睡眠の取り方。穀物だけの食事。それらはその病を速急に踏み殺すのは都合が悪すぎた。

ぼくは一樹の部屋に泊まり込んで看病をした。しかし彼はそれまでの生活を見直そうとはせず、薬を飲むことも受け付けなかった。ぼくにできるのは、お粥をつくって食べさせることや、異臭を放ちはじめた肉体を拭いてやることくらいだった。

やはり病気は悪化した。熱は下がらず、咳き込み、自力で立ち上がるのも困難になった。ぼく

はただ側にいた。どうかあと僅かな間だけでも、彼が平常でいられるように。その命の使いようを彼自身の意志のうちで決められるように。

月明かりがさざ波のように夜を流れ、風の重みにうねりながら落ちてくる。窓を透過し、一樹の細い肉体を白く染める。月光にはどこか冷たい魅力がある。それがあれば、他の何かを決定的に傷つけても許されるような魅力が。一樹のむき出しになった上半身は、肉付きもなく、痛々しく骨格が浮きあがっていた。皮膚の表面にはいくつもの古い痣、傷の縫い跡が生々しく残り、それらを自分の痛みのように感じた。ぼくはそのひとつひとつにそっと触れていった。

一樹はソファに仰向けになって、目を閉じている。ぼくは汗にぬれた高熱の身体を拭いているところだった。お湯で湿らせたタオルで丁寧に拭いているうち、そのいくつもの傷跡に目を奪われていた。

それらが存在するあいだ、少なくとも一樹がそれを記憶し、あるいは視界の奥に留めているあいだ、きっと彼はどこにもいけないだろう。ぼくはそれら全てを引き受けてもよかった。

左胸の痣に手を添えたとき、一樹が薄く目を開いた。その目は悲しげにぬれていた。

「夢をみえたの？」

思わず尋ね、すぐに後悔する。彼にとって大きな意味を持たないとしても、声なんてかけるべきじゃなかった。一樹はそっと顔を背けた。耐えかねたように一筋、涙があふれ、耳をつたい、ソファに染みる。

その涙の跡を、繊細な皮膚が傷つかないようにやさしくタオルで拭くと、一樹はうざったそうに身をよじった。そしてそのまま身体ごと向きを変え、こちらに背中をみせてふて寝する。やがてぼくは立ち上がり、財布だけを持って部屋を出た。

鍵を開け部屋に戻ると、一樹が重たい身体を必死に引きずって、ベランダで石に水をやっているところだった。どんなに困難でも、一樹にとってそれよりも重要なことはなかった。ぼくは部屋の隅に腰を下ろし、コンビニで買ってきた弁当を食べながら、その様子を眺めた。月明かりがこぼれ落ちる水を明滅させ、その明滅の一瞬一瞬が、胸の奥深くをつよく捉えて放さなかった。ぼくはずっとこの光景を見ていたとも思った。

ぼくのこころを遮るように、呼び鈴が鳴った。この部屋の呼び鈴を鳴らす人物など、ほとんど一人しかいなかった。ぼくは苛立って、足音を立てながら玄関に向かった。乱暴に鍵を開け、勢いよくドアを押した。

「いい加減にしてください！ 本当に警察——」

「う、ごめん……ね」

そこにいたのは、しかしあの男ではなかった。若い女性だった。怯えるように後ずさり、弱々しい目でこちらの様子をうかがっている。部屋着に近いラフな格好で、髪は後ろの方で小さくまとめている。それに眼鏡をかけている。しばらくしてようやく気づいた。

「……森下さん？」

目を合わせたまま、森下さんはゆっくりと頷いた。

高ぶった気持ちが急速に冷め、落ち着いてゆく。ぼくはドアを閉めて、彼女と向き直った。月の光に染められ、どこかはかない様子だった。

「いや、こちらこそ怒鳴ってごめん。ぼくの勘違いなんだ。でも、なんでここに？」

森下さんは安堵したように薄く笑ったあと、すぐに気まずそうにうつむいた。

「……有くん、前に一度来たきり、大学に全然来なかったでしょ。それにうちにもさっぱり顔見せないし、どうしたのかなって思ってた」

そこで少し恥ずかしげに口を歪める。

「それでお家に電話しても誰も出ないし、きいてたバイト先には行ってみたけどいないし……」

「……バイト先に来たんだ」

「あーもう！ で、とにかく、さっきまたまコンビニで見かけたから、追いかけてきたらここに着いたの」

一息にそう言って、森下さんはこちらをうかがい見た。

「それは心配かけて悪かったよ。……でもさ、コンビニで見かけたなら、そのときに声かけてくれればよかったのに」

そう言うと、森下さんは顔を背け、右手を身体の前に、左手を眼鏡にやった。

「ごめんね。こんな格好だから、最初声かけるか迷って……」

そう言って、今度は羞恥を込めた目をぼくに向ける。

「それと、バイトじゃないなら、なんなんだろうって、気に、なって」

「へえ」とぼくはにやにやしてみせる。「それでこっそりつけてきたんだ」

森下さんは詰るように仰ぎ見るが、すぐに申しなげに目をそらした。

「……そうです。ごめんなさい」

まるで犯罪を白状するかのような悲壯感を漂わせていて、ぼくは笑い声をもらす。

「別に気にしなくていいよ。心配してくれてむしろありがとう」

安心したのか、ふわりと表情を緩める。

「ううん。やっぱりごめんね。でさ……」

森下さんは言いにくそうにしばし口ごもるが、決心したような表情でまっすぐぼくを見た。

「こっって、誰の家なの？」

「友達……だよ」

ぼくは言った。月の光から逃れるように、一步身を引く。

「元々病弱なんだけど、いまでも体調崩してて、泊まり込みで面倒見てるんだ。あいつには頼れる人がいないから……」

「あいつ……。ねえ、もし迷惑じゃないなら、看病手伝ってもいいかな。いろいろ役に立てると思うし」

「いや、ありがたいけどいいよ。あいつは人見知りだし、いまは弱ってるから」

「そう……。なら無理には言わないけど。でも、今度紹介してよ。育人くんの友達なら、仲良

くしたいな」

「それは……」

しばし口ごもった。

「どうだろう。難しいかもしれない」

「どうして？」

笑顔を浮かべて森下さんは言った。

そのとき、部屋の中から何かが倒れるような鈍い音が響いた。

「何？ すごい音……」

「ちょっと待ってて」

ぼくは急ぎ部屋に戻る。台所の脇に、一樹がうつ伏せに倒れていた。呼吸は乱れ、全身から熱気を放ち、尋常でない様子だった。

「一樹！ おい！」

抱き起こし、ぼくの膝の上で仰向けにさせると、脂汗にまみれ、辛苦に歪んだ表情があった。

「これは流石に……」

一樹は、薄く目を開き、つらそうに首を横に振った。ぼくは歯を食いしばる。

ドアが開く音。森下さんが不安げな表情をのぞかせている。

「ねえ、大丈夫？」

「来るな！」

振り返り怒鳴り声をあげる。森下さんの表情に怯えがさっと張り付いた。

「でも……その子……」

ぼくの肩越しに一樹の様子を見たのか、絞り出すように心配げな声をもらす。

「いいから外に——」

そのとき、視界の半分を影が埋め尽くした。一樹が立ち上がろうとしていた。ただならない状況は変わらなかつた。いまだに呼吸は荒く、身体を動かすたびに大量の汗が滴った。しかし一樹は異常な精神力で膝を立て、腕をつき、重々しく立ち上がった。そしてぼくや森下さんに一瞥をくれることもなく、転がったカップを手にとり、台所の蛇口から水をくみ、ベランダに向かう。

森下さんは、その姿を呆然と見ていた。ぼくは拳をつよく握りしめ、半ば諦観を覚えながら、ふたりの様子を見守る。

一樹はベランダに出ると、いつも通り、石に水をかけ始めた。月影を浴び、闇の中に清純な輝きを放って、水は零れる。あどけないような気ままな音を鳴り響かせながら……。

一樹はいつものように、それを何度も繰り返した。筋力に対し過重な肉体を引きずり、幾度も脚を絡ませ倒れながら、残り微かな命を削るように、一樹は石に水を与え続けた。

森下さんは玄関に立ち尽くして微動だにしなかつた。表象できない顔つきを、じっと一樹の方に向けて。

月光はあえかに、けれど漠として降り注ぎ、ぼくたち三人を白色にぬらす。夜闇に隠した、それぞれの内なるものをさらけ出させるように。

ぼくはその光に身を任せることを、もう躊躇わなかった。

一樹の気が済み、ソファに倒れ込むまで、ぼくは動かず、口もひらかず、じっとそこにいた。

○

一度だけ、森下さんの父親と話したことがある。彼女に会いに古書店を訪れたが、あいにく席を外していて、一冊手頃な本を購入して帰ろうとしたぼくを彼が呼び止めたのだった。

「あの子とどうか仲良くしてやって欲しい」

彼は優しいな声音でそう言った。

「もちろんです。でもべつにぼくに頼まなくても、いまの彼女にはたくさん友達がいますよ」

「そうだね」と彼は回顧するように視線を宙にやった。

「あの子が幼い頃の話なんだが、書棚の下敷きになって指を切断したのはきいてるね。それで私はきっとこの店の手伝いなんて嫌がるだろうと思って遠ざけた。防災の不備の謝罪の気持ちもあつたし、なにより心配だった。でもあの子は、自分から手伝いたいと言いつ出すんだ。おかしなものだろう」

「彼女はとても強い人ですから」

「私もはじめそう思った。この子はなんて強いんだろうと。でも、違った。はたらいっている姿を見ていてふと思ったんだ。この子は、こうしないと、強くあろうとしないと生きていけないのか

もしれない。何かに立ち向かっていないと不安でたまらないのかもしれない。本当は苦しくて悲しくて泣き叫びたいと思っても……」

そこでふいに言葉を切った。そしていいづらそうに口を開く。

「あの子がいじめられていたのは知ってる。見ていれば分かった。でも、こちらがあたふたして、手をこまねいているうちに、自力で乗り越えてしまった。……それまでに、一度だって頼られたことはなかった」

何を言いたいのか、ぼくには分かった。

「でも、私は頼って欲しかった。立ち向かわなくていい。弱くてもいい。それでも、ただ今ここにいることに価値があるんだって、分かって欲しい……」

彼はぬれた瞳でぼくを見た。

「あの子もいまではよく遊びに行くし、うちにもたくさんのお友達を連れてくるようになったよ。でもね、きっと彼女たちは、あの子のそういう危うさを知らない。本当は助けが必要なんだってことに気づいていない。だから……」

と彼は続ける。

「どうか君に、仲良くしてもらいたいんだ」

でも、ぼくには分からなかった。

「なんで、ぼくんですか」

彼はおちよくるように白い歯を見せた。

「君といるときあの子は、ときどき寂しそうな顔をするから」

○

弱くて、何かに立ち向かうことのない森下さん。そんな人のことを、ぼくはたまに思い浮かべる。彼女は本を嫌っていて、失われた指を恥ずかしながら、あまり外にも出たがらない。いじめられてもしたらそれに拍車がかかり、不登校になるかもしれない。それでも心優しいから、両親に愛され、数少ない友人と親しみ、自分の価値を確かめながら、いずれなんとか仕事も見つけ、小さく幸福に生きていくだろう。そんな人生も悪くはないと思う。

でもぼくは、それなら、水のようにだなんて言い方は、決してしないだろう。彼女の笑顔を、こんなにも待ち遠しく思ったりは、しないだろう。

○

一樹はソファで眠っていた。少しは体調も落ち着いたようだった。多少不規則ながら、静かな寝息を立てている。それを横目に見ながら、ぼくと森下さんは、部屋の隅にそっと隣り合って座っていた。

ぼくは弁当と一緒に買ってきたぬるくなったビールでときどき舌を湿らせる。森下さんは黙っ

込んでいた。

月光はいまだ降り注ぎ、ぼくたちのことも、部屋のあちこちも、白く染めていた。

一樹が寝返りをうった。ソファから転げ落ちるかと思え、ぼくは思わず腰を浮かせる。

「ねえ」

その様子を見てか、森下さんが静かに切り出した。

「一樹くん、だっけ。ずっと面倒を見てたの？ 病気になる前から」

「そうだよ。高三の終わりにはじめたから、あと少しで二年になるね」

「一樹くんの親はどうしてるの？」

「いない。だから、お金の面倒もみなくちゃならない」

「だからバイトを……」

得心がいったようにも、いってないようにも見える表情を浮かべる。

「なんで、そんなに苦労してまで……」

ぼくはしばらくのあいだにも答えなかった。静寂が部屋を満たした。どこからか断続的に虫の音がきこえ、一層静かだった。

「……生きていくために、必要なことだからだよ」

やがてぼくはそう答えた。森下さんは考え込むように両腕に顔を埋めたが、しばらくすると顔を上げ、ぼつりぼつりと話し始めた。

「何かと向き合わなければ、生きていけない人っていうのはいると思う。それは大抵他人からは

想像もつかないことで、想像できたとしても共感はできないことがほとんど。それが、たとえば私は、この指だった」

森下さんは左手を自分の顔の前に持ってきた。

「そういう人はきっと、自分なりの仕方、乗り越えようとする。乗り越えられることもある。でも、だからって平気なわけじゃない。だって誰も理解してくれないから。それはとても孤独……。だから、自分の生き方を認めてくれる誰かに、そばに居て欲しいと願う……。そうすれば、生きていけるのって思う……」

森下さんは、泣きそうな顔でぼくを見た。

「ねえ、その役、私じゃだめ？」

ぼくは何も言えずに黙り込んだ。

「私が向き合っているもの、もうひとつあるの。それは多分、育人くんと同じ。そしてそれは、育人くんが目の当たりにさせた……」

困惑して、ぼくはちらりと森下さんの方に目を向けた。彼女はじっと正面を見つめていた。そこには何もない。何もない……。

「はじめて話したときのこと、覚えてる？」

思い起こしたが、いつのことだったか分からなかった。

「小三のとき……確か冬だったかな」

小三……。ぼくはそのとき、森下さんの顔も名前も知らなかったはずだ。会話などしたことが

あったらどうか。

「そう、冬だ。すごく寒かった。寒くて震えてた……。昼休み、誰かに上着を隠されて、教室にも居場所がなくて、薄着で外に出た。校舎裏の階段に座って、丸まって授業の始まりを待ってた。太陽の光は少し暖かかったけど、風が強かった。冷たい風が吹くたび、身が切られるようだった。そのとき、育人くんが通りかかった。なんで校舎裏なんか歩いてたのか分からないけど、とにかく空を眺めながら、ふらふらと歩いてた。私は育人くんを知ってた。私と同じで、ずっといいじめられている男の子。私へのいいじめは陰湿だったけど、育人くんには暴力も多い。そのときも顔に痣をつくっていた。すごく痛々しかった。

ふと、育人くんが私を見た。観察するみたいにじっと。私は気恥ずかしくなって身をよじった。育人くんは近づいてきて言った。

——寒いのか？

——うん。

——なんで寒いのか？

——寒くないのか？

——寒いよ。

意味が分からなかった。何を言いたいのか分からなかった。申し訳ないけど、ああ、これはいいじめられるなあと思って思った。でも、震えている私に、育人くんは手に持ってた水筒を差し出してくれた。おずおずと受け取った私に、飲んでいいよってやさしく言ってくれた。飲むと、レモン

ティーだった。とても熱くて、最初は飲めなかったけど、少しすると飲めるようになって、温かくて、甘くて……。

水筒を返すと、育人くんはまたふらふらと歩いて行った。私はその背中に言った。

——ねえ！ いじめられて、痛くないの？ 悲しくないの？ つらくないの？

育人くんは私と同じでずっといじめられていたけど、でも、感じ方は全然違うみたいだった。ものを隠されても、無視されても、なぐられても、服を脱がされても、平気みたいだった。つらくなんてないみたいだった。だからそう尋ねた。ねえ、そのとき、なんて答えたか覚えてる？

——傷つけられるとき、ぼくの何が傷ついてるんだろう。傷つけられているぼくは、一体どこにいるんだろう。

育人くんは、疲れ切ったのか、何も感じてないのか判断のつかない顔でそう言った。

やっぱり意味は分からなかった。でもその言葉はずっと私のなかに留まった。まるで残雪みたいに。

そんなこと、大学生ともなれば誰もが通ってきた思索の道だと思う。でも私は、当時の幼さで、純真さで、絶望的なその問題と向き合わなければならなくなった。それでも私は私なりに答えを出して、それを柱にしていまも生きている。ねえ、育人くんのせいなんだよ。私がこんな生き方を選んだのは。こんな、誰も選ばないような生き方。責任、とってよ。ちゃんと、私のやり方は間違っていないよって、そばにいて、何度も言っただよ。そうすれば……私は……」

森下さんは、両腕の中に顔を埋め、くぐもった声で泣いた。白い光が、隠されていない頬や、

耳、繊細な髪を流れていく。小さく嗚咽をもらすたびに、光がちらちらとゆれ、影が暗くふるえた。

ぼくはもう二度と見ることはできないような気持ちで、彼女の横顔を見つめていた。

「……ぼくは、森下さんの生き方が正しければいいと、そう思うよ」

森下さんは半分だけ顔をこちらに向けた。月影が涙に濡れた瞳に沈み込んで、深いところで鈍く光った。縋り付くような光だった。

「でも、ぼくはまだ、もっと理想的な結末を期待してる……」

「理想的な、結末？」

掠れた声で、軽蔑的な笑みをにじませて、森下さんは問いかける。

「ぼくはね」

そして、軽蔑されるに値する、幼稚な答えを口にした。

「魂の存在を、信じたんだ」

○

自己など存在しない。人間には自由意志もなければ責任の付随する行為もない。もちろん魂もない。そんな当然の事実に気づくのが、ぼくは他の人よりも少しだけ早かった。普通なら、せわしない日々の中で通過していくはずの一思索。それが、無垢で時間を持て余した子どもには、全

生活をかけて批判するべき命題となった。

生きていくための行為が、生きるということから切り離された時代においては、両手はあらゆる機能を失い、人は人からは産まれず、倫理は効率に冒瀆される。存在すること、存在し続けることに価値を見いだす社会においては、その重圧と不可能性によって人はむしろ退廃し、安易な価値に生命を投棄する。

この絶望的な日々に必要なとされるのは意味だ。生きる意味……。

意味とは何だ？ 幸福であること？ 永遠であること？ 与えられているもの？ 自分で定義づけるもの？ 分からない。けれど少なくとも、自己がなければ、そこに意味が発生する余地はない。

自己はない。人は遺伝子と経験によって構築され、そこに自由意志は介在しない。そして自由意志のない存在による行為には責任は伴わない。

一樹の言葉を借りるなら、ぼくたちは高い山の頂上から転がされる石ころのような存在だ。あのごっこつしたかたちは石自身が選択したわけではないし、転がすのも「何者か」であって石の考えではない。また、転がり落ちるときどのように転がるかは、もとの石のかたちから、転がる中でどのように研磨されたかにかかっている。たとえば都合悪く人の頭に向けて転がっていったとして、それはそういう軌道になるように地面を叩くにいった、研磨された石の形態のためだ。その研磨は石の自由裁量の範疇ではない。石に人を害そうとする意識があったわけでも、そちらに転がろうという欲求があったわけでもない。ぼくたちも、そうだ。あらゆる思考・行動は敷か

れたルール上を進んでいくだけだ。そこに自由意志などない。

だとすれば、意味など、ないじゃないか。生きることに意味など……。

ぼくは絶望の淵にいた。そこから何処にも逃れることができないまま、四千の日と夜を跨いだ。その日夜、二人の人物に出会った。

一人は、小柄で、左手から二本の指を失った少女だ。彼女は絶望の底に突き落とされながら、それでも這い上がり、必死に生きることを目指した。あらゆる関係性と時間軸の交錯のなかで発生する仮初めの自己を自己であると信じ、守り抜いていく道を選んだ。

ぼくは彼女を憧憬した。その生き方の正しさを願った。でもぼくには信じられなかった。

人は死ぬし、残したものもいずれは果てる。すべて滅びゆく運命にあるぼくたちには、未来に託していく希望もないのだ。ぼくには希望が必要だった。自己が、意味が存在することを信じさせてくれる希望が。

そんなとき、一樹と出会った。一樹はぼくにそのすべてを得る方法をくれた。ぼくは一樹に託すことにしたのだ。ぼくの持ちうるすべてを。

ぼくが、生きていくために。

○

高一の春。自宅から数キロ離れた住宅地を当てもなく歩き回っていたぼくの前に、一樹は現れた。

まだ冷たさを残す空気が暖かな微風に取り払われる昼下がり、空には雲ひとつなく、陽光は家々の窓や庭木の葉、自動車のボンネットにきらめいた。

人影はなく、虫のさざめき、鳥の羽音、どこからか漂うピアノの旋律だけが生命の痕跡だった。だった……。

水の音がきこえた。微かにだけれど確かにきこえた。空間を様々に駆け巡り飛び跳ねる自由な水の音。けれどそこには、物理法則の檻のうちでもがき喘ぐような悲痛さがあった。その悲痛さは、ぼくの胸の内で疼くものでもあった。

向かおうとしたとき、ふいに水音は途絶えた。呆然と立ち尽くすぼくにあきれるように、もう一度水音が響きはじめる。

ぼくは歩いた。半ば走った。角を曲がり、十メートルほど進み、再び曲がった先のアパートメント。

そのベランダに、一樹はいた。

無骨な石に、光る液体を滴らせているその姿に、深く魅入った。

こうして、ぼくは一樹に出会った。

「何してるの？」

見上げてそう言ったばかりに、一樹はきつとぼくが彼に見たのと近しいものを見た。その目は電線の上で人間を観察するカラスのような目だった。

「生きる意味を探してるんだ。死ぬために」

それからぼくは一樹の部屋に出入りするようになった。施設を出て越してきたばかりらしく、部屋はほとんど空っぽで居心地が悪かったが、数週間経った頃には自分の家の自分の部屋よりも馴染んだ。

一樹は今からは想像できないほど饒舌だった。自分の過去、思想、目的、ありとあらゆることを話した。

そのいくつもの言葉が、今でも唐突にぼくの脳を埋め尽くす。

○

一樹は言った。

僕はここにいる。ここにいるんだ。……

○

自己を獲得するためには、すべてを知る神になるか、何も知らない産まれる以前に退行するしかない。人は神にはなれない。神になろうとすれば、言葉は焼き爛れ、肉体は灰になって散るだろう。

○

思ってしまったんだ。こんなもの、なければいいって。そうすれば、生きていけるって。自己なんてなければ、生きていけるって……。

それが間違いだった。

○

存在することに意味があるなら、存在しなくなれば意味はなくなるのか。存在したことに意味があるのなら、滅んだっていい。

意味があるなら、死んだっていい。

○

夢を見るんだ。石が、山の頂点から転がり落ちていく夢を。その過程で角を取られ、様々に跳ね、土に汚れ、草を挽ぎ、木々を削り、無様に落ちていく。

誰が思うだろう。その石が自由だなんて。

その石が、僕らだなんて。

○

ただの願掛けみたいなものだよ。

○

僕は何も見るとわけにはいかないし、何もきくわけにはいかないし、何も触るわけにはいかない。そのすべては果たせないにしても、人と関わることは絶対に避けなくてはならない。

ところで君は、空気みたいだな。

これは、褒め言葉だけ。

○  
もしも、もしも石からさ……

○  
遺伝子以外のすべてを、僕から削ぎ落とさなくてはならない。

魂が遺伝子を規定しているとすれば、その全体を顕現させることで、魂を担ぎ出すことができる。かもしれない。

○  
すべての記憶を忘却し、すべての感覚を捨象し、すべての言語に見放されたところに、僕はいる。

○  
もしも、この、河原で拾ってきたような、何でもなし石からさ……

○

欺し合い、信じ合い、奪い合い、与え合い、殺し合い、救い合い、憎み合い、愛し合い、でもそれらすべてが、はじめから決められていたものだとしたら、どうして生きなければならない？ その悲しみにたえてまで、どうして生きなければならない？

その悲しみさえ嘘偽りだと知りながら……。

僕たちは訳も分からずこの世界に投げ出され、ただそのように産まれてきたからそのように生きているに過ぎない。

生きろと命じられたから、生きているに過ぎない。

それに、何の価値がある。

○

なあ、君に頼みがある。君にとっても悪くない頼みだ。契約と表現した方が適切か。

君は数年の間、僕の生活を支えてくれればそれでいい。

僕はこの命をかけて、魂の存在を証明する。

○

もしも、この石から花でも咲けば、少しは信じられるんじゃないか。  
自己の、  
自由意志の、  
魂の存在を。

○

君が、生きていくために。

○

何かが、崩れ落ちる音がした。

○

「え？」

森下さんが振り向いた。

○

何だか、変だな。

○

変だ。

○

心が冷たい。

○

いや、心なんてないんだって。

○

でも、冷たい。

○

ぼくも振り向いた。

一樹が床に倒れ込んでいた。

森下さんが駆け寄っていった。

○

痙攣する身体。脂汗の噴き出す肉体。うなり声をもらす喉。

涙に塗れた頬。

○

愚かだろうか。こんなことに縋り付くしかない僕らは。

○

「——救急車！」

森下さんが叫んだ。一樹に寄り添い抱きしめるようにして身体を暖めている。

○

でもみんな、そうやって生きてる。

○

月光が、細く垂れる。

○

一樹の頬に触れる。



.....。



.....。



冷たく、硬く、石のように.....。



冷たい.....。



.....。

○

一樹の死体をまさぐり、堅く抱え込まれた石を丁寧に取り出し、森下さんがぼくに近づいてくる。

「見て」

と森下さんは石をぼくの目の前に差し出した。

月に照らされた森下さんの表情は毅然として、ぼくは怖くなった。

強く目をつぶって、顔を背ける。

そんなぼくを、森下さんの腕がやさしく包んだ。あたたかく、甘いぬくもりだった。ぼくが手を取ると、それは左手だった。

失われた指を、ぼくはぎゅっと握りしめた。

(文学部文学科二年)

## 透明な不幸

冬野 ヨル

子どもの頃、世界は今より少しだけ広くて、鮮やかだった。

いつから、こんな気持ちを抱えていたのだろう。いつまで、こんな気持ちを抱えていくのだろう。靄のかかったようなこの世界は、次第に色を失い、迫ってくる。どうしようもない閉塞感に、息が詰まりそうになる。助けて。その一言を発することもできない。だって、本当は苦しくなれないはずだから。自分は幸せなのだから。だから、「助けて」なんて、言えない。それでも世界は少年を押しつぶすかのように迫ってくる。苦しくない、苦しくない、そう念じながらも、意識が遠のいていく。現実から目をそらすために固く目を閉じた少年は、そのまま深い闇へと落ちてゆく。声にならない声で、何かを叫びながら。

「た……け……」

また、あの夢を見た。カーテンの隙間から差し込む鈍い光を浴びて、少年は重い瞼を開く。開

いたばかりの瞳が最初に認知するのは、少年の部屋の天井だった。ちょうどベッドの真上辺りにある兎のような形をした染みは、昔から何も変わっていない。小さい頃はあの染みが妙に恐ろしく見えて、眠るまで母親に付き添ってもらっていた。厚めの掛布団を押しつけてゆっくりと起き上がりながら、少年はそんなことを思い出していた。時計に目をやると、午前七時きっかり。いつも通りの時間、いつも通りの朝だ。ベッドからのそりと抜け出して、カーテンを、勢いよく開く。どうやら今日は曇天のようだ。窓から見える風景は、雲というフィルターを通して白く濁った太陽光に照らされて、灰色に見えた。いや、灰色に見えるのは別に天気の良いではない、か。少年は小さくため息をついて、高校の制服に着替え始めた。パジャマにしていた中学の文化祭で作ったクラスTシャツを脱いだとき、自分のやせ形の上半身がじっとりと汗ばんでいることに気が付いた。

(そろそろ布団、仕舞おうかなあ)

少年はベッドに目を向ける。考えてみれば去年の十一月頃からずっと厚手の掛布団を使い続けている。今はもう七月だ。外にいれば何もせずとも汗が流れ落ちてくる季節になってきた。学校から帰ったら布団を仕舞おう、そんなことを考えながら、制服のシャツに袖を通す。下の階からは母親が朝食の準備をする音が忙しく聞こえてくる。彼が暮らす家はごく普通の一軒家で、一階にキッチンやリビング、浴室などがあり、二階には少年の部屋と両親の寝室があった。少年の部屋は同年代の友人たちの部屋と比べると些か広く、十畳ほどの面積があった。少年には昔から兄弟がいなかったため、その広い子供部屋を独り占めできた。兄弟が多く、部屋を共有している

友人はそのことを頻りに羨んでくるが、幼い頃はそれが当たり前だと思っていたからか、特に何も感じなかった。しかし成長していくにつれて、自分には友人たちのように、同じ血を分けた兄弟というものがいないのだと自覚すると、途端に部屋の中に一人ぼっちでいることが寂しく思われるようになっていった。家の中に同世代の人間がいけないというのは、存外孤独を感じるものだ。それに、兄弟の話をしている友人たちの輪に入っていけないことで疎外感のようなものを感じることもあった。しかし今となってはもう慣れきってしまって、そんな感情も抱かなくなっていた。少年は朝食を取るために、入学時に購入してから一年以上使い続けている通学用のカバンを手にして一人きりの部屋を後にしようとした。その時、カバンから何かが転がり落ちた。その何かは床に落ちた拍子に部屋の入り口近くにある棚の後ろに入り込んでしまった。焦って手を伸ばすも、あと少しのところまで届かない。周りを見渡すと、机の上にあるボールペンに目が留まった。父が以前、会社でもらったが自分は使わないから、と言って少年にくれたものだ。しかし、側面には父の勤める製薬会社のロゴが大々的に書かれているため、何となく恥ずかしくて家の中だけで使っていた。そのボールペンを手に、再び棚の後ろへ腕を差し込むと、先ほど転げ落ちていったものが引っぱり出された。それは、少年の通っている高校の生徒手帳だった。氏名の欄には「蓮見翔太」と書かれている。生徒手帳を失くすと後々面倒なことになるのは明白だったので、しっかりとカバンの中に仕舞いなおす。そしてボールペンを机の上に戻そうとしたとき、先の方に埃が付着しているのが目についた。そういえば棚の後ろはもう何年も掃除していない。というよりも、結構な重量があるため基本的には動かすこともなく、掃除もしていなかったのである。

(帰ったらここの掃除もしようかな)

そう考えながら翔太は柵の後ろを覗き込んだ。すると、奥に何かがあるのが見えた。ピンクの布のようなものの端が見えている。

「……?」

翔太は再び製薬会社のロゴ入りボールペンを柵の後ろに送り込む。しかし今度はかなり奥の方にあるようで、中々届かない。腕をひねったり向きを変えたりと、試行錯誤の末について手前に引き寄せることが出来た。引き出してみると、それはピンク色のクシャっとした布の塊だった。いわゆるシュシュというものか。翔太にはこれまでの人生からして完全に無縁のものだった。なぜそんなものが翔太の部屋にあるのか。疑問に思っていると、階下から彼を呼ぶ声が聞こえた。

「翔太、起きてるの?早くしないと遅れるよ」

母の声だった。時計を見るとすでに長針は三の数字を横切ろうとしていた。学校までは徒歩で二十分程。朝のホームルームは八時に始まるので、その五分前には着席したい。となると、あと二十分で朝食をとって支度をしなくてはならなかった。それなりに急がないといけないようだ。

「今行くよ」

母親にそう声をかけて翔太は部屋を出る。先ほどのシュシュは制服のポケットに無意識に押し込んでいた。階段を駆け下りてダイニングへ向かう。テーブルの上には目玉焼きと焼いたベーコン、白いご飯、コーンスープが乗っていた。

「早く食べちゃいなさいね。でないと遅刻しちゃう」

母親は翔太の弁当箱の蓋を閉じながらそう言った。翔太の通う高校には食堂というものがなく、昼食は弁当を持参するか売店でパンを買うかの二択になっている。翔太の母親は毎日朝早くから弁当を作ってくれていたもので、売店を利用することは滅多になかった。保冷バッグに弁当を詰める母親を横目に、翔太は黙々と朝食を口に運ぶ。そして用意された朝食をすべて食べ終えて、席を立て身支度を始めた。洗面所で鏡の前に立つと、いつも通りパツとしない少年が映っていた。ニッと笑顔を作ると、ちらりと八重歯がのぞく。残念なことに「カッコイイ」とか、「イケメン」とか、そういった言葉とはほどほど無縁な人生を送ってきた。自分の容姿に大きな不満を抱いているわけではなかったが、もし美形に生まれていたら、今とは異なる人生を歩んでいたのだろうかと思っているため、歯磨きや寝癖直しは少しだけ念入りに行う。そうして身支度を済ませ、玄関に向かう。母親から受け取った弁当をカバンに入れて、学校指定のローファーに足を入れる。「いってらっしゃい、気を付けてね」

「ありがとうございます」

曇天の中、いつも通りの道を歩き出す。たしか今日の一時間目は数学だったか。朝から苦手科目の授業があることを思い出して少し憂鬱な気分を抱えながらも、翔太は学校に向けて歩を進めていった。

教室に入るとクラスのほとんどの人間はすでに登校していて、皆それぞれの会話に盛り上がっ

ていた。何人かのクラスメイトにおはようと声をかけられ、挨拶を交わす。些細なことだが、誰かと挨拶を交わすということは、自分の存在が他人に認知されていることの証明であるように思われて、少し安心する。そして翔太は自分の席に着くと荷物を置き、腰を下ろした。するとすぐに二人の男子生徒が駆け寄って来た。一人は茶髪に近い髪色で、制服のシャツがズボンからはみ出しているちゃらついた見た目の男子、もう一人は翔太と同じく黒髪短髪で、そこに眼鏡をかけた真面目そうな男子だった。

「おはようショータ！なあ聞いてくれよ！」

茶髪の男子、乾太一が泣きそうな顔で訴える。彼がこんな顔で訴えてくる時の話の内容は大體想像がつく。毎度のことだった。

「落ち着けよ乾、蓮見は今来たばかりなんだぞ」

横から眼鏡をかけた方がたしなめる。これもまた毎度のことだった。彼、坂木隆成は見た目通り真面目な男で、生徒会にも所属している。軽そうな見た目の太一とは、外見も中身も正反対だった。

「蓮見、今日放課後は何か予定あるか？もしなければいつもの店に寄っていかないか」

いつもの店、とは学校近くのバーガーショップのことだった。翔太と太一、隆成の三人はよく学校帰りにその店に立ち寄っていたのだ。値段が安くて量もそれなりにあるので、お金のない学生にはもってこいの店だった。その上長居しても何も注意されないため、何か相談事があるときにも利用しやすかった。翔太はその日は特に予定もなかったので首を縦に振った。

「いいよ、どうせ暇してたし。またたいちのいつものやつでしょ？」

翔太は少し笑いながら問いかけた。

「いつものって言い方やめろよ！」

三人が談笑していると、教室の前方の扉が開いて担任の松木先生が入ってきた。眼鏡をかけたやせ型の男性で、年齢は三十代後半。指導教科は英語を担当している。去年の夏ごろ一人目の子どもが生まれたそうで、昼休みによく生徒に自慢していた。親しみやすく、生徒からの人気も高い先生だ。

「はい、席について。ホームルーム始めるよ」

先生がそう言うと、教室中に散らばって好き勝手に話していた生徒たちがぞろぞろと自分の席へ戻り始めた。太一と隆成も「またな」と言いながら自分の席に帰っていった。翔太は椅子に座り直しながら、放課後の予定が埋まったことを密かに喜んでいった。部活にも委員会にも所属していない翔太は、あの二人と遊んでいるとき以外は基本的にまっすぐ帰宅して自宅で静かに過ごしていた。そういう過ごし方が嫌いというわけではないが、やはりどこか物足りなさというものもある。かといってあの二人以外のクラスメイトは遊びに誘うほど仲がいいわけでもないもので、結局はいつものメンバーで過ごすか一人で過ごすかの二択になっていた。しかし最近は二人ともそれぞれ忙しくてあまり遊べていなかったので、翔太は久しぶりにワクワクしていた。それと同時に、ほっとしてもいた。というのも、最近一人でいると妙な不安に襲われることがあるのだ。その不安は理由もわからないまま翔太に絡みつき、絞めつける。そんな奇妙な気持ちも、誰かとい

ることで少しは和らぐのだ。翔太はあの二人に助けられていることを強く実感していた。

(早く放課後にならないかな……)

そんなことを思いながら、翔太は松木先生の朝の連絡を聞き流していた。カバンを開き、数学の教科書とノートを取り出して机の上に置く。いつも通りの、一時間目が少し憂鬱な、曇天の一日が始まった。

「だからさあ、俺の何がいけないかったのかわからないだよ」

大きなハンバーガーを口いっぱい頬張りながら太一が嘆いた。翔太たち三人はいつものバーガーショップの奥の席に陣取っていた。店内は学校帰りの高校生や中学生でごった返している。この地区には学校がいくつもあるため、翔太たちとは違う制服を身に纏った人も多くいた。楽しそうに談笑している人や、泣きながら何かを相談している人、一人で満足げにハンバーガーを頬張っている人など、そこには様々な表情が浮かんでいた。そんな中でも太一は特にわかりやすく落ち込んだ表情を浮かべていて、隆成はにやにやと面白そうに笑みを浮かべていた。

「大体あっちから告白してきたくせに、付き合ってみたら何か違ったって！何かって何よ！」

詰まるところ、太一は翔太と隆成に失恋の相談をしていたのだ。二人は太一のこの手の相談にはもう慣れていた。翔太と太一は一年生の時から同じクラスで仲が良かったが、失恋に関する相談はこれでもう五回目だ。運動神経がよく、性格も明るい太一は女子からよく告白されるが、そ

の軽い性格が災いして大抵一か月もたらずに破局を迎える。

「またお前が他の女の子に目移りしたとかじゃないの？」

隆成がコーヒースをすすりながら尋ねる。傍らには小さなパンケーキがある。ビッグバーガーセットにエルサイズのフライドポテト、期間限定のスパイシーチキンバーガーまでトレイの上に所狭しと並べられた太一の食卓とは大違いだ。

「してないよ！今度は！」

ポテトを三本ずつ口に放り込みながら太一が反論した。翔太は笑いながらチーズバーガーにかぶりついた。安定の味だ。セットを注文しているのでポテトとドリンクもついてきた。おやつとしては十分な量で、味も人気ナンバーワンだけあって文句ない。

「そういえば太一、今日部活は？」

太一は陸上部に所属していて、短距離のエースとして活躍していた。そのため普段は部活で忙しくてあまり遊べないのだ。だから、こうして三人で遊ぶのは基本的にテスト期間で部活が休みの時か、大会直後で練習が休みになった時だった。

「今日はコーチが来られないとかで無しになった。それに关してはラッキーだね」

彼は好きで陸上をやっていたが、その性格上練習自体は面倒くさく、よくサボりたいとぼやいていた。

「にしてもリユースーはいいいよなあ、中学からずっと同じ彼女と付き合ってるんだろ？しかも可愛いし。長続きのコツとかあるの？」

隆成は中学二年の頃から今までずっと付き合っている彼女がいた。翔太と隆成は中学が一緒なので、翔太はその彼女のことを直接知っていた。明るくて可愛らしい女の子だ。まさに隆成に似合っていた。一度も彼女が出来たことのない翔太から見ても、隆成はやはり羨ましい。

「さあね……あ、もうこんな時間か、そろそろ帰らないと」

隆成は腕時計に目をやってそうだった。時刻は五時半を回っていた。

「昨日も一昨日も生徒会で遅くなったから今日は早く帰らないと」

隆成の家は父親が厳しく、こういった遊びはあまりよく思っていないのだ。だからこうして帰宅が遅くなりそうなきはいつも生徒会の仕事、ということにしているのだ。それが三日連続ともなれば、流石に怪しまれてしまう、そう考えたのだろう。太一は不服そうな顔をしながらも仕方ない、と言って腰を上げた。翔太も続いてトレイを返却しに行った。そのまま三人は店を後にして家路をたどった。

「悪いな、いつも」

隆成は少し申し訳なさそうな表情を浮かべる。三人で遊んだ時の帰宅のきっかけは、大抵隆成からの申し出だった。しかし二人とも隆成の家のことは知っていたので、今更どう思うこともなかった。

「じゃあ、また明日！」

三人はそれぞれの家の方向へ散って行った。翔太も、一人家路を急ぐ。どこか空虚な気持ちを抱えながら。今日は確かに楽しかった。楽しかったのだ。仲のいい友人二人と久々に遊んで、色々

な話を聞いて、悩みを聞いて。それなのに何故、こんな気持ちが湧いてくるのだろうか。二人と別れたからだだろうか。きつとそうだ。さっきまでが楽しかったから、少し寂しく感じているのだ。そうに違いない。そうやって気持ちを飲み込んで、翔太は家に帰った。形のあっていないパズルのピースを、無理やり押し込んでしまったような違和感を、胸に抱えたまま。

帰宅後すぐに制服を着替えて、掛布団を押し入れに仕舞った。これで寝汗をかくこともないだろう。そして棚の裏を掃除しようとしたとき、今朝のシュシュのことを思い出した。母親に聞いてみようと思っていたが、何となく聞くのがためらわれて、結局夕食の時も聞けなかった。夕食後に風呂に入りながら、自分の中で先ほど感じていた違和感がどんどん膨れ上がっていることに気づいた。空虚な気持ち、理由のわからない不安が、翔太の心を絞めつける。ああ、きつとまた今夜もあの夢を見る。そう思うと、眠るのが怖くなった。翔太は、この気持ちの正体が知りたかった。知って、解放されたかった。形のない不安から、自由に解き放たれたかった。何も考えずに、自由にのびのびと過ごしたいだけなのに。そんなとき、翔太の頭をふと昔の記憶がよぎった。あの少女の記憶。小さいころ、母方の祖父の家に夏休みに遊びに行った時の記憶だ。自由。解放。のびのびと過ごす。そんなワードが、彼女のことを思い出させた。あの頃一緒に野原を駆け回って遊んだ少女。今はどこで何をしているだろうか。思い出すと急に会いたくなる。何故かはわからないが、今すぐにでも彼女に会いたいと、そう思ってしまう。祖父の家にはたしか六歳の頃に

行ったきりで、それ以来一度も行っていない。母親は以前実の父である祖父と大喧嘩して以来仲が悪く、基本的に会いたがらないのだ。たしか六歳の時は祖父が翔太に会いたがって仕方なく連れて行った、という風に言っていた。喧嘩の理由は聞かされていないが、十一年も疎遠になるくらいだ。きっと何か大きな出来事があったのだろう。翔太はどうにかしてまた祖父の家に行きたいと思った。あの少女が今もあの町にいと決まったわけではないし、寧ろ出ていった可能性の方が高いだろう。それでも、あの風景を見れば、何か得られるのではないか、自由になれるのではないかと思ったのだ。そこで、翔太は風呂から上がった後、試しに母親に尋ねてみることにした。

「母さん、久しぶりにおじいちゃんの家に行きたいんだけど」

いきなりの申し出に母親は些か驚いていた。それもそうだろう。あの夏の後家に帰ってからはばらくはまた行きたいと駄々をこねていたそうだが、それ以来十一年間一度もそのことを話題にしたことがなかったのだ。驚くのも当然だ。しかし、その返事は意外にも肯定的だった。

「そう。覚えていたのね。あなたの方から言ってきたのは意外だったけど、いいんじゃないかしら。いい加減母さんも顔を出さないといけない頃だと思っていたし……。父さんの仕事の都合がつくときに行きましようか」

そういった母親の顔は、どこか悲しげに見えた。母親が祖父のことをよく思っていない気持ちは変わっていないはずだ。しかし、その表情は嫌なことがあったというよりも、悲しいことを思い出したかのようなものだった。ともあれ、翔太は祖父の家に行けることを嬉しく思っていた。

あの子に会える。なぜ今になってこんなにも心惹かれるのかはわからない。彼女に会うことが翔太にとってどんなメリットがあるのか、不安を拭い去るきっかけになるのかもわからない。それでも、何か一歩前進したような気持ちになった。そして翔太は意気揚々と自室に引き揚げ、その日の分の課題を終わらせてから床に就いた。薄いタオルケットを被りながら、あの夏のことを思い出していた。あの子は、「カナちゃん」は、今もあの場所にいるだろうか。もしいたら、自分のことは覚えているだろうか。何を話そう、何をしよう、そんなことを考えていると、いつの間にか、翔太は夢の中に落ちていった。

「た……け……」

またこの夢だ。絞めつけられて、声が出せない。見えない何かに縛り上げられ、ほどこうとしても触れられない。もう嫌だ。自由にしてくれ。幸せなはずなのに。何も不安などないはずなのに！無我夢中でもがき、手を伸ばす。そこには何もないとわかっていながら、何かをつかみたくて、必死に手を伸ばした。その時、翔太のその手は、初めて何かを掴んだ。今までそんなことは一度もなかった。初めて、伸ばした手は何かを握った。それは、細くて白い、絹糸のような、少女の手だった。

「……………っ！はあ、はあ……………」

翔太は勢いよく跳び起きた。息が上がっている。先ほどの夢は、驚くほど鮮明に脳裏に焼き付いていた。あの時、翔太は確かに少女の手を掴んだ。初めて、何かに縋りつくことが出来た。今までの夢とは何か違った。翔太は視線を落とす。その手には、何かが握りしめられていた。ゆっくりと手の平を開くと、そこにはピンク色のシユシユがあった。手の平も、上半身も、じっとりと汗をかいていた。時計の針は午前七時を指している。カーテンを開けると、また灰色の世界が広がっていた。いつもと同じようで、少しだけ違う朝が、翔太を迎え入れていた。

その日、翔太は大きめのポストンバッグに三日分の着替えを詰めていた。明日はいよいよ祖父の家へ向けて出発する。期待と不安が入り混じった不思議な気持ちで着々と準備を進める。母である香織から祖父の家に行く日程を知らされたのは、話を持ち掛けた次の日だった。父の仕事の都合が合わず、夏休みの序盤である七月中に行くことは断念した。また、お盆は毎年父の実家で過ごすことになっているので、そこも外さざるを得なかった。そういうわけで、八月の末に二泊三日で行くことになった。ちょうどその日程の二日目には祖父の住む町で毎年小規模な祭りが開催されるため、そこを訪れるのもいいのではないか、という話になったのだ。本音を言うと、翔太はできるだけ早く祖父の家に行きたかった。一分一秒でも早く解放されたかった。しかし、両親には不安のことは伝えていないし、どう伝えていいのかもわからない。だからこそこそこまで翔

太は追い詰められているのだ。したがって、翔太にできるのは、待つことだけだった。その日が来るまで例の形の見えない不安は翔太の首を絞め続けた。あくまで解放されるかもしれないという希望を見つけただけで、日常は何も変わっていなかったからだ。あの日以降、夢は元通り、何もつかめなくなっていた。鬱々とした苦しさは続き、いよいよ耐えられなくなりそうになったときに、ようやくその日はきた。あの場所へ行くことで、何かが変わると決まったわけじゃない。それでも、このまま何もせずにとだ不安に苛まれ続けているよりはいいはずだ。あの場所に行つて、もしあの子に、「カナちゃん」に会えたら、彼女のように自由になれるかもしれない。何にも縛られず、誰よりものびのびと生きていた彼女のように。翔太は布団に潜り込み、覚悟を決めてゆっくりと目を閉じる。夢を見ることは、もはや当たり前になっていた。何度見ても慣れない悪夢。それでも、これが最後になる、そう願って、そう信じて、夢の中へと身を投じた。

見えない何かに縛られる夢。今までの夢は、すべてそうだった。だが、今回だけは違った。何もない薄暗い空間に、翔太はたった一人で佇んでいた。広く、暗い場所。言いようのない恐怖が翔太を襲う。それでも、翔太は歩くことが出来た。自由に、暗い虚無の空間の中を歩き回る事が出来た。だから、あてもなくさまよいつづけていた。すると突然、遠くに少女の姿が見えた。少女は手招きをしている。翔太は一目散に駆け出した。

「こっち。こっちにおいで。もうすぐ、会えるね」

視界がぼやける。あと少し、あと少しでたどり着く。まだまだ、まだ覚めないでくれ！初めてそう願った。あと一歩で掴めるんだ！君の手を！

そこで、翔太の視界は暗転した。

自家用車の後部座席で揺られながら、翔太はぼんやりと外を眺めていた。運転席には父、壮一郎が座り、助手席には香織が座っていた。横に積まれた荷物に寄りかかりながら、翔太は昨晚の夢について考えていた。以前手を掴んだ夢を見た時にはもしかすると、程度に思っていたが、昨晚の夢で確信した。あの少女は「カナちゃん」だ。それと同時に、例のピンク色のシュシュが彼女のものであることも確信していた。なぜ、どういった経緯であれが自分の部屋にあったのかはわからないが、あれは確実に「カナちゃん」のものだろう。そしてあの夢の中で「カナちゃん」はもうすぐ会えると言っていた。あれが単なる自分の妄想なのか、はたまた不思議な力でも働いていたのかはわからないが、本当に会えるかもしれないという思いは強まっていた。もし会えたら、今の気持ち話をしよう。そしてこのシュシュを返そう。そしたらきっと、何かが変わる気がする。そんなことを考えていると、次第に懐かしい景色が目飛び込んでくるようになった。祖父の家はもうすぐそこだ。それから十分ほど進んで、ついに祖父の家に到着した。

「壮一郎君、翔太、よく来たね。それに香織も。おかえり」

祖父は玄関の前に立って三人を待っていた。予想以上に温和な態度で出迎えた祖父を前に、香

織はほんの少し戸惑いを見せる。

「お邪魔します、お父さん」

無言で一步下がった香織の代わりに壮一郎が手土産を渡す。それから三人は家の中へ通され、まずは仏間に足を運んだ。香織の母にあたる翔太の祖母は、若いうちに病気で亡くなってしまったそうだ。それからこの家には祖父が一人きり。後妻も取らず、祖父くらいの年齢にしては珍しく、家事もすべて一人でこなしていた。三人は祖母の仏壇に線香をあげた後、居間で熱いお茶と茶菓子を-outされた。香織は家に入るときに「ただいま」とそっけなく言ってから終始無言だったが、壮一郎と翔太は世間話や翔太の学校の話など、様々な話で盛り上がった。十一年ぶりに会う祖父は元氣そうで、まだまだ若々しかった。久々に会った祖父との会話はとても楽しかったが、翔太は内心早くあの場所に行きたくて仕方がなかった。あのとき、「カナちゃん」といつも待ち合わせをしていた、あの場所。近くにある小高い丘の上の、さらに階段を上った先にある小さな神社の境内。もしも彼女がいるのなら、そこに違いなかった。ひとしきり話も終わり、祖父が夕飯の支度を始めると言ったとき、香織がようやく口を開き、一言「手伝う」と言った。そこで二人は台所へ消えていった。壮一郎は自分も何かやれることがあれば手伝うと言ったが、彼は料理に関して全くの素人だったので大人しくテレビでも見ているよう言われていた。まるで子供のよう扱いだだったが、普段は仕事でほとんど家にいない父は徐々に羽を伸ばしているようにも見えた。そんな父を横目に、翔太は夕飯までには戻ると言い残して家を飛び出した。もうこれ以上待ってられない。そんな思いを抱えて全速力で田んぼに挟まれた田舎道を駆け抜ける。あの頃

と同じ景色が横目に流れていく。のどかな田園風景。ゆったりとした時間の流れに逆らうように、早馬のように駆けていく。今なら陸上部のエースである太一にも勝てるかもしれない。そう思うくらいに全力で走っていた。すると少しずつ斜面が急になり、地面が凸凹してくる。危うく転びそうになりながら、というか事実何回か転倒しながら、ついに、神社の鳥居へと続く大階段の麓までたどり着いた。これを登り切れば、そこに。一段一段しっかりと踏みしめて登っていく。心臓が高鳴るのを感じる。鼓動が早くなり、息が荒くなる。

彼女はいるだろうか。いや、きっといる。何故かそんな確信があった。そして、翔太はようやく長い長い階段を登り切った。最後の一步を踏みしめて顔を上げる。そこには、

あの頃と何も変わらない「カナちゃん」が立っていた。

言葉が、出なかった。石の大鳥居の下、参道のと真ん中に彼女はしっかりと立っていた。十一年前、翔太と一緒にこの場所で遊びまわったときと、寸分たがわぬ様子で、そこに立っていたのだ。会いたくて仕方なかった。会えると信じていた。だけれど、心のどこかでもう彼女はいない、会えないのだと諦めかけてもいた。

それでも、今こうしてあの頃と同じ笑顔で、翔太の目の前に立っている。

「やっと、会えた」

心の底から絞り出したその声はとても頼りなくて、震えていた。きっと太一や隆成が聞けば笑

うだろう。しかし、翔太は今までの人生の中で一番、感動という言葉の意味を身に染みて実感していた。

「ずっと、君を待っていたよ」

カナちゃんは口を開き、あの頃と同じ声、そしてあの夢と同じ声で語りかけてくる。さらさらとした絹のような黒髪も、流れる雲のように真っ白なワンピースも、よく日に焼けた健康的な肌も、笑うと見える八重歯も、あの頃のままだった。そこで、翔太はある違和感に気が付いた。そうだ。目の前に立っている少女は、確かにあの頃の「カナちゃん」のままだ。いや、あまりにもそのままなのだ。十一年。翔太が最後に彼女と会ってからすでに十一年が経過しているのに、何もかもが変わらず、そのままであるわけがないのだ。翔太は混乱して眩暈がしてきた。

（これは、つまり、どういうことだ？歳を取らない人間、なんてものがいるのか？いや、生きている限り誰しも歳は取るはずだ。ということとは……）

翔太は何か気づく。現実にあるかもしれないけれど、自分には一生関係ないと思っていた、ある可能性にたどり着く。恐る恐る顔を上げた翔太の表情を見て、カナちゃんはふっと笑いながら

「あ、やっぱり気付いた？わたし、実はもう死んじゃってるんだよね！だからこの姿は、いわゆる幽霊ってやつなのです」

翔太は呆気にとられた。今まで幽霊なんでものは一度たりとも目にしたことがなかった。だからカナちゃんのこのテンションが幽霊として正常な振る舞いなのか否か、判別がつかなかった。

翔太が知っているフィクション作品に登場する幽霊たちは、もっと恨めしそうな、恐ろしい雰囲気のものばかりだった。そもそも自分が死んだという事実をこんなにもフランクに伝えられるものなのだろうか。人間は意外とタフなかもしれない。もしくは、死後の世界の居心地が予想外に良くて、死んでしまったことをあまり悲観的に捉えていないのだろうか。色々と思索した結果、翔太の口をついて出てきたのは、

「悲しく、ないの?」

という質問だった。その質問に対してカナちゃんは、

「うんとね、私が死んだのって十六年とか、もうかなり前だからなあ、なんか慣れちゃった」

と、驚くほどさりりと答えた。と、いうことは。

「じゃあ、十一年前に僕と遊んだ時、あの時も」

「うん、死んでたよ」

頭がくらくらする。つまり翔太は十一年前の時点ですでに亡くなっていた少女と遊んでいて、その子の面影を求めてやってきた、ということか。しかしこれである一つの謎が解けた。夢への干渉だ。祖父の家を目指す車の中でずっと考えていたことだが、そもそも生身の人間がそうやすやすと他人の夢に干渉できるわけがない。しかし相手が幽霊となれば話は別だ。いや、別かは知らないが。ただ、生きた人間が夢に入ってきたと言われるよりも幽霊が入ってきたと言われる方が何となくしっくりくる。しかし反対に一つ疑問が湧く。たしか十一年前は、手を繋いで遊んでいたことがあるはずだ。幽霊は普通触れないのではないか?という素朴な疑問である。そのこと

をカナちゃんに伝えると、

「あ、わたしもなんかよくわからないけど、触れるタイプの幽霊なんだって！」

そういうタイプもいるのか。世の中には色々な人間がいるが、幽霊にも同じように色々な種類のものがあるのだろう。幽霊タイプ別診断とか、そっちの世界にはあるのだろうか。しかし、カナちゃんが生きていようと幽霊であろうと、触れるなら別に構わない。そう考えた翔太は、カナちゃんの手を引いて境内に入っていった。

「怖がらないだね。私が幽霊だって知っても」

カナちゃんは少し意外そうな、ほっとしたような表情を浮かべている。それはそうだろう。他の場所でききなり幽霊が現れようものなら誰しも驚く。人間は非日常的なものや自分の理解の範疇を超えたものを恐れるからだ。しかし、相手はカナちゃんだ。幽霊である前に、翔太にとって幼いころからの友人であり、救いを求めて訪ねた人物であるのだ。幽霊は少し怖いけど、カナちゃんが怖いわけではないのだ。

「だって、カナちゃんはカナちゃんでしょ？」

そう伝えると、カナちゃんは嬉しそうに、そしてどこか寂しそうな表情を浮かべた。そして二人は昔のように、社の縁側に腰かけて話し始めた。この十一年間、翔太がどんな学校生活を送ってきたのか、どんな友人関係を築いてきたのか。カナちゃんはとても興味津々な様子で訊いてきた。反対に翔太も、カナちゃんが十一年間どんな暮らしを送ってきたのか尋ねてみた。どうやら町の人々の暮らしを眺めたり、森にいる鳥や動物と話したりしていたらしい。幽霊というよりは、

物語に出てくる精霊や女神様のような生活をしていたそうだ。昔と変わらず無邪気に、自由に語る彼女の姿を見て、翔太はここに来てよかった、と思うようになった。しかし十一年前は無邪気で明るい友達、という印象を抱いていたが、こうして話していると、まるで年上と話しているような感覚になる。いや、亡くなった歳からすると、実際に翔太よりもカナちゃんの方が五、六歳年上なのか。特に、恋愛の話をしたときは翔太に今まで一度も彼女がいたことがないと知ってにやにや笑いながらアドバイスまでしてきた。余計なお世話だと翔太は苦笑いで返したが、密かに実践してみよう、と心に留めていた。そんな二人の談笑は終わることがなかった。なにせ十一年分だ。いくら話しても話し足りない。翔太はそう思っていたが、話が一瞬途切れた時に、カナちゃんがふと真面目な顔をしてこう言った。

「それで？何か悩みがあるのでしょうか？」

翔太は驚いた。確かに夢には出現してくれたが、悩んでいることまで悟られていたとは。そんな翔太の様子を見てカナちゃんはニヤリとほほ笑んで、

「私は君のことなら何でもお見通しだよ？」

と告げた。翔太は足元に視線を落とす。そうだ。本来の目的を見失うところだった。いや、あえて見ないふりをしていたのか。心の中にある形なき不安を、うまく言葉にできる自信がなかった。そもそもそれが出来ないから悩んでいるのに、それをどう相談しようというのだろう。よくよく考えたら、誰かに相談して救いを求めるのであれば、少なくとも不安を言語化して形にしないでほならない。その条件にはカナちゃんだって例外なくあてはまるのだ。それに、たとえ言葉

にできたとして、そんな漠然とした不安を相談すること自体間違っているのではないか。そんな思いが渦を巻いて、再び翔太は絞めつけられる。結局、カナちゃんに会ったところで何も変わらないのだ。

「言葉にしてごらんよ。つたなくても、文章になっていなくても構わないさ。君の言葉で聞かせてよ、しょうちゃん」

翔太は子供の頃と同じあだ名で呼びかけられ、顔を上げた。そこには、まっすぐで曇りのない、自由な輝きで光るカナちゃんの瞳があった。自分の心の中にある、理由のない不安や恐怖。それを、自分の言葉でカナちゃんに伝える。ただそれだけのことに、まるでさも物語の英雄たちの大偉業に臨む前のような緊張感をもって、翔太は挑み始めた。

「僕は、昔から何事にも才能なんかなかった。勉強も、運動も人並みで、芸術とか音楽とか、そんな能力もなかった。でも、幸せだったんだ。優しい両親がいて、信頼できる友人もいて、毎日普通に学校に通っている。そうだ、幸せなはずなんだ。それなのに、いつもどこか不安で、絞めつけられるような苦しさを感じるんだ。理由もないし、形もない。それでも辛いんだ。だけど、こんな不安は形にすることも出来ないし、できたとしても、僕なんか、僕みたいな幸せであるはずのやつが、誰かに助けなんて求めちゃいけないんだ。だってこの世界にはもっともっと辛いことや悲しいこと、理不尽に耐えている人たちがたくさんいるのに。救われるべきはそういう人たちなのに。戦争や災害におびえ、いじめや差別に苦しむ、そんな人たちがいることを知っているから。でも、そう思うと余計に苦しくなるんだ。息がつまりそうになるんだ。世界が狭くなっ

て、色が無くなっていくんだ。もう、どうしたらいいのか、どうすべきなのかもわからない。僕は、何をすれば自由になれるの。何をすれば、こんな思いから解放されるの」

一度口を開くとあふれ出す。ぼろぼろと口をついて、言葉の雪崩が起きる。自分でも止められないくらいに言葉があふれてくる。それは決してまとまりのいいものでもなく、要領を得たものでもない。それでも、言葉はとめどなくあふれ出る。そしてようやくすべて出し切ったとき、カナちゃんは少しの間押し黙って、ゆっくりと口を開いた。

「それは、つまり透明な不幸だね」

カナちゃんは続ける。

「形もなく、色もない。理由もなく、ただ苦しきだけがある。理由のある不幸や、原因のわかっている苦痛には対処のしようがあるけど、それがないからどうしようもない。影も形も見えないけれど、確かにそこにある不幸。それが、透明な不幸。つまるところ、しょうちゃんはこれに苦しんでいたんだね」

透明な不幸。なんて綺麗で、なんて悲しい響きなのだろう。不幸にすら形を与えてもらえない。そんな残酷なことがあるだろうか。ああそうか。翔太はこの時初めて、あの夢の意味を理解した。実体のない不安。だからこそつかめなかった。だからこそ振りほどけなかった。それじゃあ、どうしろというのだ。答えを求めてやってきた場所で得たのは、答えなど得られないという、最も

醜い答えだった。口を開こうとしたその時、翔太のポケットでスマートフォンが振動した。画面には母からの通知。気づけば辺りは薄暗くなっていた。夕食の時間だ。翔太はスマートフォンを握りしめ、カナちゃんに目をくれることなくその場から逃げるように走り去った。後ろからカナちゃんが声をかける。

「明日も、ここで待ってる」

翔太は走った。ひたすらに走った。どうしたらいいかわからなかった。以前までは、答えを聞くために必要な、ぐちゃぐちゃに絡まったイヤホンを前に、どうしたらほどけるのか思案していた。一向にほどけずに助けを求めた。これでやっと救われると、答えが得られると思っていた。そしていざ、ほどかれたイヤホンを耳にはめても、何も聞こえなかった。その先端はどこにも繋がっていないかった。初めから、答えなど存在しなかった。

家に帰った後も翔太は上の空だった。用意された夕食もほとんど手を付けずに残して、風呂に入って、すぐに床に就いた。そんな翔太の様子を見て、香織たち三人は酷く心配した。しかし何と声をかけてもまともに返事をしてくれない以上、そっとしておくことしかできなかった。その晩は壮一郎と祖父は遅くまで酒を酌み交わしていたが、香織はその酒宴には加わらず、一人で物思いにふけていた。次の日、祭りの日の昼過ぎになっても翔太は起き出してこなかった。香織が流石に心配になって部屋の様子を見に行った。ふすまは閉じられたままだ。しかしそのままふ

すま越しに呼びかける。

「翔太、何かあったの？」

返事はない。しかし、起きている気配がする。

「入ってもいいかな」

小さな声で、うん、と聞こえた。ゆっくりとふすまを開ける。翔太は布団の中でうずくまっていたようだった。香織は近くによる。こんなとき、息子にどんな声掛けをすればいいのだろう。下手な慰めはかえって彼を傷つけてしまうかもしれない。色々と逡巡していると、ふと枕元にピンク色の何かがあるのが目についた。手に取ってみると、それはどうやらシュシュのようだった。「あら、翔太！いつの間にかこんな……彼女でもでき……」

突然、香織は言葉をつぐんだ。というよりも、絶句した、と表現する方が正確かもしれない。突然黙り込んだ香織を不審に思った翔太は、布団の中で体をよじり、母親の方に向き直る。その顔には、戸惑いと、悲しみがはっきりと見て取れた。

「これを、どこで……？」

明らかに尋常ではなかった。あまりの異常さに、翔太は思わず体を起こす。

「母さん……？部屋の、棚の裏だけ……。それ、カナちゃんのですよ？母さん、カナちゃんのこと知ってるの？」

翔太は昨日の出来事のせいで結局シュシュを返し損ねていた。人のものはきちんと返すべきだ。気は進まなかったが、今日もう一度訪ねる必要がある。

「カナちゃん……？カ、ナ……。嘘でしょう。そんなはずはない。だってあの子は、もう……」  
どうやら香織はカナちゃんが亡くなったことまで知っているようだ。しかし幽霊になっていることは知らないのか、それとも幽霊は翔太にしか見えないのか、どちらにせよもういない存在だと思っっているらしい。しかし、そんなことをどう伝えればいいのだろうか。伝えたとして信じてもらえるのだろうか。

「母さん、カナちゃんは……」

「あの子に、あの子に会ったっていうの……？」

香織は驚くほど動揺していた。翔太は恐る恐る頷く。普段穏やかで温厚な香織が、ここまで取り乱す。カナちゃんとは、いったい何者なのだ。そもそもよく考えたら、翔太はカナちゃんの生前について何も知らない。というか、生きていると思っていたのが実は幽霊だったのだから、知る由もなかった。

「母さん、カナちゃんって、本当は誰なんだよ。知ってるなら教えてよ」

香織はしばらくの間無言で佇んでいた。緊張感が漂う。翔太は何か不吉な空気を感じていた。これから良くないことが起こるような、もうすでに起こってしまったよくないことについて聞かされるような。それでも、カナちゃんについて、知らないままではいられたかった。香織をまっすぐに見つめる。すると香織は覚悟を決めたような顔をして腰を上げた。

「付いてきなさい。あの子について、全てを話すわ」

そういって香織は居間の方へ歩き出した。翔太は慌てて布団をはねのけて立ち上がる。急に立

ち上がったせいで立ち眩みを感じてふらつきながら、香織の後を追った。居間に入ると壮一郎と祖父が昼間から酒を酌み交わしている最中だった。

「お、翔太起きてきたか。香織、お前は何でそんな険しい顔をしているんだ、正に鬼嫁じゃないか」

祖父は緊張した面持ちの二人に軽口を投げかける。壮一郎もそれを聞いて愉快そうに笑っている。二人とも酔いが回ってすっかり陽気になっているようだ。そんな祖父と壮一郎に向けて、香織は淡々と言い放った。

「この子に、翔太に、奏について、話すことにしました」

かなで。聞いたことがない名前だが、その響きから察するに恐らくカナちゃんの本名なのだろう。翔太はカナちゃんの本名すら知らなかったことを再認識し、改めて自分の無知を恥じた。香織の言葉を聞いた瞬間、祖父と壮一郎の顔から血の気が引いた。急に酔いが醒めたように見えた。「本気で言っているのか。秘密にするといったのは、君だろう。君はそれで大丈夫なのか」

壮一郎は香織のことを気にかけた。祖父はただ下を向いて沈黙していた。「翔太が奏に会ったって。どうやって会ったのかとか、そんなことはわからないけれど、知ってしまったからには教える義務がある」

壮一郎は小さく頷いた。祖父は相変わらず黙ったままだった。香織は翔太を真っすぐに見つめて、重々しく口を開いて、真実を告げた。

「奏は、蓮見奏は、翔太、あなたの実のお姉さんなの」

そこから香織は、奏の真実についてぼつりぼつりと語り始めた。「奏は私と壮一郎さんの間に初めてできた子どもだった。可愛い女の子でね、町内でも美人さんだって評判だったのよ。それから大きくなるにつれて元氣いっぱいでも明るい子に育って、何よりも純粹で真っすぐな子だった。ピンク色のシュシュがお気に入り、いつもつけていたわ。そして奏が六歳になる少し前に、翔太が生まれた。私や壮一郎さんはもちろん、お父さんも、親戚みんなで大喜びしたわ。でもね、一番喜んでいたのは奏だったの。ずっと弟が欲しいって言っていたから。それから奏はおしめを変えたり、あなたが泣いているときにはあやしたり、寝かしつけたり、母親である私が恥ずかしくなっちゃうくらい頑張って、あなたのことを一生懸命大切にしていたのよ。奏は本当にあなたのことが大好きだったの。いつも言っていたわ。しょうちゃんが大きくなったら一緒にたくさん遊びたいって。困ったときは私が助ける！とも言っていたっけ……。でもね、それは叶わなかったの」

香織は口をつぐみ、深く息を吸った。ふっと息をついて、少し悲しい目をしながら香織は続けた。

「十七年前の夏、私たちはちょうどこの時期にここへ家族で遊びに来ていたの。壮一郎さんは仕事で一日遅れて来る予定だったわ。そのときに私は偶然中学校の同窓会があったのだけれど、壮

一郎さんもないし、行かないつもりだった。けど奏がしょちゃんの面倒はあたしが見る！って張り切っていてね。それでお父さんに二人のことを任せて行かせてもらったの。その後奏は一生懸命あなたのことを見ていてくれたわ。けれどちょうどあなたが眠ったところ、奏も遊び盛りの女の子だもの。退屈になったんでしょね。ちょっとお外で遊んでくるねって。そう言っ出ていったきり戻らなかった。いつになっても戻ってこないからお父さんが心配になって私に連絡した後、すぐにあなたを抱えて探しに行ったの。私もすぐに駆け付けたわ。それでも見つからなくてね。警察や消防にも連絡して、近所の人たちもみんな出てきてくれて、全員で探し回ったわ。そしたらね……」

香織は言葉を切る。その頬には一筋の涙が伝っていた。壮一郎と祖父も、肩を震わせていた。香織は呼吸を整えて、もう一度話し出した。

「奏は近所の川から見つかった。上流には足を滑らせた痕が残ってた。冷たい川の中に落ちて、苦しくて寒くて、辛かったでしょうね。私たちが見つけた時にはすでに息をしていなかった。私はお父さんを責めたわ。お父さんのせいではなかったのに。どうしてちゃんと見ていてくれなかったのって。小さい子供を二人も置いて外に出ていた私が言えるはずなのにね。そこからこの家には辛くて来ることができなかった。それでも一度だけ、あなたをお父さんに会わせるためにここへ来たの。覚えているでしょう。奏と同じ歳になったあなたに、お父さんがどうしても会いたがっていたのよ。そしてそれから今日に至るまで十一年間も、ずっとここには来ないまま。これが、あなたのいうカナちゃんと、十一年間もここに来なかった理由のすべてよ。ずっと隠してい

て、本当にごめんなさい。でも奏がいなくなったのはまだあなたが赤ん坊の時だったから、きっとあなたは覚えていないと思った。それならば余計な悲しみを植え付けたくない、あなたを傷つけたくない、そう思ってあなたには伝えないことにした。そんな自分勝手なお母さんとお父さん、お爺ちゃんを、許さなくてもいい。でもね、一つだけ約束してほしいの。お願い。絶対に死なないで。あなたは私たちの大切な宝物。世界で一番大切な命。私たちはそんな宝物を、一度は守ることが出来ずに失ってしまった。一人の尊い人間の未来を奪ってしまった。だからお願い。生きて。奏の分まで、なんて身勝手に責任を押し付けたりしない。ただ、あなたの人生を精一杯生きてほしいの。ごめんね、こんな不出来な親で」

翔太は、何かが頬を伝うのを感じた。何故かはわからない。それでも、翔太の目からは止めどなく涙があふれてくる。姉が死んでしまったから？それをみんなが隠していたから？母の言葉に胸を打たれたから？それら全てだろうか。わからない。わからないけれど、生きなければいけない、そしてもう一度、カナちゃんに、姉に会わなければならないと、心の底から強く思った。

「翔太！」

気づいた時には無我夢中で走りだしていた。昨日とは異なる気持ちで、使命感に駆られて走っていく。田んぼ道を抜け、凸凹な坂道を駆け抜け、一心不乱に走っていく。抱え続けていた形のない不幸も、姉がいなくなっただけという形ある不幸も、今や関係なかった。カナちゃんに会いたい。会わなくてはならない。何をしたいのかは自分でもよくわかっていなかった。それでも、会いに行くのだ。息を切らして神社の大階段を登り切り、大きな鳥居にたどり着いた。カナちゃんは、

昨日と同じようにそこにいて、静かに、翔太を迎え入れた。

二人は無言のまま境内に座っていた。話が尽きなかった昨日とは裏腹に、お互いに一言たりとも発することはなかった。どれくらい時間が経っただろう。日が傾き始め、町の人々が祭の準備を始め出したところに、ようやくカナちゃんが口を開いた。

「しょうちゃん、川に行かない？」

翔太は驚いた。

「大丈夫だよ、こっちに連れてきたりはしないから」

カナちゃんは笑って言う。翔太は別にそれを恐れていたわけではなかった。単純に、カナちゃんにとって川は恐ろしくて嫌な場所なのではないかと思っただけなのである。しかしカナちゃんから言い出したのであれば、行かない理由もない。翔太は黙って腰を上げる。二人は黙々と大階段を下り、川を目指して歩き出した。下の方では人々が祭の準備に忙しく動いている。町の規模から考えてもそこまで大きな祭りではないし、山間部にある以上花火も打ち上がらない。それでも、この町に生きる人たちにとってはかけがえのない大切な祭りだ。必ず成功させるために、準備に抜かりはない。提灯籠がぶら下げられた祭街道で、出店の資材を運び入れる男たちの間を縫うように、祭りという非日常に瞳を輝かせた子どもたちが駆け抜けていく。もうすぐ、祭りが始まる。住民たちも続々と表に出てくる。そんな人たちを横目に、二人は黙々と川を目指す。神社の丁度真下あたりを流れる小さな清流は、昔から近隣住民にとって大切な生活用水として利用されてきた。そんな小さくも流れの速い川のほとりについてから、再び二人は沈黙に包まれた。

少し離れた街道から、がやがやと賑やかな声が聞こえてくる。祭が始まったようだ。カナちゃんは、相変わらず川を見つめて黙っている。今度は翔太から、沈黙を破ってみることにした。

「これ。カナちゃんのだよね」

手にしたピンク色のシュシュを、カナちゃんに差し出す。目を丸くしてそれを受け取ったカナちゃんは、「ありがと」と言って髪を束ねた。とても似合っていて、どこか懐かしく思えた。再び川に視線を落として、カナちゃんが口を開いた。

「ここ、涼しいよね。水も冷たいし」

そういって片方の手を流れに差し入れる。その手はまるで水を掴もうとしているかのようだった。川の流れはそんなカナちゃんの指の間をすり抜けていく。

「水ってさ、掴めないんだよね。形もないし、色もない。でも、確かにここにある。誰かさんの悩みみたいだね。でもそれってさ、時間にも似てると思わない？ 目には見えないし、掴めないけど、確かにそこにあって、流れていくもの。それでね、時間も水も見えないけど、どっちもすごく大切でしょ？ 体の傷を洗い流すのは水で、心の傷を洗い流すのは時間。どっちも、ないとすごく困るの。目に見えないものほど大切だということけど、こういうことも含めてるのかな」

それは翔太に向けて話しているように見えたが、一方で自分に言い聞かせているようにも見えた。カナちゃんの言葉は、言いたいことのすぐ横をかすめていくような、そんなもどかしさを含んでいた。そんな翔太の視線に気づいたのか、カナちゃんは少し笑って続ける。

「でもね、見えないものほど厄介でもあると思うんだ。だって、水は沢山のものをさらっていく

し、時間も、色んなことを忘れさせてしまう。でもね、いや、ううん」

一度言葉を飲み込んで、カナちゃんはスッと立ち上がってこう続ける。

「だから、しょうちゃんの悩みもすごく厄介なものなんだよね。見えないからこそ、どうしていいかわからない。見えないからこそ立ち向かえない。形がないから抗えない。だったら、それをとらえなければいいんだよ」

カナちゃんはにっこりと笑って続ける。

「水も、それ自体では掴めないけど、コップですくってしまえば美味しく飲めるでしょ？時間だつてそう。それ自体はつかみどころがなくても、君の一秒、一分、一日、一生、それを愛することはいける。だから、しょうちゃんの透明な不幸も、しょうちゃんごと全部愛して肯定してあげればいいの。形のない何かにおびえて、辛くて、でもそれも全部しょうちゃんの一部分なんだから、丸ごと愛しちゃえばいいのよ。まわりついたら不安なんて、きつと寒い冬を超えるためのダウンコートみたいなもの。大切にしていれば、いつかしょうちゃんの助けになる。ふふ、きつとこれはしょうちゃんの求めている答えじゃないかもね。でもね、あたしがしょうちゃんにあげられる答えはこれだよ」

全部丸ごと愛して肯定する。すべてが僕の一部。大切にすれば、いつか助けになってくれる。

一つ一つの言葉が、乾いた体を潤す水のように心に沁みわたってゆく。ああ、やっぱりカナちゃんは僕の姉ちゃんだ。翔太は心の底から理解した。

「あたしは誰よりもしょうちゃんのことを愛している。だからこうして会いに来た。死んだとき

に神様をお願いしたんだ。あと二回だけしょうちゃんに会わせて下さいって。一度目はしょうちゃんがあたしと同じ歳になったとき。どんな男の子になってるのか知りたくてさ。それに、たくさん遊びたかった。そして二回目は、しょうちゃんが困ったとき。本気で悩んで行き詰ったとき。しょうちゃんの助けになりたかった。結果として昨日は君を傷つけてしまったね。ごめんね。それでもこうしてあたしなりの答えを渡せた。もうこれで、あたしに悔いはない」

だめだ。全身の感覚が、いやな予感を感じ取る。このままでは、二度とカナちゃんに会えなくなってしまう。だめだ。そんなのは、だめだ。

「今までありがとう。楽しかったよ。……さようなら」

「だめだ！カナちゃん！」

一陣の風が吹き抜ける。翔太はとっさに顔を覆う。次に目を開けた時には、そこにカナちゃんはいなかった。ああ、行かせてしまった。何も伝えられないまま。本音を訊けないまま。飲み込んだ言葉を訊けないまま。その場に崩れ落ちた翔太の目からは大粒の涙が溢れ出した。悔しかった。目の前にいたのに。今度は一人じゃなかったのに。また、一人で行かせてしまったのか。

いや、まだだ。ふと、翔太は顔を上げる。何故かはわからない。それでも、まだこの世界にカナちゃんがいることを、翔太は感じ取っていた。でもどこに？一瞬考えて、すぐさま走り出した。決まっている。二人で過ごした思い出の場所。境内のその先。奥の山道をさらに登ったところにある高台。十一年前、最後に遊んだあの日に見つけた二人だけの秘密の場所。翔太は祭でこった返す街道を次から次へとぶつかりながら駆け抜けてゆく。

「カナちゃん、カナちゃん、カナちゃん！」

もう二度と、一人で暗くて寂しいところに行かせてたまるもんか。あの言葉の続きを、飲み込ませたままでいいわけがない。この思いを伝えないうままでいいわけがない。走って転んで、涙と汗でぐしゃぐしゃの顔で、今までで一番の速度で走った。階段を駆け上がり、奥の山道を目指し、必死で昇る。カナちゃんの元へ。

その高台に、カナちゃんはいた。

「なんできちゃうかなあ」

半分泣いたような顔でカナちゃんがつぶやく。

「カナちゃんを、もう二度と一人で行かせたりしない。さっきの言葉の続きを聞かせてよ。時の流れが怖いんだろ！なんで押し込めるんだ。君は、お姉ちゃんは！僕を助けてくれた、ずっと守ってくれた！今度は僕が、カナちゃんの気持ちに寄り添いたいんだ」

心からの言葉だった。どうしても伝えたかった。どうしても、知りたかった。

「あたしは、あたしは……！」

綺麗な茶色がかった瞳から、大粒のしずくをぼろぼろと零しながら、カナちゃんは抱えていた想いを形にした。

「……怖いよ！時の流れにさらわれて、みんながあたしのことを忘れちゃうんじゃないかって。

なかったことにされるんじゃないかって。大好きな弟の中にさえ、残れないのが怖いの！」

それが、気丈に、自由に振る舞ってきたカナちゃんの、蓮見奏の本音だった。翔太は涙を拭い、真っすぐにカナちゃんの目を見つめる。心からの想いに、心から答える。だってカナちゃんは、透明な不幸に、答えをくれたのだから。

「忘れるわけ、ないだろ！僕も母さんも父さんも爺ちゃんも！誰もカナちゃんのことを忘れたりしない！だって、みんな君が世界で一番大好きなんだ。大切な、家族なんだよ」

夏の夜空に、色とりどりの花が咲く。赤、青、緑、金。宝石箱をひっくり返したような、カラフルできらきらと輝く花火が宙に咲く。この祭りでは、花火は上がらない。下にいる人々には、当然花火など見えない。今この世界で、翔太とカナちゃんのたった二人だけが、満天の花火に包まれていた。鮮やかに咲いた光に照らされて、カナちゃんの頬がきらりと光る。

「ありがとう。ありがとう。本当は、あたしももっと生きていたかった。あなたと一緒にいたかった。あなたの未来を隣で見たかった。精一杯生きて。あなたの人生を、大切に楽しんで。お姉ちゃんは、カナちゃんは、しょうちゃんのことを、ずっと見守ってる」

最後の大きな花火とともに、カナちゃんは夜空に溶けてゆく。世界で一番大切な、僕の家族。ふと、翔太は足元にピンクのシュシュが落ちていることに気づいた。これは、間違いなく彼女がこの世に生きた証だ。拾い上げて、土を払い落とす。もう、まとわりつく不安は気にならなかった。全部丸ごと愛して肯定する。すべてが僕の一部。大切にすれば、いつか助けになってくれる。

彼女の言葉を胸の中で繰り返す。形のない不安。透明な不幸。見えないからこそ厄介で、どうしようもない。でも、生きていくしかないんだ。自分の人生を大切にして、一生懸命生きていく。彼女が愛してくれた自分自身を、悲しみすらまとめて愛して生きていく。きっとそれこそが、僕が唯一彼女にできる恩返しだから。

「なあショータ聞いてくれよお！」

太一が翔太の肩に泣きついてくる。横では隆成があきれ顔。

「どうやら太一は高校生活六度目の失恋を迎えたらしい。」

「またかよ、太一」

翔太は愉快そうに笑いながら聞く。太一本人は笑われたことに対して憤慨していたが、そのままつらつらと前の彼女への恨み言を述べていた。どうやら太一としては今回も自分に非は無いと思いたいらしい。それに対してどころどころ隆成が突っ込む。いつも通り。何も変わらない、平凡な日常だ。

「そいえば翔太は夏休み、何してた？」

太一が思い出したように尋ねてきた。きっと彼自身は部活に恋愛に忙しい毎日を送っていたのだろう。隆成だってそうだ。生徒会は夏休みにも集まって仕事をしていたらしい。きっと大変な

ことも多かったに違いない。そうやってみんなそれぞれが抱える悩みに向き合いながら、一生懸命に今を生きている。それは、翔太だって同じだった。たとえ形は無くとも、確かに悩み、苦しみ、それでも生きていくのだ。太一の方に顔を向けた翔太は、少し笑いながら返事をした。

「んー？ 一生懸命、生きていたよ」

太一も隆成もなんだそれ、と笑いながら話を続ける。くだらない話を笑顔で語り合う。何でもない普通の日常。ただ、空は晴れていた。まぶしいくらいに真っ青な空が、どこまでも広々と繋がっていた。すべて丸ごと自分として愛して、精一杯に生きてゆく。ただそれを思うだけで、世界は少しだけ広く、鮮やかに見えた。

(文学部文学科二年)

## 流れ星の里

河原谷 まち

車がガタゴトと音を立てはじめ、カーナビは不機嫌になったようにむっとり口を噤んでしまった。車を運転する女は役立たずのカーナビに閉口し、代わりに元の持ち主であった母がダウンロードしていた音楽をかけた。ドリス・デイのケ・セラ・セラ。J・POPばかりのリストの中に、その曲はぼつんと居座っていた。英語に対して造詣が深いわけでもないにもかかわらず、切ないような懐かしさを感じる。それはきつと、自分のかつてのニックネームが歌詞に入っているからだろう。希望を歌った歌と、絶望を抱える自分を対比して女は惨めになった。窓はすべて閉めているはずなのに、湿っぽい空気が車内に流れ込んでいるようだ。

(絶好の自殺日和だな)

女は覇気のない目をさらに虚ろにさせ、アクセルから足を浮かせた。もう時速三十キロは切っただろう。どうせ標識すらない場所なのだから、のろのろ運転でも構わない。行先はA村。かつて「流れ星の里」として天体マニアが集まった場所だ。そして女の故郷。今となっては一人一人住んでいないだけでなく、呪いの都市伝説スポットとなってしまうている。ただし知名度がないた

めに人はほとんど来ない。それが女が己の死に場所として選んだ理由の一つだ。もう一つは、携帯電話の電波が届かないからである。

「漫画家になりたい」

女がそう言ったとき、賛成してくれるものはいなかった。絵を描くのが好きだから、という理由で選んだが、困難な道である。どうしてもなりたい人だったら、一人暮らしをしてアルバイトをして稼いだお金で漫画を勉強しなさい、と家族に言われた。

大学を卒業してからずっと、彼女はアルバイト生活である。いくつかの出版社への持ち込み、公募、どれも駄目だった。二十四歳になっても芽が出ない彼女は焦った。このままずっとフリーターでいいのか。このままずっと自分の作品が世に出なかつたらどうしよう。そんな焦燥感がずっと彼女に付きまとった。まだ二十四歳だからとアドバイスをする者もいたが、女にとっては糠に釘。必死に売れそうな漫画を読み、勉強し、なにより公募以外の方法を探した。そして見つけたのだ。SNSだ。

SNSに自分の漫画を投稿してWEB漫画家として成功を収めている人の存在は何となく知っていたが、機械音痴な彼女にとっては遠い存在だった。しかしアルバイト先の同僚にSNSの使い方を見せてもらい、グッと身近な存在になった。

「これでいろんな人に見てもらえるね。出版社にはあんたの作品が好きな人がたまたまいなかったかもしれないし、これからきつと話題になるよ」

同僚は自分のことのように喜んだ。彼女の胸は期待でいっぱいになり、アルバイトの休憩の度にSNSを見た。反応があったら喜び、閲覧数が少なかったら落ち込んだ。一喜一憂して過ごすうちに、少しずつ彼女の漫画を読んでもくれる人が増えた。一般民衆に受ける漫画を勉強した甲斐があった、と彼女は内心ほくそ笑んだ。

(だいぶ知名度も上がってきたことだし、そろそろ私らしい漫画を描こうかな)

彼女は初めて、ずっと描きたかった漫画をSNSに投稿した。中学生の時の出来事を題材にしたノンフィクションの漫画だ。いじめを受けた同級生が自殺するまでの物語である。その漫画は今までで一番有名になった。悪い意味でだ。

「たいして絵も上手くないのに偉そう」

「その子が自殺するの指くわえて見たの？ お前もイジメた奴と同類」

「他人の不幸を餌にするクズ。もう漫画家辞めろよ。生きるのもやめろ」

数えきれないほどの誹謗中傷のメッセージが彼女のもとへ届いた。彼女の漫画を酷評するサイトまで作られ、至る所で批判された。描いた絵はすぐに消したが、他の人間が保存していたせいでずっとインターネットの世界に取り残されている。最初は気にしないように放置していたが、どんどん誹謗中傷のメッセージは増えていく。ただでさえガラス細工のような繊細な心を持っていた女は、心身ともに弱っていった。だんだんと眠れなくなっていく、頭痛が止まらなくなった。精神科に行くことは自分に対しての甘え、という認識を持っていたために病院にも行けなかった。そのうちアルバイトにも行けなくなり、外を歩くこともできなくなっていった。自分の周りに

いる人間が、自分を蔑み脅しているように感じられるのだ。それでも携帯電話を見ることはやめられなかった。SNSで自分がどのように言われているのか、知らない不安になった。

例の漫画を投稿してから一か月後、彼女は限界に達した。漫画家として生きていけなくなった今、生きている意味がないとまで思うようになっていった。親にも情けなくて相談できなかった。存外高い自尊心が傷つくこと、そして娘が嫌われている事実を親に知られることを恐れた。

だんだん検索履歴に自殺に関するワードが増えていった。どんな場所でもどんな方法で死のうかとずっと考えた結果、故郷であるA村の川で入水しようと考えた。ずっとインターネットという広い世界で過ごしていることで、狭い世界だった故郷が恋しくなっていたのか。それとも、自分をここまで追い詰めた人々が批判した自分の漫画の舞台に行きたかったのか。それとも……。

ぼうっとしていた間に、彼女の車は橋の上まで来ていた。ひどくボロボロで本当なら撤去されるほどだが、あまりに人が来ないものだから予防線一つ張っていない。鮮やかな朱色だった橋はすっかり茶色く錆びてしまっている。

女は棒のようになった足を懸命に動かして橋を渡り始めた。屠殺される直前の動物のような心地だ。自分から死を選んでいるのにおかしな話である。こんなに怖い思いをしてまで川に飛び降りる意味はあるのか、という考えが一瞬だけ過ぎた。しかしすぐにインターネット上での出来事を思い出し、決意をより強固なものにした。

川にはどんよりとした空模様映っている。せっかくなら綺麗な景色を最期に見たかったな、

と彼女はため息をついた。錆びれた手摺にもたれかかり、携帯電話を起動させる。あれだけ苦しめられたのに、結局手離すことができなかった。

「今まで申し訳ありませんでした。さよなら」っと……」

女は世界に発信するつもりでSNSに投稿しようとしたが、電波が届かないことに気づいて失笑した。そのあと家族へ向けて何も伝えていないことを思い出し、携帯電話のメモ欄に感謝とお詫び、自殺を決意した経緯を書いた。彼女は両親に対して悪意を持っていなかったために、彼らが責任を感じるのではないかと悲しんだ。しかしそのような感情よりも、自分を誹謗中傷した連中が罪悪感を持つことへの僅かな喜びの方が勝った。

携帯電話を橋の上に置き、手摺を乗り越えた。心臓が病気になったかのように苦しい。呼吸が上手くできなくなった。眩暈がして視界が滲む。それを吹っ切るように彼女は深呼吸をした。そして手摺から手を離れた時だった。

「ここらここら！ タンマタンマ！」

「ひゃあっ！」

女の腕を氷のように冷たい手が掴んだ。彼女は比喻ではなく「心臓が飛び出る」かと思った。上ずった声を上げながら恐る恐る振り返った。

「あぶねえ、間に合ってたあ……。あれ？ セラ？ セラじゃない？ うっそ！ なんか大人っぽいね！ 久しぶりじゃん！ ウチのこと覚えてる？」

そこにはここ最近で一番頭に浮かんでいた人物が立っていた。茶色がかかった黒髪に、少し焼け

た頬、とびきり美人というわけではないが華がある。川に飛び込もうとしていた女のことを、唯一「セラ」と呼んでいた人物である。

「る、り……。流里？　なんで……」

そして、「セラ」が描いた漫画に登場した少女である。彼女は永遠に少女のままだ。数年前、彼女は壮絶な自殺を遂げたからである。

セラは目の前の少女を見つめた。夢なのか死後の世界なのか判別ができない。彼女は中学生の時に亡くなっているはずだが、こうして元気そうに立っている。

「ねえ、私死んだの？」

セラは少女に尋ねた。少女の名前は流里。不吉な名前だと、ある時から同じクラスの人々に忌み嫌われた。それでもセラは彼女の名前が好きだった。

「生きてるでしょ？　ウチが腕引っ張ったんだから」

「じゃあなんで、あんたがいるの？　もしかしてあの時死んでなかったとかか？」

セラは織田信長を思い出した。実は本能寺で死んでおらず、こっそり逃げて生き延びていたという説だ。もしかしたら彼女もそうではないかという考えが過ぎった。

「いやいや死んでるって！　ほら、見てみて！」

流里は目を閉じ深呼吸をして、橋の手摺を掴んだ。すると彼女の手が手摺をすり抜け、物体の向こう側から指先が出ているのを見えた。セラは悲鳴を上げて後ずさり、その拍子に転んで尻餅

をついた。

「あははは！ ごめんごめん！ 昔からお化け苦手だったもんね」

「え？ やっぱり幽霊なの？ なんで、こんなにはっきり見えるし触れるのに……」

セラは恐る恐る彼女の腕を触った。生きているとは思えないほど冷たい。体から冷蔵庫の冷気が出てくるような気がした。健康そうな姿とミスマツチなのがあまりに不思議で、流里の腕を何度も擦った。

「不気味がらないんだね。この村に来た人たちはウチの存在を怖がってたけど」

「怖がるも何も、昔のあんたと見た目が変わらんんだもん。本当に生きてるみたい。仮に幽霊だとして、どうしてここにいるの？」

彼女の問いに、流里は困ったように笑った。整えられた眉尻が下がる。

「心残りがあってさ、成仏できないんだよ。もうずーっとここにいます。今が何年なのかすっかり忘れちゃった。あっそうだ！ 今何年？ 西暦でも平成でもいいから教えて」

「もう平成じゃないよ。令和に変わったじゃん」

「レイワ？」

流里は死後の世界の情報に疎かった。なんでも地縛霊であるために、A村から動くことができないのだ。セラは過去にタイムスリップした気分になりながら彼女に今の状況を伝えた。

セラは一々大きい反応を返す流里を面白がった。スマートフォンが普及していない時代だったため、田舎の中学生だった二人は当時、直接見たことも触ったこともなかった。橋の上に二人し

て座り込み、セラの手の中にあるスマートフォンを覗き込んだ。画面を指でスライドさせるたびに歓声を上げる彼女を見ていると、セラはこの小さな電子機器が偉大な秘密道具のように思えた。「いいなあ！ スマホ！ わざわざパソコン立ち上げなくてもいいんだね。あーあ、こんな面白いものができるんだったら生きとくのも悪くなかったなあ」

流里は大したことなさそうにため息をついた。セラは彼女の壮絶な最期と現在の彼女の姿が重ならず混乱した。なぜこんなにも快活な彼女が自分で死ぬことを選んだのか、理由は分かっているでもないまいち腑に落ちなかったが、さらに分からなくなった。そのうえ心残りがあって成仏できないときた。後悔なんていう言葉は真っ直ぐな性格である彼女の辞書にはないように思えていた。

「流里の心残りって何だろう……って考えてる？」

「え？」

「凶星だ！ しょうがないなあ、教えて差し上げよう！」

流里は軽やかな足取りで橋を渡った。ひらひらと紺色のスカートの裾が揺れる。小さい体を包むのはセーラー服だ。青春映画のワンシーンのような光景に、セラは少し嫉妬した。やっぱり彼女は自分と違って華がある。

「言いたくないならいいけど」

「言う言う！ 実はね……」

流里はセラを手招きした。そして耳に口を寄せると、自分の口周りを掌で囲った。こんな子ど

ものような仕事をされるのは久しぶりだった。

「一緒に流れ星を見てほしい！ ウチね、友達と一緒に流星群を見るのが夢だったの」

ずっと空に浮かんでいた灰色の雲から、パラパラと冷たい雨が降り始めた。セラは流里と共にかつての実家の中に入った。家だけが残っており、家具などはすべて取っ払われている。それでも雨宿りするには十分だ。セラは窓から外を眺めながら、隣にいる流里を横目で見た。

「とりあえず今日は無理そうだね。大体、なんで流れ星？ そんなに星見るの好きだったっけ？」  
彼女が天体観測をしている姿が、セラは想像することができなかった。いつも友人に囲まれて、空を見上げている暇なんてないように見えた。

「昔はそんなに興味はなかったよ。いつでも見れる星よりもさ、面白いドラマとか漫画とかの方が魅力的じゃん。でもさ、死んでずっと一人でいると星くらいしか見るものないんだよね。電気は通ってないし、本屋も無くなった。人もいない。暇だからずっと一人で星空を眺めてんの。もう寂しくて寂しくてたまらないよ。確かに星空は綺麗だけどさ、隣に誰かいたらもっと楽しいんだろうなって思ってた」

流里は恥ずかしそうに、顔を長い髪の毛で隠した。彼女の瞳が僅かに濡れているのを、セラは何となく見て見ぬふりをした。

「それでダメもとでさ、流れ星をお願いしたの。友達を誰か呼んできてくださいって！ したら成仏しますからって！ そしたらセラが来てくれたんだよ！ いやあ、やっぱり諦めないって

大事だね」

「私は私の意思で来たんだよ」

「まあまあいいじゃないですか！ これも運命だよ。人助けだと思ってさ、しばらく一緒にいようよ、ね？」

流里は首を横に傾げてセラの手首を掴んだ。あざとい仕草にほだされ、セラは了承した。自殺するまでに、ちょっとくらい幽霊と戯れておくのも悪くないと思ったのだ。

「よし！ じゃあ雲がなくなるまで一緒に暮らそう！ まずはこの家の掃除からだね。流石に埃っぽ過ぎるし……」

セラは昔の実家を見渡した。およそ10年前からずっとほったらかしの家は、砂埃だらけだった。それでも蜘蛛の巣は張っておらず、思っていたよりもやつれていなかった。

「ゴキブリとか意外とこない……。隠れてんのかな」

そう言うと、流里は得意げな顔をして胸を張った。

「私がずっとこの家に住んでいたおかげだよ！ 私が近づくと何故か生き物が逃げていくんだよね」

セラは感謝するべきなのか、勝手に元実家に入り浸っていることを咎めるべきなのか迷った。

しかしこの家はセラの家族にとってあってないようなもの。売りには出しているが誰にも管理されていい。そうなるとやっぱり幽霊でもいいから誰かに使ってもらった方が、家も喜ぶのだからと勝手に解釈し、ありがたい気持ちになった。

「この家には掃除道具がないんだよね。買ってきて！ あといっばいお菓子とか、ご飯とか、あっ！  
花火も！」

「はいはい……」

中学生の時は自分より大きかった流里も、今となっては胸のあたりまでしか身長がない。彼女の願いを叶えてあげたいと思わせる、庇護欲を感じさせる少女だと思った。中学生の時に流行った一人称である「ウチ」を使い続ける彼女は、幽霊というよりもセラの記憶の中の住人であるように思われた。

死ぬためにA村に来たにもかかわらず、セラは生きるための食糧、住むための掃除道具をたっぷり買って車に乗り込んだ。スーパ―には何人か人がいたが、自分が幽霊と住むことになったことに気を取られて、びくびくと怯えずに済んだ。店を出て元実家に近づいていくと、次第に雨は弱まっていった。

元実家の近くに車を止めると、流里がスキップをしながら出迎えた。地縛霊とは思えないほど軽やかで、A村から出ることができないという話が信じがたいほどだ。

「おっかえり！ 早かったね。うん？ この歌……」

閉めてあるドアをすり抜けて、流里は車の助手席に座った。セラは小さく悲鳴を上げて睨み、ため息をついた。

「いきなり幽霊感出してくるのやめてよ」

「幽霊感ってなにさ。それより、この歌ってアレだよ？ あれ、昔英語の授業の時に習った……」

「ケ・セラ・セラでしょ」

「そう！ そうだよ！ 唯一覚えてた英語の歌だよ」

流里はセラに指をさした。目は大きく見開かれ、琥珀色の瞳がセラをキラキラと映し出している。

ケ・セラ・セラはセラが中学生の頃に習った音楽である。子ども的人数が少ないA村は、少数教育を受けられるということをや強みにしていた。そのため英語の授業でも、ただ教科書を読んで書くだけでなく、英語の歌の内容も題材にした。「生の英語に触れよう」というテーマだった。生徒からはそれなりに好評だったが、受験を重視する親の反発や教師に負担がかかるという理由で自然消滅していった。

数少ない習った洋楽の中で、ケ・セラ・セラは生徒たちの心に深く残った。その理由は歌詞に込められた意味に惹かれたからというだけではない。習った文法や簡単な単語が登場し、覚えやすかったからである。

セラがこの音楽に思い入れがあるのは、そのような理由と加えて題名が自分のニックネームのきっかけになったからである。

「ケ・セラ・セラが『なるようになる』っていう意味なら、『セラ』ってどういう意味なのかな」  
セラは中学三年生になったばかりの時、隣の席の流里に話しかけられた。流里がまだ学校の中でも明るい人気者としての地位を築いていた頃だ。そんな彼女は一人で絵ばかりを描いているセ

ラにとって眩しかった。できれば関わりたくないタイプでもあった。

「知らない。スペイン語じゃなかったっけ？ 忘れたけど。テストに出ないよ」

「でも知りたいんだもん。セーラちゃんの名前の由来はこの歌じゃないの？」

「違う。っていうかセーラって呼ばないで。この名前嫌いな。こんな純日本人みたいな顔で、こんな外国人の名前みたいな恥ずかしいから」

セラの名前の由来は「小公女セーラ」である。「逆境に負けないように」という願いを込めて名付けられた。母親がつけたメルヘンチックな名前を、彼女は親の仇のように憎んでいた。「逆境に負けないように」なんて打たれ弱い自分への皮肉としか思えなかった。

「えー！ 可愛いのに。セーラが駄目ならなんて呼べばいいのさ」

「普通に苗字でいいんじゃない？」

「それじゃあ味気ないじゃん。そうだ、ウチが名付けてあげるよ。セラでいい？ これなら苗字みたいでしょ」

流里はクイズに正解した時のような顔を近づけた。

「好みにすれば？」

「やった！ ウチね、自分の子どもにセラって名前を付けようと思ったんだ。『なるようになる』が由来って、めっちゃ良くない？」

昔の記憶に思いを馳せて、つつい近づきにいる流里のことを忘れていた。彼女は心配そうにセ

ラの顔を見ている。

「昔のこと思い出してた。あんたがケ・セラ・セラの『セラ』の意味を聞いてきた時の」

流里はクイズの解説を聞いた時のような顔をした。

「それはウチも覚えてるよ。だってそれがセラのあだ名の由来だもんね。あ、でも『セラ』の意味は結局分からなかったね」

「あれね、意味はなかったよ。動詞っていうのかな。『○○になる』とかみたいな意味だった気がする。それとケ・セラ・セラって文法は正しくないって聞いたよ」

流里は分かりやすく落胆した。

「なんだあ、そうだったのか……。でもそういうちょっと大雑把なところも『なるようになる』って感じがあっていいよね。それにあの時話したからセラと仲良くなれたんだよ。だからいっか!」

「うん? 仲良くなったっけ?」

「ひどーい! 仲良くなったじゃん。セラのことセラって呼ぶのはウチだけだったよね。本名が嫌いだからとか言っさ。今も嫌い?」

セラは首を横に振った。むずむずする胸の奥を隠すように、目は伏せて視線を逸らした。

「良かった! 名前変えちゃうんじゃないかってハラハラしてたんだよ。せっかいい名前なのになって。本名のセラって呼べる日が来るとは……」

「え? 今更呼び名変えるの? セラのままでいいじゃん」

「セラって呼ぶのも悪くなかったけどさ、セラの成長を祝って呼び名を変えるのも悪くないでしょ!

ほら、某モンスターの黄色いネズミだって進化したら名前が変わるじゃん？」

「なんだそれ。意味分かんない……」

流里の頬は興奮で徐々に明るくなっていった。ずっと何年も一人で変化のない生活を送っていたからか、彼女は大きな刺激と変化を求める。無邪気な中学生の心のまま一人ぼっちで過ごす日々を考えると、セラは喉の奥がカッと熱くなるような気がした。

「ほらほら、雨も上がったことだし早速花火をしよう！ セーラは袋から花火出してね」

「はいはい……。あと前から思ってたけどセーラじゃなくてセイラだから」  
流里は一瞬キョトンとし、満面の笑みで敬礼をした。

次の日のA村の天気は曇りである。梅雨の時期に流れ星を見ようとするとするなんて、とセイラは内心無茶な計画に呆れた。それと同時に、自分の人生の残り時間が伸びていることに無意識に安堵していた。

「セイラ！ 掃除はもういいでしょ？ そろそろ外で遊ぼうよ」

飽き性なところは昔と変わらず、流里は雑巾を投げ出してセイラに抱きついた。スキンシップが激しい所も相変わらずだ。セイラは冷蔵庫の中に入ったように寒くなり、小さくくしゃみをした。六月なのに扇風機いらなかったのは彼女のおかげだったのだ。

流里に手を引かれ、湿っぽい外に飛び出した。都会では嗅げない雨の匂いがそこら中の草花から昇ってくる。伸びっぱなしの青々とした草が、セイラの脛をジーンズ生地越しにチクチクと攻

撃した。まるで土地を捨てたことを責められているように感じてきまりが悪くなり、駆け足で草原を抜けた。

「ほら！　ここガラス細工の工場だったの覚えてる？」

工場というよりも工房と言った方がしっくりくるくらいに小さな建物である。数年前まで無口な老夫婦が経営しており、セイラたちが小学生の頃に見学に行ったことがある。中には沢山の繊細なガラス細工があり、学校帰りに寄ることもしばしばあった。現在は建物だけしか残っていないと思いきや、意外と作品の数々が残されていた。それらは劣化によって欠けていたり埃を被っていたりしていたが、明らかに元々から失敗作だっただろうと考えられる。「作品はすべて自分にとって子どものよう」と語っていた主人の姿を思い出し、セイラは鼻で笑った。

「記念に持って帰ろうよ。セイラの家って殺風景なんだもん」

流里はオレンジ色のガラス細工を手を取った。セイラも工房の奥に進み、作品をざっくりと物色した。教会にあるステンドグラスのような小さな作品が目に残り、そっと持ち上げた。するとその近くに茶色くなった紙が捨てられるように放置されているのが見えた。

『巨大ショッピングセンター反対！　村を大切にしない者は出ていけ』

流里が近くにいたわけでもないのに、冷風に包まれるような寒さがセイラを襲った。足先がしびれるように感じ、まっすぐ立つことができなくなった。

出口から聞こえる流里の声で我に返り、足をもつれさせながらその場を去った。帰り道には流里の顔をまともに見ることができず、彼女はずっと何か言いたげな目をセイラに向けた。その目

に気づかないふりをして速足で歩くセイラに流里は不満気だった。セイラは彼女としばらく離れるためにスーパーへ買い出しに行き、機嫌を取るために総菜コーナーの少し高級なオムライスを買ってきた。しかし流里が食事ができない幽霊であることを失念しており、しょげている姿を見てさらに申し訳なく思うのだった。

次の日もA村は曇っていた。しかし流里は昨日のことなど忘れたように、太陽のごとくはしゃぎまわっていた。

「形は歪でも綺麗だなあ。やっぱり飾ってこそだよね。ガラス細工って壊れやすいのが玉に瑕だね」

「繊細だからこそその美しさだろうね」

そう言って家の中にガラス細工を置き、どの角度が一番キラキラと輝いて見えるか研究しては笑っていた。そしてすぐに飽きたのか、缶詰のサバを食べているセイラにちょっかいをかけた。た。

「今日はナンチャラ様の所に行こうよ。ウチ一人では掃除ができなかったからさ、一緒に綺麗にしよう！ せっかく掃除道具買ったんだし」

ナンチャラ様とは、A村の水源で祀られていた水神のことである。名前が長く難しいため、子どもたちからは「ナンチャラ様」やら「ほにゃら様」やら好き勝手に呼ばれていた。村人たちからはそれなりに慕われていたが、数年前に村人全員がA村から去って以降、誰も手入れをする

ことがなくなってしまうた。

セイラは掃除道具を担ぐと、流里とともにナンチャラ様が祀られている場所へ向かった。相変わらず湿気は多いが、隣に流里がいるからか涼しくて快適である。さらにナンチャラ様がいる場所は水が湧き出て小川が流れているため、クーラーがついた部屋よりも涼しい。

セイラと流里は持ってきた雑巾やはたきなどで汚れやコケを落としていった。初めて自主的にボランティア活動ができるほど、セイラは自分の心の中にゆとりが生まれているのを感じた。途中で流里と小川で遊び始めたため、思っていたよりも早く時間が過ぎてしまった。A村に来る前までは空腹になることは稀であったにもかかわらず、セイラは今自分がひどくお腹が空いていることに驚いた。

早く夕飯を食べようと、セイラは早歩きで家に向かった。そしてそれが自己中心的な行動だったことを恥じて流里を見たが、彼女はなぜだか嬉しそうにセイラを見つめた。

「なに笑ってるの」

「べつに？ セイラがご飯を楽しみにしてるのが可愛いと思っさ」

彼女は冷たい肩でセイラを小突いた。セイラもやり返そうとした瞬間、流里が遠くを見ながら立ち止まった。視線の先には騒々しい気配の女がいる。

「あいつ……」

こげ茶色のストレートヘアが忙しなく動いている。ナチュラルメイクを施し、運動前のように全身をジャージで包んでいる。顔は見覚えがあった。中学生の時にセイラと流里の同級生だった、

恵美という女だ。彼女を見た瞬間、流里の眉間に谷のような皺が入った。恵美はセイラに気づくと、大きな目を見開いて嬉しそうに寄ってきた。

「うわ！ 久しぶり！ A 中学だったよね？」

名前は覚えていないようで、誤魔化しながら話しているのが見て取れた。しかしセイラももう大人である。揚げ足は取らず静かに受け流すことにした。

「久しぶり。よく覚えてたね」

「そりゃあだって、濃い中学生生活だったからね」

恵美は何かを馬鹿にするように笑った。そしてその笑いを二人で共有しようとしたが、セイラは素早く目を逸らした。

「何しに来たの？ 私は実家の様子を見に来ただけ」

セイラは何ともなさそうに嘘をついた。

「実家？ ああ、残してたんだっけ？ あたしの実家はもう取り壊してんだよね。維持するのは大変じゃない？ 土地は買ってんだっけ」

「取り壊すのもお金がいるから放置してるだけ。それより……」

「ねえ、早くお化け見に行きたいんだけど」

恵美の足の後ろから、愛想のない少年が二人顔を出した。セイラが身をかがめて挨拶するも、ふいと顔を背けられてしまった。

「返事くらいしろ！ 挨拶は基本！」

そう言ったのは母親の恵美でもセイラでもなく、セイラの隣にいる流里である。セイラは雰囲気が悪くなるのを恐れたが、恵美は特に怒った様子がない。どうやら幽霊である流里の声は、セイラ以外に聞こえないらしい。それはそれで恐ろしいような気がして、セイラは体を小さく震わせた。

「肝試しに来たの。ケータとリョウ……ああ、あたしの息子ね、この子たちがこの村の都市伝説を聞かせたらテンション上がっちゃってさあ。涼むのもいいかもって思って来たの」

「都市伝説って……」

「流里だよ流里！ やばい死に方したじゃん。覚えてないの？」

覚えてないの？はこっちが聞きたい、とセイラは掌に爪を立てた。

（こいつは幽霊が怖くないのか？ でも私も幽霊と暮らしてるし……。こいつに罪悪感はないのか？ でも私も漫画の題材にしたし……）

ぐるぐると視界が朧気になっていく。罪悪感と、嫌悪感と、早くこの場を去らなければという焦燥感がセイラの心身を支配した。

「あいつが、あたしたちがいじめたから、って言い訳してさあ、逃げただけじゃんね。自殺もちょっとパフォーマンストップだったし。家に火いつけて、村の放送であたしたちの名前読み上げて、ちょっぴりはずかったんですけど！」

流里は中学三年生の初夏から恵美たちからいじめを受け、夏休み明けに自殺した。いじめの方法は陰湿で、暴力によるものではなかったが無視や嘲笑などで精神的に追い詰めていった。周り

の大人たちは誰も助けてくれなかった。セイラもまた何もできなかった。狭い村で孤立するのが怖かったのだ。彼女は何もできなかったことを今までずっと悔やみ続け、そして漫画として表現した。結局自分が批判されただけで終わったが。ずっと自分は、そして何より流里は自殺するほど追い込まれたにもかかわらず、加害者の恵美は悪びれもなくケラケラと笑っている。セイラは悲しいやら情けないやらで泣きそうになった。

隣をふと見ると、流里がしゃがみこんで嗚咽を漏らしていた。うめき声をあげ、吐きそうな声で泣いていた。頭を掻きむしりながら苦しむ流里の姿が恵美に見えたらいいのに、とセイラは目の前の無責任な女の心に呪いをかけた。

家に帰る頃には、流里の涙も止まっていた。頬にいくつもの線が残っており、それが彼女が苦しんだ証のように思えてならなかった。あんなにお腹が空いていたのに、もう今となっては何も食べる気がしなかった。

何か話して元気づけなければ、と口を開くが、セイラの口からは吐息が僅かに漏れ出るだけだ。いじめを止めなかった自分に流里を慰める資格があるとは思えなかった。

「その子が自殺するの指くわえて見たの？ お前もイジメた奴と同類」

自分の漫画に対して返された言葉を思い出した。直接言われたわけではないのに、はっきりと耳から聞こえるように錯覚した。直接言われた言葉は、耳を通して心に届く。何かに書かれた言葉は、目を通して心に届く。経路は違うものの、結局自分の心に届いた言葉は一生自分の心を、時には体をも支配する。言葉が強ければ強いほど、どんなに気丈に振舞っていても心に残ってし

まう。それは流里も同じだろう。

中学三年生になってしばらく経った頃、A村にショッピングセンターが建設される計画が立てられた。立ち退きを要求されたが、村人のほとんどは建設に反対した。「全員」ではなく「ほとんど」だったのは、反対しなかった者がいたからである。それが流里の父親だ。

流里の家は農家ではなく転勤族で、住んでいる家も借家だった。自然豊かな場所に住みたいという父親の希望で、A村に家を借りた。買わなかったのはいつでも出ていけるように、という考えからである。そのような状況もあって流里の父親のA村への愛着は、他の村人と比較したら薄かったと言える。決してなかったわけではない。

流里の父親は所謂「空気が読めない」人だった。「建設反対の意思がなくても村の秩序と心の安定を得るために、とりあえず『私は反対です』と言う」ということができなかった。そしてA村への関心の低さが災いし、次第に周囲から軽蔑の眼差しで見られるようになった。

「あの家は転勤族だからこの村のことはどうでもいいんだ」

「駅前のデモにも参加しなかった」

「俺らを建設賛成の意見にさせようとたくらんでいるのではないか。たしか建設会社に勤めていたよな。あいつらは引越せばいいだけだし、この村に愛情と思いい出がある俺らとは違う」

疑いと嫌悪感は深まっていったが、流里の父親は全く苦しいと思わなかった。村人たちは大人であり、直接彼を咎めるようなことは言わなかったからだ。流里の父は傷つくことなく、悲しむ

こともなかった。

「お父さん、もう『建設反対』って言ってよ。クラスみんなウチのこと嫌ってるよ。みんな無視すんの」

「なんだそんなこと気にしてたのか。立ち退き料を貰って他所に行く方が得だぞ。それにでかいショッピングセンターができるなら、この村以外の人間にとってはメリットがある。この村はまだしも、もっと奥のB村の人なんかは買い物難民なんて呼ばれてるんだぞ。その人らを救うって考えればいい」

「そういう話じゃなくて」

「周りには言わせておけ。お前の同級生は暇人だから人のことをいじめるんだろう。お前は小学生の時からこの村にいるからピンとこないかもしれないが、世の中の人間はこの村にいる人間だけじゃないんだぞ」

「気にしないなんて無理だよ。恵美が学校中に『流里という名前は、この流れ星の里から自分たちを他所に追いやって流れ者にするって意味だ』って言い回ってるんだよ」

「そんなわけあるか。流里っていうのは『どんな里に流れついても生きていける』という意味だ。大人になったらどこにだって行けるんだから、それまでの辛抱だ。お前はもう中学生なんだから、友達の喧嘩ぐらい笑って流しちまえ」

それから一週間後、流里は家に火を放った。家族が出かけている平日の昼間を狙ったのだ。あらかじめ録音していた音声を村内放送で流しながら、彼女は燃え盛る炎の中で立ちすくんでいた。

「私はずっといじめられていました。○○ちゃん、○○くん……。その他にもたくさん。特に私を虐めていたボス猿は恵美です」

名前を呼ばれた者は慌てて流里の家に向かった。彼ら以外の村中の人間も燃え盛る家を見上げた。セイラも何事かと思いつながら群衆の中に入った。人ごみの中から聞こえる「うち、名前呼ばれた?」「俺がいじめてたって放送あった?」といった言葉に吐き気をおぼえながら。

ごうごうと火に囲まれる家の二階に、ぼつんとセーラー服の少女が一人、虚ろな目をして下の人々を見下ろした。火の粉が顔を包んでも微動だにしない。この世の者とは思えない妖しい雰囲気纏っていた。そして急に甲高い声で笑いだしたのだ。

「あはははは! 村八分だって火事の際は助けてくれるのに、この村では見てるだけか! 村九分か!」

群衆から不気味がる声があがった。しかし誰も助けようとはしなかった。心のどこかで彼女はもう助からないと悟ったのだろう。それでも少しの間をおいて村人たちはハッと我に返り、数分に消防車呼んだ。消防車が消火活動を終えた頃には、流里はすでに息絶えていた。

その後の葬式には罪悪感を持った村人が数人表れ、棺の前で涙を流した。流里の父親を一番嫌っていたガラス細工職人の老夫婦も参列した。しかしクラスメイトのほとんどは出席しなかった。教師も「友達の自殺は精神的に苦しいだろうから」という理由で出席の強制はしなかった。

「友達の自殺ねえ……。友達ならいじめたりしないだろうに」

セイラは葬式のあと、ケ・セラ・セラを聴いた。大して仲良くはなかった友人。友達に無視さ

れるようになってから頻繁に話しかけるようになった友人。結局、自分が助けることができなかった友人。

「流里……。クラスの皆は葬式に来なかったよ。村九分でもなかったね」

部屋でどうしようもない喪失感と罪悪感を抱え、セイラは声を上げずに泣いた。

その後、壮絶な現場には誰も寄り付かなくなった。流里が死んですぐに地震、その一週間後に大雨と土砂崩れが起こり、さらに中学校での食中毒事件や誘拐事件が立て続けに起こった。流里の祟りではないかと恐れる村人たちは、ショッピングセンターの立ち退きの要求に応え、この村を去って行った。しかし結局ショッピングセンターもまた流里の祟りを恐れて建設が中止となり、A村は一人いない更地となった。

「セイラ……。セイラ！」

いつの間にか眠っていたセイラは、流里の声で夢から覚めた。いつの間にか夜になっており、暗闇の中に流里の顔が浮かぶ。

「流里……。ごめん、寝てた。暗かったよね」

「暗闇には慣れてるから大丈夫！ 今まで暗い夜を過ごしてきたんだから。それよりお腹空いてないの？ ごはん食べたら？」

「お腹は大丈夫。あのさ、ずっと流里に言ってなかったことがあって……」

セイラは熱くなる目元を抑え、声を震わせた。

「あの時、中学のとき、助けてあげられなくて……」

そう言った瞬間、流里は「あー！」と叫びながらセイラの口を手でふさいだ。

「そういう湿っぽいのなし！ せっかく流れ星を見るの待ってんのにさ。大体、セイラはウチのこといつ虐めた？ 恵美とかでしょ、虐めてたの」

「でも助けなかった。かばわなかった」

「まああの時は『なんで助けてくれないの？』とか思わないこともなかったけどさ。失望以上に嬉しかったんだよ。セイラだけだったんだよ、ウチのこと無視しなかったの」

流里が話しかけてきた時、クラスメイトは皆無視した。彼らはきっかけの建設工事のことなどとうに忘れており、結局華やかで目立つ流里のことが気に入らなくなったから虐めたのである。流里のことをそれなりに好ましく思っていた者でも、周りの友人に遠慮して流里を無視した。それに対してセイラは元々友人がほとんどおらず、流里のことを無視しようが話しかけようが関係なかった。だから普通に接していたのである。

「めちゃくちゃ嬉しかったんだよ。だからいっぱい話しかけた。まあ、結局自殺しちゃったんだけどね。セイラは敵ではなかったけど味方って程でもなかったじゃん。ウチは味方が欲しかったんだよ。この世界に自分の味方はいないって思って、絶望して死んじゃった」

「ごめん、味方になれなくて」

流里は大きくため息をついた。

「ああ、もう！ そういうのやめてってば！ そんなにジメジメしてるからいつまで経っても空

が晴れないんだよ！　いつまでもクヨクヨするんなら、ウチの計画に付き合わせるからね！」

「計画？」

流里はニヤリと口角を上げた。

流里とセイラは真っ暗闇の中を、懐中電灯一つで進んでいく。行先は流里の家があった場所だ。「おそろく車の中で待機して、暗くなった今頃肝試しを始めようと思っただよね。ああ、楽しみ！」

彼女の計画とは、恵美を幽霊として脅かす、というものだった。流里は姿こそ見えないが、僅かに物を持ち上げたり音を立てたりすることができる。それを利用して、かつて自分を虐めていた恵美を脅かすのだ。

「私は幽霊じゃないから姿が見えるんだけど」

「セイラは隠れてて。ウチがまず切り込み隊長として最初にあいつを脅かす。セイラはそのガラス細工をウチに投げてくれればいいから」

ガラス細工は、昼間に手に入れたガラス細工のことである。それを手に持ちコソコソと草むらを歩いている様子はなかなか滑稽だ。

流里の家があった場所には大きな石が置いてある。特に文字が刻まれているわけでもない、ただの石である。当時は花やら飲み物やらが置いてあったが、とっくの昔に腐ったり風で飛ばされたりしてしまった。

その石の傍に、母親と二人の子どもがいる。恵美とその子どもだ。「きゃー」だの「こわーい」だの甲高い声が聞こえ、無意識に眉を顰める。彼女らの所へ一歩ずつ進み、セイラだけが草むらに横たわった。まるで匍匐前進中の自衛隊員のようだ。一方流里は一気に駆け出し、恵美に向かって抱き着いた。

「ひゃ！ 冷たい！ ケータ、あんた保冷剤でも当てた？」

「当ててないよ」

「急に寒くなったんだけど……」

「幽霊じゃない？」

さっと恵美の顔色が悪くなる。腰をおばあさんのように曲げて、ガタガタと震えている。セイラからは彼女たちの様子は見えないが、流里の楽しそうな笑い声が聞こえてきた。

次に流里は砂を手に掴み、それを恵美の背中に思い切り当てた。恵美からは情けない声が上がって、子どもたちもすっかり怯えてしまった。

「よし、よし、もう帰ろう。車に戻ろう」

恵美は子どもたちを置いて、慌てて車の方へ駆け出した。その最中、セイラはガラス細工を流里に投げ、流里はそれを受け取り、力強く地面に叩きつけた。まるでラグビー選手だ。案の定恵美はその割れた音に悲鳴を上げ、尻餅をついた。子どもたちは泣いてしまっている。

「いやだ、いやだ、ごめんさい、ごめんさい。助けて」

メソメソ泣いて許しを請う姿は、かつて流里に代わって人気者の座を得た人間には見えなかつ

た。車に乗り込む寸前に流里は彼女の背中に紙を張り付けた。

「ママ、背中に何か書いてあるよ」

「え……」

『忘れるな。反省しろ。流里より』

齒をむき出しにして泣く彼女を笑いながら見送り、流里は満足げにセイラの所へ駆け寄った。

「いやあ大成功大成功！ 見た？ あいつの顔！ こーんなして鼻の孔広げて『助けてえ』ってさ」

真似をする流里が面白く、セイラは吹き出した。実のところ、セイラも随分すっきりしていた。苛めを行っていた人物が、被害者を冒瀆するような言動をしていたことに苛立っていた。

「いい気分だよ。気分晴れ晴れ」

二人は肩を組んで草むらを歩いた。この村に來た三日前と比べて、空の雲がわずかに薄くなっている。月の光がぼんやりと見えるが、雲が覆っているため地上を照らすほどではない。懐中電灯を持ちながら草むらを彷徨う。

お互い家に帰る気分ではなかったため、二人は家とは逆方向の草原に向かった。遠くから水が流れる音が聞こえる。今すぐ横になって眠りたいほど心地いい。流里も同じ気持ちだろうかと気になって隣を見たら、流里は声も上げずに涙を流していた。

「どうしたの！ なんて泣いてんの」

セイラが聞くと裏返った声を上げた。

「自殺……」

「え？」

「自殺したらどうしようかと思って。恵美が。確かにウチはすっかりしたけど、さっきのことですっごい怖がってたじゃん。ウチに責任感じちゃって自殺したりしたら……」

「あいつが責任感じるわけじゃないじゃん。あんたが自殺したの知っというて、死に場所を肝試し会場にするぐらいなんだから。ある意味一番肝座ってるよね。あんな奴そうそういないよ」

セイラは笑って見せたが、流里の顔色は晴れない。昔から流里は意外と繊細だった。繊細で、人の心を読みすぎて、傷つきやすくて、そんな本性を隠すように明るく振舞っていた。暗くて内向的なセイラと明るくて社交的な流里。二人が一緒にいて心の安寧を得ることができるのは、互いの本性に通じ合うものがあるからかもしれない。

「あー、分かった分かった。私があいつのこと遠くから見といてあげるよ。自殺しそうになったら止める。これで安心？」

流里は力が抜けたように笑った。かつて同年代の中では大人っぽく見えていたが、今ではあどけない顔に見える。それでも何故か年下とは思えなかった。

そしてセイラはようやく、自分が流里に自殺未遂を咎められていないことに気が付いた。昔から本当に触れてほしくないプライベートには踏み込んでこない人物だった。でも実は気になっていいる場合が多く、セイラの方から打ち明けると分かりやすく喜んでいた。

「私ね、本当はこの村で死のうと思って来たんだよ」

「うん、そうかなって思った」

「あんたが触れてこなかったから言わなかったんだけど、冥途の土産に教えてあげる。成仏したら会えないでしょ？」

流里は少し寂しそうな顔をした。成仏するために一緒に流れ星を見てほしいと言っていたくせにと捻くれた感情を抱き、セイラは彼女を小突いた。

「流里が死んだあと、漫画家を目指してたんだよ。それでSNSに漫画を投稿した。あんたの自殺をノンフィクションで漫画にした」

「え！漫画家？すごい！昔から絵が上手かったもんね。でも『えすえーねす』ってなに？」「アルファベットで『SNS』。私たちが中学生の時にも、動画をネットに投稿してた人とかいたでしょ？それとはちょっと違うけど、ネットを通じて自分の考えとか写真とか漫画とかを日本中、いや世界中に見てもらおう。それを利用して漫画をネット上で発表した」

そしてセイラはこれまでの経緯を流里に説明した。流里の自殺を題材にしたこと、それを責められたこと、漫画以外の人格まで否定されたこと、そしてこれらの出来事は自分の自業自得であると思ったこと。

「うーん……セイラは本当にあった出来事を描いただけでしょ？その意地悪言ってくる人たちはどういふ関係なの？全くの他人なのにそんなに批判する必要ないでしょ」

「それでも人は罪を見ると罰したくなるんだよ。私の『見殺しにした』っていう罪を罰したかったんだろうな」

そう言った瞬間、セイラは顔が熱くなるのを感じた。恵美から何も危害を加えられていない自分が、勝手に彼女を罰してしまったことに気が付いたのだ。正義の名のもとに制裁を加えるのは快感をもたらす。自分が被害に遭った時のことは鮮明に覚えていたのに、人を罰する側になると自分の行動を客観的に見ることができなくなった。自己嫌悪の感情に耐えられず、セイラは再び肩を落とした。

流里は俯くセイラを力強く抱きしめた。もうしばらく一緒に過ごしているため、涼しさに驚くことはない。彼女の体は冷たいのに、セイラの目頭は熱くなった。

「ウチがもう許す！ はい！ これで安心？」

セイラは涙が張る瞳をぎゅっと瞑った。

「それ、私の真似？」

「まあね、真似だけに。もう被害者のウチが許したんだから、セイラは二度と他人から裁かれちゃ駄目だよ」

セイラは初めて流里を抱きしめ返した。鼻がツンと詰まって息がしづらい。鼻をすする音を出したくなくて、鼻の下を指でこすった。

「あんたはお人よし過ぎるよ」

「本当にお人よしだったら恵美に仕返ししなかったさ。自殺するとき自分を虐めてたやつらの名前を読み上げたりもしない」

「結局罪悪感に襲われてたじゃん。私は自殺しようと思った理由の一つにね、私を誹謗中傷した

人たちに罪悪感を持ってほしいって思ったからっていうのがあるんだよ。自分のせいで人が死んだんだって責任感じてほしかった」

「分かる。分かるよ。だからこそ恵美を見たときショックだったなあ。全然罪悪感持ってなかったもん。でもそんなもんなのかなあ」

流里は諦めたような口調とは裏腹に、どこかすっきりしたような表情だ。

「流里は私のこと許すくらい人がいいじゃん。だから恵美も勝手に許された気になってたんじゃない？ まあなんにせよ虐めてた相手がどんなに死のうが、加害者が罪悪感を抱えながら生きていくとは限らないってことか」

「勉強になった？」

流里は悪戯っ子のように笑った。セイラも笑い返す。

「なったよ。見知らぬ他人のために死ぬのはごめんだよ。私はそんなにお人よしじゃない」

空を覆っていた雲は、風で少しずつ動いている。どこか霞んでいた空は、黒々とした色を雲の間から覗かせている。

『『えすえーねす』で悩んでたセイラに言うことじゃないんだけどさ。ウチは正直、『えすえーねす』がある時代に生きてるのが羨ましい。狭い教室に居場所がなかったって、ケータイ開けば世界中の人と会えるでしょ。今なら『世の中の人間はこの村にいる人間だけじゃない』って言ってたお父さんの気持ちも、少しは理解できるかも』

セイラは心臓をきゅっと締め付けられた気がした。流里は孤独に苦しめられていた。もしインターネット上であったとしても、彼女は友達が欲しかったのだ。物は使いよう、とはよく言ったものである。

「流里は向いてたかもね」

「うん。ウチね、生まれ変わったらこの村以外の場所にも行ってみたい。飛行機とか船とか車に乗って、色んな所で友達を作りたい。ウチが死んだ元凶になったショッピングセンターにも行きたい。だから、そのためには、成仏しないといけない」

「成仏したら生まれ変わるの？」

セイラは死後の世界などを特に考えたことがなかった。ずっと何年間も生きることや死ぬこと、そして生まれ変わることを考え続けた流里には敵わない。

「分からない！ でもとりあえずここから出ないと。後悔があるままじゃこの村から出られないって本能で分かるんだ。セイラは生きてるからイメージできないと思うけど」

セイラが口を開ける前に、流里はアッと叫んだ。煙のような雲の間から見えていた黒々とした空が、どんどん大きくなっていくのである。そしてその空には散りばめられたガラス細工のような星が、視界に入りきれないほどに広がっている。

「綺麗……」

「ああ、晴れちゃった……」

セイラは自分が落胆した声を出したことに赤面した。これでは流里に成仏してほしくないと言っ

ているようなものだ。

「寂しい？」

「別に」

「またまたあ……。セイラは素直じゃないんだから」

いつものように軽口に応じようと思うが、頭が働かない。流里がいなくなると、今までの出来事は全部夢でした！と言われている気がして不安だった。

「ちゃんと生まれ変われたら、セイラに会いに行くよ。危なっかしくて心配だし」

「記憶あるとは限らないじゃん。私のことよりも自分のことを心配しなよ。私のことを心配しすぎて成仏できなかったら元も子もないよ」

「ちゃんんと成仏するから心配ご無用！ 記憶に関しては、絶対覚えてる自信があるよ」

流里は誇らしげに胸を張った。

「だから合図を作ろう。合言葉はケ・セラ・セラ。どこの国に生まれても、この言葉は覚えていくからね。セイラにこの合言葉を言う怪しい人物が現われたら、その人はウチだからね！」

「犬になっても？ 虫になっても？」

「次に生まれ変わるときも人間にして下さいって、流れ星をお願いするから絶対大丈夫！ 『ナ

ンチャラ様』にもお願いしたし！」

「どこから湧いてくんの。その自信は……」

オカルトチックなことを言い出す流里に、セイラは思わず噴き出した。本人はいたって真面目

なようで、揶揄いすぎるとむくれてしまった。

すっかり日が変わったころ、流里がアッと大きな声を出した。セイラは滲んだ空を懸命に見つめた。流れ星である。目をこすると無数の光の線が目の前に映し出される。

「こんなにたくさん！」

地上に落ちてくるのではないかと思うほど、星と二人との距離は近かった。手を伸ばすと掴めるくらいの星の数々は、ポカンと開けた口の中に入ってしまった。セイラは生まれて初めて感動して泣いた。今までたくさん悲しくて泣いてきた。怒って泣くこともあったが、感動して泣くことはなかった。自分の新たな一面を知ったことにセイラは鳥肌を立てた。

「描きたい……。この風景を描きたい！」

セイラは気づいたら思い切り叫んでいた。人物画ばかり描いていたからか、風景画のことはあまり知らない。ただ漫画の背景だけに使うにはあまりにこの景色はもったいない。

「それがセイラの願い事？」

「え？」

「流れ星は願い事を叶えてくれるからね」

目を充血させたセイラを見て、流里は星の入ったような瞳から大粒の涙を流した。

「セイラに新しい夢が見つかって良かった！ もう自分を追い込んだりしないでよ」

流里の身体の線が、どんどん曖昧になっていく。身体が透けているわけではないのに、存在感

が薄くなっているのを感じた。

「流里。もう思い残すことないの？」

流里は軽く頷いた。

「判断鈍らせないでよ。確かにちょっと寂しいけどさ。特にその、セイラの寂しそうな顔を見た  
ら……」

「別に寂しがってない。ほら、さっさと行きなよ」

セイラは俯いて手をひらひらと振った。自分のせいで流里が成仏できないのが嫌だった。

「ホントつれないなあ、セイラは。まあ、そこがいいんだけど！」

太陽のような笑顔を見せ、流里はセイラの顔を両手で挟んだ。

「ケ・セラ・セラ！ セイラ！ セイラはウチにとっての流れ星だよ。ウチの願いを叶えてくれ  
た」

「当たり前でしょ。星が来る、と書いて星来なんだから」

「うん。ナイスネーミングだよ。ありがとう、星来。またね、星来」

星来は流れ星の眩しさに目を閉じた。目を開けるとそこにはただ無数の星空と原っぱが広がっ  
ていた。耳元では蚊が動き回り、身体は生温い風で包まれている。

「流里、流里……」

星来は大声を上げて泣いた。生まれた時と同じくらい泣いた。涙と汗でぐちゃぐちゃになって

しまった顔を、華やかな光が照らしている。

(文学部総合人間学科四年)

## ブリキに花束を

松本 愛海

茹だるような暑さの中、柿崎真かきやままじは自転車かきやままじを漕いでいた。汗はとめどなく流れ、シャツが背中に張り付いて気持ちが悪い。どうして自分はこのことをしているのだろうかと考えつつ、重たいペダルに力を込めた。

事の発端は妻の紗枝さえによる提案だった。

「ねえ、真くん。ちょっとした頼まれごと、引き受けてくれない？」

「頼まれごと？」

その日の晩の食卓での会話だった。紗枝は箸で魚をほぐしながら軽い調子で言う。

「そそ。知り合いにね、ちょっと困っている人がいてね。真くんのリハビリにも丁度いいかと思っ  
て。」

「リハビリねえ…。」

妻は時々リハビリと称して、僕を外へ連れ出そうとする。僕が必要以上に外に出なくなったら、もう三ヶ月になっていた。もともとは大学を出てから十年間、大手の企業に勤めていたのだが、一年前に体を壊して退職。今は紗枝の提案もあり、専業主夫として過ごしている。

「真くん、暇な時間があるって言ってたじゃない。丁度良いかと思って。」

「そうだけど…。何をするんだ?。」

「買い物付き添いよ。簡単でしょ?お世話になった方からの頼みだから、応えてあげたいのよ。」

そう言うのと紗枝は箸を置いてこちらを見てきた。存外真剣な表情に戸惑う。紗枝のこの顔に僕は弱かった。面倒だなと思いつつも、僕は了承した。

それから数日後、依頼人である藤原夫妻が話の説明に我が家へとやってきた。二人とも五十代はじめの方だった。旦那さんの藤原忠ふじわらただしさんは背筋を綺麗に伸ばして椅子に腰掛け、奥さんの藤原智子ふじわらちこさんは指をソワソワとしきりに動かしている。目は合わない。

話を聞いてみると、忠さんは紗枝の職場の上司にあたる方らしい。智子さんの父親の買い物付き添いを探していたみたいだ。

「お義父さんは、少し認知症がありました。一人で買い物に行くと、帰れなくなることもあるんです。」

忠さんが眉毛を八の字にしながら言う。

「施設に通う日や、私たちがお義父さん家に行ける日は良いんですが、何ぶん、私たちにも仕事がありますし、近くに住んでいないので……。」

僕に頼みたいのは火曜日と金曜日。智子さんの父親と共に買い物に行き、自宅まで送り届けて欲しいそう。智子さんの父親、もとい同行する方は市川茂樹いちかわしげきさん八十五歳。軽度の認知症があるそう。普段は言動共にしっかりしているのだが、症状に波があり、時々悪くなるみたいである。そして、気難しい方のような。

「えっと……。すいません。僕なんかで良いのでしょうか。」

正直不安だ。僕には認知症の知識もかじる程度にしかない。紗枝のやつめ、どこが簡単だよ、と心の中で悪態をつく。

「……生活必需品以外の買い物に、ヘルパーは同行してくれないのよ。父が買うのは趣味のものよ。勝手に家を出ないでって言っても、何も無い日は出て行っちゃ。ほんと、迷惑だわ。」

今までずっと黙っていた智子さんが口を開いた。手は相変わらず忙しく動いている。

「私の方からもお願いします。私たちの他に親戚もおらず、困っています。なに、紗枝さんから貴方の人柄については聞いていますよ。任せられます。」

初対面でいきなり任せられると言われても、と困惑したが。何やら事情がありそう。何より

紗枝からの頼みでもある。

「…わかりました。」

これが二週間前の話である。

市川さんの家に着き、玄関横に自転車を止める。インターホンを鳴らすが、ドアが開く気配はない。いつものことだ。「こんにちは、市川さん。柿崎です。入りますね。」と声をかけつつ家に入る。市川さんはムスッとした顔でテレビを見ていた。

「毎回、毎回、あんた暇なのか。買い物くらい一人で行ける。」

テレビから目を逸らさずに市川さんは言う。

「娘さんに頼まりましたから、では買い物に行きますよ。」

「うるせえ、指図するな。」

そう言うとし川さんはノソノソと支度を始めた。この会話も二週間前から変わっていない。

今日も市川さんと並んで近くのスーパーまで歩く。蝉の音がうるさい。「今日も暑いですね。」と声をかけるも、声が返ってくる気配はない。出そうになるため息を抑えつつ、足を動かした。

市川さんが買うものは決まっている。スーパーの隅の植物コーナーにある小さな花束。決まっ

ていつも、それを買う。会計を済ませたその後、それを大事そうに抱えて家へと帰るのである。今日も市川さんは家に着くと、真っ先に花束を持って縁側へ向かう。

「ほれ、買ってきたぞ。」

そう言いながら、市川さんは笑顔を浮かべる。そこに置いてあるのは、縁側へと差し込んだ光の中に佇む、錆びたブリキの兵隊。市川さんは、ブリキのおもちゃに花束を贈るのである。

最初にその行動を見た時、何をしているのか分からなかった。

そもそも、一番初めに市川さんと会った時の印象は最悪だった。自己紹介をしてもろくに返事がない。常に不機嫌な顔で、愛想の一つも無い。買い物に行ってもスタスタとお目当のコーナーに向かうだけ。花束を買うことも、スーパーで初めて知った。そしてその花束も、贈る相手はブリキの兵隊ときたものだから、とても驚いた。

「市川さん、何をしてるんですか？」

初日、この行動を見たときにたまらず聞いてみた。

「花をあげている。」

市川さんは何とも無しに言う。

「え……。それに？」

思わず声に出た。僕の反応が気に食わなかったのだろう。途端に顔を真っ赤にして怒鳴られてしまった。

「わしのする事に、口出しするんじゃない！」

そう言われて何も言えなくなった。

これから上手くやっていけるのだろうか。ますます気が重くなる。正直もう辞めたいとの思いが湧いてきた。しかし、まあまだ初日だし、紗枝のこともある。実際、大した意味もないだろう。そう思って自分を納得させた。ただ、縁側の陽だまりの中で、ちょこんと座っているブリキの兵隊の間拔けな顔が印象に残った。

「ただいま。」

市川さん宅を出てから、クリーニングに預けておいた衣服を取りに行っていて帰りが遅くなった。ドアを開けると玄関にまで良い匂いが漂う。今晚はシチューみたいだ。

「お帰りなさい。真くん。」

紗枝が台所から振り返る。

「今日、早く帰れたから私を作っちゃった。お風呂入ってきたら？」

「…俺の役割なのにごめん。」

「別に、家のこと全部、真くんがしなくても良いでしょ。専業主夫って言ったって、二人で暮ら

しているんだからさ。」

紗枝のこう言うところに、とても助けられていると思う。風呂から上がって、食卓につく。やはりシチューだった。

「市川さんのところ、どう？」

紗枝が聞いてくる。

「うーん。まあ、ぼちぼちやってるよ。今でもおもちゃに花束買うのは、良く分かんないけどさ。」  
シチューが冷めるのを待ちつつ答える。僕は猫舌だ。

「そう？お年寄りが孫のように人形を可愛がるっていう話も、よく聞くじゃない。」

「そうだけど、なんか、そういうのとは違う気がするんだよなあ。」

紗枝に返答しつつ、市川さんの事を考えてみる。紗枝の言うように、孫のようにあのブリキのおもちゃに接するのなら、まだ理解できるような気がした。しかし、市川さんは花束を贈るだけなのである。まあ、僕のいない時間のことは、知らないのだけど。

「まっ、考え過ぎなくても良いんじゃない？世界には石と結婚式を挙げた人もいるって言うし、関係性なんて色々あるのよ。真くんがしたいように接してあげたら。」

そう言って紗枝はシチューを頬張った。この話はもうおしまいらしい。

「そういうもんかな……。」

僕もシチューを口に運ぶ。冷ましすぎたみたいで、少しぬるかった。

今日も今日とて、とても暑い。日中は気温が三十五度を超えるらしい。蝉の声を聞きつつ、市川さんの家へと向かう。インターホンを押すと、いつもと違い返事がある。おや？と思いつつつと、中から忠さんが出迎えてくれた。

「こんにちは、柿崎さん。いつもありがとうございます。今日は私の仕事がなくなりましたので、寄ってみたくです。暑いので、早く中へどうぞ。」

促されるまま市川さん家へ入る。いつもの居間に、市川さんはいなかった。

「お義父さんは、少し夏バテ気味で、奥の寝室で昼寝をしています。」

忠さんは氷が入ったコップに冷えた麦茶を注ぎつつ話してくれた。なんでも、市川さんとの買い物は先ほど終えたらしい。僕に今日は来なくても良いと断りの連絡を入れようかと思ったらしいが、どうせなら近況を聞きたいと思いついていたそうだ。

「それで、どうですか、柿崎さん。お義父さんと上手くやれていますか？」

「上手くやれてる…のか分かりませんが。何とかやれていますよ。」

この会話、つい最近したなと思いつつ麦茶を飲む。火照った体に沁みていくようだ。冷たくて美味しい。

「…お義父さんのこの行動、不思議に思ったでしょう？」

「おもちゃに花束を贈る、ことですか？」

縁側に目を向けると、いつもの場所にブリキの兵隊はあった。今日の花束は黄色くて小さな花

だ。花の名前はわからない。

「そうです。」

忠さんも麦茶を飲みつつ、ポツポツと話し始めた。

「お義父さんがこの行動をやりだしたのは二ヶ月前からなんです。ある日、何処からか拾ってきたみたいで。」

忠さんは続ける。

「これまでも、軽い認知症の症状があるものの、通所以外には外出もしていなかったようなので、特に問題はなかったんですけどね。」

「…そうなんですか。」

「ええ。あれを拾ってきってからと言うものの、花束を買いに行くようになりましてね、最初のうちは我々も気づかなかったんですが、ある時、警察から連絡がきましてね。どうやら帰り方が分からなくなりましたみたいで。保護されたんです。」

忠さんは、減った麦茶を注ぎ足して更に続ける。

「うちの妻は、お義父さんと仲が良くなって。子どもの頃に両親が離婚して母親が出て行ってから、厳しく育てられたらしくて。良い思い出が無いそうです。」

仲が良く無いだろうなどは感じていた。智子さんは市川さんに対しての言葉に棘がある。

「妻は世間体をとてても気にする人でして、お義父さんが警察のお世話になってから、もう二度とこんな恥ずかしいこと、起こしたくないと、言い張りましてね。ですが、身内も我々しかおらず。」

一度言葉を区切ってから、忠さんは僕の方を見る。

「そこで紗枝さんに相談したんですが、貴方に頼んでみると仰ってくれて。貴方のリハビリに良いかも、と。」

紗枝の声が脳内に再生される。うん、紗枝なら言いそうだ。

「紗枝さんから聞きました。…あまり外に出ないと。そんな貴方に頼んでしまっても良いのかと悩みもしましたが。」

「ああ、大丈夫ですよ。僕も、好い加減何とかしないといけないと思っていたんです。良いきっかけになりました。外に出なくなっても、些細な事が原因ですし。」

本当に、些細な事なのだ。三ヶ月前、前の会社の同僚である村井むらいに偶然会う事があった。村井は会社の同期で、仕事で組むことも多々あったし、割とよく話す仲だった。その時に言われたのだ。「大手まで入って今は専業主夫とか。お前、可哀想だな。」と。村井が何を思って、僕を可哀想だと言ったのかは分からない。別に僕は家事が嫌いではないし、専業主夫として過ごすことに不満など無かった。無かったはずだった。だが、村井からそう言われ、初めて周りから僕はどう写るのか意識してしまった。側から見れば、自分は可哀想と映るのかと、怖くなった。ただ、それだけのことだ。僕は同情されたいわけではないのに。結局、村井にはろくな返答もできず別れてしまった。あれから一度も会っていない。

忠さんは、僕の話の黙って聞いてくれた。コップの中の氷は完全に溶けて無くなっていった。

気付いたら結構な時間が経っていた。話し込んでいたみたいだ。

「柿崎さん。私は貴方にお義父さんのことを頼んだのは、間違っていないと思います。これからもよろしくお願いします。」

大して話したこともないのに、ここまで信用されるのも不思議な感じがする。だが、話を聞いてもらって、少し楽になったのも事実だ。もしかしたら、紗枝が話を聞いてやって下さいとでも言ったのかもしれない。

「では、失礼します。」

そう言って、自転車にまたがる。突然、ブリキのおもちゃを拾ってきた市川さん。何で拾ってきたのだろうか。忠さんに話を聞いてもらって、心に余裕が出来たからなのか、何だか市川さんのことを知りたくなってきた。

忠さんと話した次の週。今日も市川さん家へと来ていた。相変わらず市川さんは不機嫌そうな顔を前面に出している。それでも一緒に連れ立って買い物に行くのだから、市川さんの中では花束を買いに行く事が重要なのだろう。今日買った花束はピンク色の花でまとめられたものだった。

市川さんは帰るなり、今日もブリキの兵隊のもとへ行く。何となく、僕も付いて行ってみた。

「ほれ。買ってきたぞ。」言いながら市川さんは花束を置く。ブリキの兵隊は相変わらず陽だまりの中で間抜けな顔を晒している。

「市川さんは、何でこれを拾ってきたんですか。」

何となく聞いてみた。

「…誰から聞いた。」

「えっと、娘さんの、旦那さんから少し。」

「あいつ、余計なことを言いやがって。」

無視されると思ったが、話してくれる気があるようだ。今日は調子が良いのかもしれない。二人して縁側に腰掛ける。

「たまたま、ゴミ捨て場でこいつと目が合っただけだ。雨も降っていてな、寒そうだったから、連れて帰った。」

市川さんは拾って来た日のことを覚えているようだ。ゆっくり、思い出すように話す。

「花束を贈るのは、なぜですか？」

一番知りたかった事を聞いてみる。

「さてな。お前達には分からんさ。」

市川さんは縁側から立ち上がると、居間の方へ行ってしまった。少し聞き過ぎただろうか。だが、何だか初めて市川さんと会話らしい会話をしたような気がする。少しだけ、市川さんの心に

触れた気がした。その後、市川さんに挨拶をしてから家を出る。

降りしきる雨の中、ゴミ捨て場の前に佇む老人。帰り道での頭の中に、そんな情景が繰り返し浮かんだ。

それからというもの、僕と市川さんとの間に会話が少しずつ増えていった。市川さんは相変わらず不機嫌な顔をしているし、ぶっきらぼうな話し方ではあるのだが。僕の方が市川さんに慣れてきたのかもしれない。それに、陽だまりの中のブリキの兵隊に花束を贈る市川さんが、とても優しく、柔らかい表情で笑うものだから、別にこんな世界があっても良いなと思うようになった。「では、行きましょうか。」

今日もいつも通り連れ立って歩く。前よりも、スーパーへと向かう足取りは軽い。だが、スーパ―の植物コーナーに着いてから少し困った事が起きた。花束が全て売り切れていたのである。他のスーパ―はここから大分離れているし、花屋も歩いていくには少し遠い。

「…無いものは仕方ねえ。帰るぞ。」

市川さんはくるりと体の向きを変えるとさっさと歩き出した。心なしか背中がしょんぼりしている気がする。

「ま、待ってください。」

思わず声をかけていた。

「僕の知り合いに、花を育てている人がいるんです。もしかしたら、分けてもらえるかもしれません。」

言ってしまったから後悔した。確かに知り合いに花を育てている人はいるが、最後に合った日など覚えていない。家からあまり出なくなっているから一度だって会いに行った事などないのだ。だが、言ってしまった手前、撤回できるはずもない。市川さんもその気になっているようだ。

「：必ずしも、分けてもらえらるとは、限りませんからね。」

僕はこう言うのが精一杯だった。

スーパーから川の土手沿いに歩いて五分。庭に花が咲き誇る、白い洋風の家のインターホンを押す。出て欲しいような、出て欲しくないような複雑な気持ちで待っていると、中から恰幅のいい女性が出て来た。

「はいはい。どちら様で…。あら、柿崎さんじゃないの。お久しぶりね。」

「はい。突然お尋ねしてすみません。立花さん。」

立花さんは昔、町内会会長を務めていて、紗枝とこの地に引っ越して来たときに何かと世話になった人だ。現在、町内会長はしていないものの、町内の活動に積極的に取り組んでいると聞いている。

「立ち話もなんだから、うちに寄ってく？」

「い、いえ。少し頼みたい事がありました。庭の花を少し分けてもらえないでしょうか。こちらの市川さんという方が、必要でして。」

緊張で少し声が震える。久しぶりにいきなり家に来て、知らない人の為に庭の花を分けろと言われてたら訳がわからないだろう。勢いでここまで来てしまったが、今になって冷や汗が止まらない。家に引き籠もっているうちに、僕は人との距離感まで忘れてしまったのだろうか。こんな要求を受け入れてくれる人は神か仏しかないんじゃないかとさえ思えてくる。

「あら。そんな事。全然いいわよ。」

立花さんは神で仏だった。

立花さんは庭に咲いていた小さめの向日葵を二本、新聞紙にくるんで持って来てくれた。青空に映える、目が冴えるような黄色だ。

「ありがとうございます。立花さん。また、お礼の電話をします。」

そう言うってから立花さんと別れ、市川さんの家へと帰る道歩く。市川さんは「余計な事しやがって」とぼやいていたが、腕の中の向日葵を大事そうに抱えていた。市川さんの家に着き、僕も縁側までついていく。市川さんは微笑みながら、ブリキの兵隊に花束を贈る。暖かい日差しが差し込む縁側で、微笑む老人とブリキの兵隊と花束。僕は確かに、そこに陽だまりの世界を見た気がした。

その日の晩、僕は立花さんに今日のお礼の電話をかけた。この電話番号を使うのも久しぶりで、間違っていないか不安だったがツーカーの後、立花さんは電話に出てくれた。

「あの、柿崎です。本日はありがとうございます。」

「あら柿崎さん。全然良いのよ。久しぶりに会えて嬉しかったわ。」

立花さんは、終始穏やかに話を聞いてくれた。何でも、紗枝とはちよくちよく会う機会があったらしく、僕が専業主夫になったのも知っていたみたいだった。

「柿崎さん。貴方、手先が器用だし丁寧だから、主夫、むいていると思うわよ。紗枝さんも助かってるって言っていたし。」

そんなことを言われると思っていなかったから驚いた。

「でも、男のくせになって、思わないんですか…。」

思わず語尾が小さくなる。別に誰かから「男のくせに」と言われた訳ではない。ただ、村井と会った後、専業主夫のイメージを検索してしまい、そこに書かれていたのだ。検索しなきゃよかったと、とても後悔したのを覚えている。

「別に思わないわよ。言いたい奴には言わせておきなさい。あんたたち夫婦が決めたことなら、それが最善なのよ。」

何だか、涙が出そうだった。自分の今の境遇に他人からこんなにも肯定してもらった事が初め

てだった。そうだ。そうだった。紗枝と、二人で決めたのだ。

立花さんは「また家に遊びに来なさいな」と電話を締めくくった。受話器を置くとソファから紗枝がニヤニヤしながらこちらを見ている。

「…何だよ。」

「真くん、リハビリ順調そうだね。」

「うるさい。」

素っ気なく返したけれど、紗枝は分かっているみたいにケラケラ笑う。やっぱり紗枝にはかなわない。

市川さん家へと通うのも慣れてきた頃、いつも通りに玄関横に自転車を止めると、家の中から声が聞こえた。どうやら藤原さんが訪ねてきているようだ。声の感じからして、智子さんの方だろう。何やら言い合っているみたいで声が外まで響いている。今日は来なくて良いとの連絡も無いし、いつまでも玄関前に突っ立っている訳にもいかない。インターホンを押すも返事が無いので、意を決して家の中に入った。

「こんにちは、柿崎です。指定されていた曜日だったので伺ったのですが。」

中に入ると、居間で二人とも仁王立ちで向い合っていた。床には綺麗な花束が乱雑に転がっている。

「ええと。何か、ありましたか？」

恐る恐る尋ねる。智子さんはキッとこちらを向くと市川さんを指差して声を荒らげる。

「この人が花束を欲しがるとんだから、私が気を利かせて代わりに買ってきてあげたのに、要らないとか言い出すのよ！」

「誰が買ってきて欲しいと言った！わしは自分で選んだものを自分で買う。勝手な事をするな！」  
「どうやら、智子さんが買ってきた花束が気に食わなかったようだ。市川さんも負けじと言い返す。どちらも引く様子がないようだ。」

「一旦、落ち着いたらどうですか、二人とも。」

僕は今まで喧嘩を仲裁したことなどほとんどない。どうしたら良いのか分からずあたふたしていると、智子さんが僕に目を向けてきた。

「大体、貴方も良くこんな事引受けたわね。ボケた爺さんの買い物同行なんて。」

智子さんは一つため息を吐いて、近くのソファに腰掛ける。

「本当はこの人の顔も見たくないわ。遠くから足を運ぶのも面倒だし。だけど、来なかったら来なかったで、周りから悪く言われるのは私よ。薄情な娘だって。」

智子さんの指は忙しなく動いている。また一つため息をこぼして続ける。

「本当はさっさと施設に入れたいのに、ガラクタに花束を買うなんて可笑しな行動をとるから、入れたくても入れられないわ。可笑しな行動をとる人の娘さんなんて言われたら、まったくもんじゃないし。」

智子さんはイライラしているのか、貧乏ゆすりを始めた。指も相変わらず動いている。落ち着かない時の、彼女のクセなのかもしれない。僕は、なんて言葉を返したら良いのか分からず立ち尽くしたままだ。

「…ガラクタなんて、言うんじゃねえよ。」

その時、今まで黙って聞いていた市川さんがボソリと言う。

「ガラクタなんて、言うんじゃ無い。」

今度は、ハッキリと智子さんの目を見て言った。その目には強い意思が感じられた。僕はハッと息を呑む。

「な、何よ！あんな汚いモノなんてガラクタ同然じゃない！返事が返ってこないのに、花なんて買っちゃってさ、ホント馬鹿みたい！あんたのやっていることに、意味なんてないのよ！」

その言葉に、市川さんが傷ついたのがわかった。考えるより体が動いた。僕はとっさに智子さんの前を出ていた。

「あの、それは、言い過ぎだと思えます。」

彼女の目を見て言う。あ、やってしまったと思った時にはもう遅かった。みるみるうちに智子さんの顔は真っ赤になり、目はつり上がっていく。

「部外者のくせに、口出ししないでくれる！私が全て悪いって言うの！？」

智子さんの怒りは収まらないようで、玄関を指差しながら更に怒鳴る。

「帰ってください。もう、この家に来なくて良いです。二度と来ないでください！」

あまりの剣幕に、僕は帰らざるを得なくなった。追い出されるようにして玄関を出る。後ろでガシャンとドアの鍵がかかる音がした。もう開くことはないだろう。

ため息をひとつ吐いて自転車にまたがる。生温い風が頬を撫でる。やるせない思いを抱えながら自宅へと帰る。傷ついた顔で立ち尽くす市川さんの姿が、頭にこびりついて離れなかった。

その日の夕刻に、忠さんから連絡があった。どうやら智子さんから話を聞いたらしい。

「妻が今日、ご迷惑をお掛けしました。妻が行くと事前に連絡も入れずに、巻き込んでしまいました。こちらの落ち度です。」

忠さんは申し訳なかったと繰り返し言う。

「いえ、こちらが悪かったんです。部外者なのに、口を出してしまいました。智子さんが怒るのも、分かります。」

きくと、僕は口を出すべきではなかった。あの問題は、あの家族のものだ。しかし、あの言葉を放って置くには、僕と市川さんが過ごした時間は長過ぎた。

忠さんが言うには智子さんが落ち着くまで、買い物付き添いはしなくて良いそうだ。忠さんはそう言ったが、もう頼まれることは無いだろうかと直感で感じた。開放感や後悔などは何も感じない。ただ、あの陽だまりの世界を見ることはもう無いのだと思うと、少し寂しく感じた。

僕が市川さん家へ行かなくなってから二週間が過ぎた。蝉の声はもう聞こえない。生活は市川さん家へ通う前に戻った。いや、前よりは外へ出るようになったかな。紗枝は特に何も言わなかった。ただ、お疲れ様とひと言、言っただけだ。

洗濯物をたたみながら今日の晩ご飯を考える。紗枝のやつ、中華が食べたって言っていたから麻婆豆腐でも作るかな。頭の中で献立の順序を考えていると自宅の電話が鳴った。忠さんからだった。

「もしもし。柿崎です。」

忠さんは焦っているようで、早口で伝えてくる。

「柿崎さん。藤原です。あの、お義父さんがいなくなってしまって。どこか心当たりがありますか？」

「え？」

どうやら、市川さんがいなくなってしまったらしい。今日は忠さんが市川さん家へ昼過ぎに訪ねる予定だったらしいのだが、家に着いたら誰もいなかったそうだ。いつも履いている靴が無くなっているから、外出したんだろうと思うが。いくら待っても帰ってこないという。時刻はもう夕刻で、あと少ししたら陽が沈むだろう。

「僕も探します。見つけたら連絡します。」

紗枝に晩ご飯は遅くなる旨を連絡し、家を出る。風が冷たい。どうか、無事でいてほしいと願

いつつ自転車漕ぐ。きつと、市川さんは花束を買いに行ったのだと思う。何故だか、僕には確信があった。スーパーに行くまでに一緒に通った道を中心に探す。もしかしたら道を間違えてしまったのかもしれない。

「市川さん。」

と声をかけるも返事はない。警察に連絡した方がいいとは思いますが、智子さんが嫌がったのだろう。あと一時間たっても見つけれなかったらそう進言しようと思いつつペダルを漕ぐ。僕はふと思いついてスーパーに行ってみる事にした。もしかしたら、植物コーナーにいるかもしれない。

急いでスーパーに行くと、植物コーナーにはほとんど花が無かった。張り紙には、提携していた業者が倒産し、提携先がまだ見つからず入荷は未定だと書かれている。僕はすぐさまスーパーを出て自転車に飛び乗った。きつと、市川さんはあの張り紙を見たのだ。そして、花を買いに行こうと考えたのではないだろうか。一度だけ行ったことのある、立花さん家へ。

すぐさま立花さん家へと向かう。あたりは段々と暗くなってきた。自転車を漕ぐスピードが速くなる。立花さん家へ向かう途中も、あたりを必死で見回す。こんなに必死になるくらい、僕の中で市川さんは大きな存在になっていたようだ。

立花さん家へ向かう途中、川の土手に、市川さんはいた。座り込んで、手に何かを握っている。よく見ると、小さな花を付けた雑草だった。市川さんは立花さん家に向かおうとして、道がわからなくなったのだろう。

「市川さん。柿崎です。大丈夫ですか。」

駆け寄り呼びかけるも、市川さんからは返事がない。少し混乱しているようである。ひとまず忠さんに連絡を入れ、今から市川さん家へ向かう旨を伝える。

「市川さん、立てますか。帰りますよ。」

「…お前、誰だ。」

一拍してから返事があった。僕のことかわからないらしい。市川さんと過ごしていて、何度か物忘れや癩癩に出くわしたことはあったけれど、僕のことかわからなくなるのは初めての事だった。僕はグッと唇を噛む。思うところはあがるが、今は市川さんを家へ送る事が優先事項だ。触れた手は冷たい。片手に自転車を押し、反対の手で市川さんと手を繋ぎながら道を歩く。僕は何も言わなかった。何も言えなかった。

市川さん家に着くと玄関で藤原夫妻が揃って待っていた。智子さんは目を真っ赤にしてこちらを睨みつけてくる。泣いていたのだろうか。

「柿崎さん、ありがとうございます。本当にありがとうございます。」

忠さんが頭を下げてくる。

「いいえ、いいんですよ。」

正直、市川さんが心配だが、このまま部外者の僕がいても話が進まないだろう。前回のこともある。「では、これで」と帰ろうとすると、智子さんが話し始めた。

「…どうして、いつも言う事を聞いてくれないの。勝手に家を出ないでって私言ったじゃない。」  
市川さんは何も答えない。ただ、じっと前を見ている。

「いつも迷惑かけて、私の気持ちなんて、何にも考えた事ないんですよ！」

「智子、少し落ち着け。」

忠さんが宥めるが、智子さんは、気持ちが収まらないようだ。

するといきなり家の奥に駆け出し、何かを持ってきた。それは、ブリキの兵隊だった。

僕は何か嫌な予感がした。

「こんなモノがあるから、あんたは勝手に家を出るんですよ。だったらっ…。」

そう言うと智子さんはブリキの兵隊を振り上げた。あっ、と思ったのも束の間。智子さんの手からブリキの兵隊は離れていく。

時が止まったように感じた。

僕はただ、見ている事しか出来なかった。床に落ちる瞬間、僕は確かに、陽だまりの世界が壊れる音を聞いた。

小さな玄関に静寂が広がる。市川さんは何も言わない。ただ、壊れたブリキの兵隊を見つめて  
いるだけだ。

「：お父さん、私に花束なんて、一度も買ってきてくれた事なんて、なかったじゃない。」  
市川さんを見つめてそうポツリと呟くと、智子さんは家の奥へと行ってしまった。忠さんは一瞬何かを言いたそうにこちらを見たが、智子さんを追って行く。  
あれは、智子さんの、ずっと胸に秘めてきた思いなのだろう。

市川さんは、ただ黙っていた。黙ったまま、立っていた。何分か経った後、市川さんは壊れたブリキの兵隊の横に、そっと手の中の小さな花の雑草を置いた。そして、静かに破片を拾い始めた。

僕は、なんだか泣きそうだった。胸にグッと重たいものが込み上げる。僕は、市川さんに怒って欲しかった。泣いて欲しかった。だって、市川さんの陽だまりの世界は、壊れてしまったのだ。市川さんは静かに破片を拾う。丁寧な、丁寧に拾う。僕も隣に並んで拾う。絶対泣かないぞと唇を噛み締め、丁寧に拾っていった。

それからのことは、詳しくはわからない。後日、忠さんから市川さんは施設に入所したと電話があっただけだ。他のことはわからない。

あの日からだいぶ経ったが、今でも市川さんのことを考える。もしかしたら、ブリキの兵隊に

花束を贈るのは、市川さんなりの智子さんへの贖罪だったのかもしれない。代わりに、愛情を注がなければと思ったのかもしれないし、全然違う理由があるのかもしれない。ただ、言えることは。市川さんにとって、あの陽だまりの世界は必要だった。他の誰かが壊して良いものではなかった。僕はあの光景を、一生忘れないと思う。

すっかり冷んやりした空気を感じつつ、自転車を漕ぐ。今日は立花さん家にお邪魔したのだ。旅行のお土産を届けに行っただけだったのだが捕まってしまい、二時間話に付き合わされた。まあ、別に良いのだけれど。

紗枝のリハビリは成功したみたいだ。今では外に出るのに抵抗はあまり感じない。僕には、僕の世界があると気付いたから。他人には、他人の世界があるのだろう。今、村井にあってら胸を張って言えると思う。僕は可哀想なんかじゃないと。

秋の空気を胸に吸い込む。ふと思いついて、自転車のハンドルを切る。ちょっと遠くの花屋へ行ってみよう。紗枝に花束を買って帰ろう。あいつ、ピンク色が好きだから、ピンク色の花の花束にしよう。自転車は軽快に進む。

花束を受け取った紗枝の顔を思い浮かべると、自然と頬が緩んだ。

(文学部総合人間学科三年)

選考を終えて

## 東光原文学賞総評

選考委員長 坂元 昌樹

熊本大学とその前身の旧制第五高等学校には、学生たちが主体となって担ってきた言語表現活動をめぐる豊かな伝統があります。第五高等学校時代には明治・大正・昭和の三代にわたって校友会雑誌『龍南会雑誌』（後に『龍南』と改題）が定期的に刊行され、多くの五高生たちが論説欄や文苑欄において健筆を揮ってきました。『龍南会雑誌』には、熊本時代の夏目漱石や小泉八雲も教師として文章を寄せたことが知られますが、五高以来の表現活動の伝統は、新制の熊本大学の時代に移ってからも、一種の知的な文化として共有されてきました。私たちの熊本大学は、広い意味での「書くこと」をめぐっての、長く豊かな文化的土壌を持っているのです。

私は、ある意味では、その五高・熊大の表現活動の文化を現在に継承する企画が、この東光原文学賞であると考えています。附属図書館の主催で歴史を積み重ねた本賞は、今年度で第十三回を迎えましたが、今年度の応募作品も、多彩な作風の力作が揃っていました。今回の審査に携わった一人として、多くの優れた応募作品を拝読する機会を持てたことに感謝しております。

大賞作の「Id」は、語り手「ぼく」を含む三人の若い男女が織り成す物語であり、登場人物

の語る人生論や文学論などの言説が特徴をなす作品です。登場人物によって展開される思弁的な語りがきわめて印象的であることに加えて、水と石を象徴的に用いたプロットは、石に水を注ぐ登場人物の行動を含めて巧みに構築されており、「[石]」というタイトルの持つ多義性と共に、優れた構成力を示していました。結末にかけての断章風の表現を含めて作品形式も明瞭な個性を持っており、審査委員全員が一致して秀作として選出し、今年の大賞作となりました。

優秀作である「ブリキに花束を」は、自宅にこもりがちな三十代の専業主夫「僕」を視点人物として、その妻、知人夫妻の父の認知症を患う老人との交流を描いた物語です。些細な出来事を契機に引きこもりがちになった大人や認知症の老人を描くといった現代的テーマを含んでおり、作者の社会的関心もうかがわれて興味深いものでした。東光原文学賞の他の応募作品は、多くは登場人物が若い世代に設定されていましたが、本作は、作者自身とは異なる世代の登場人物の心理を巧みに描いており、その繊細な心理描写が、審査の際にも高く評価されました。

同じく優秀作の「透明な不幸」は、日常に閉塞感を抱く少年が、姉の幽霊との再会と交流を通して変化する姿を描く作品です。前半の高校生の日常が闊達に描写される部分と、その後で隠された悩みが後半で幽霊の姉との再会を通して変化するストーリーには、少年の成長物語としての明確な意図が示されていました。少年と幽霊となった姉との会話も自然であり、タイトル「透明な不幸」が示す思春期の少年の不安感覚も普遍性が感じられ、優秀作に選ばれました。

もう一つの優秀作の「流れ星の里」は、いじめ自殺事件をSNSの漫画で描いた女性漫画家を視点人物に、幽霊の姿で現れた本人との再会と交流を描いた作品です。幽霊との交流という超現

実的なプロットながら、いじめ、SNSでの誹謗中傷、WEB漫画、地域過疎化など現代性の高いトピックを扱い、登場人物の固有名の工夫を含めて、作品構成の妙がありました。比喻を含めた表現も創意工夫があり、文章のテンポも軽快で、同じく優秀作となりました。

他にも、今回受賞に至らなかった作品も、第一次選考を経た作品は、それぞれ受賞作に迫る魅力を持っていました。チャンスの神様と出会って成長する「僕」の経験をユーモラスに描いた物語「チャンスの神様、女神様」、幽霊となった語り手「俺」が死者の立場から現世に残した人々と最後の交流を図る物語「霊の遺物」、学生生活を謳歌するように見えながら、悩みも抱える青年たちが陥った出来事を描いた作品「心の灯」、政府のサイバーセキュリティ部門にスカウトされた高校生の語り手「僕」の物語「押してダメなら引いてみる」、大学生の四人組ガールズバンドをめぐる物語「消えない赤へ」など、今回は残念ながら受賞には至りませんでした。それぞれが優れた表現力や構成力を示しており、印象に残る作品でした。

今回の応募作品は、第一次選考を通過した作品の中で、物語中に死者や幽霊が登場する作品が複数あり、広い意味で「死」の影を帯びた作品、また若い世代の出口のない閉塞感を描いた作品が目立ちました。それは、世界的に新型コロナウイルス感染症流行に見舞われて、多くの困難を経験することとなった二〇二〇年という年の空気を、直接描いていないにせよ、鋭く反映したものであったかもしれません。そして同時に、各応募作品が共通して示していたものは、困難に對峙した上でそれらを克服して生きようとする、一種の希望への意志でもありました。

冒頭で五高以来の「書くこと」をめぐる文化的土壌について触れましたが、明治から昭和に至

る各時期の『龍南会雑誌』の多くの書き手たちもまた、各時代の決して平安でなかった空気を確実に捉えて表現を試みていました。その点では、かつての五高生も現在の熊大生も、相通じる点を多く持つように思います。五高・熊大の「書くこと」の文化的土壌の要素を一つ挙げるとしたら、それは「書くこと」を通して自分自身や時代、世界を深く凝視して内省し、その上で「生きる」ことを目指す姿勢ではないかと考えます。その場合、ある意味で「書くこと」は「生きる」ことと等価です。今回の東光原文学賞へ応募された皆さんを含めた本学の学生の皆さんが、そのような「書くこと」をめぐる試みを、今後様々な場で開始し、継続されることを願っています。

あらためて、今回受賞された皆さん、また惜しくも受賞に至らなかった皆さんも含めて、今回の東光原文学賞へ作品を応募された皆さん全員に感謝いたします。そして、最後となりましたが、この度の東光原文学賞の企画運営にご尽力いただいた山田秀附属図書館長をはじめとする附属図書館の皆様方、審査委員をおつとめいただいた岩瀬茂美先生と松岡浩史先生に、深く御礼を申し上げます。

●坂元昌樹（さかもと・まさき）

熊本大学大学院人文社会科学部（文学系）教授。専門は日本近代文学。

主な近著として『へ文学史』の哲学 日本浪漫派の思想と方法』（翰林書房、二〇一九年）、『夏目漱石の見た中国 『滿韓とどこどころ』を読む』（集広舎、二〇一九年、共編著）、『明治期日本の生と死をめぐる言説』（荻野藏平／トビアス・パウアー編『生と死をめぐるディスクール』九州大学出版会、二〇二〇年）などがある。

# 講評

選考委員 松岡 浩史

ウィリアム・シェイクスピアはその生涯に三十七作+ $\alpha$ のお芝居を書いています。全作品のなかで同時代のイギリスを舞台としているのは『ウィンザーの陽気な女房たち』だけです。彼がイギリスを舞台とする時は必ず時間を過去に設定し、また同時代に時間を設定した場合は外国の土地を舞台としました。しかし彼のお芝居の中には、確実にシェイクスピア時代のイングランドの空気が流れている。もっと厳密に言えば、同時代の法や、社会コードの中で登場人物たちは生きています。文学作品は多かれ少なかれ虚構。フィクションの世界を構築しますが、どんなに空想的な世界を描こうとも、いや、世界が空想的であればあるほど、作品は現実世界の鏡になる。

イスラエルの歴史学者ユヴァル・ノア・ハラリは『サピエンス全史』のなかで、ホモサピエンスがホモ属の中で唯一繁栄したのは、フィクションを作る能力があったからだ、と喝破しています。貨幣を例に出すまでもなく、フィクションには人を動かす力があるのです。

今年には候補作品九作を読みましたが、いじめ、死、認知症といった負の問題からの心の回復といったテーマに共通性が見受けられました。また、幽霊や神、魔女的な存在など超自然的なモチ

フを扱った作品も散見されましたが、そこにはコロナ禍の閉塞感が少なからず影を落としているようにも思われます。

大賞作の『Ici』は、読む者に他を圧倒する文章の熱量と質量を感じさせます。ここでは、自由意思の不在とニヒリズムのはざまで煩悶する青年の苦悩が、外連味あふれるモノログによって語られます。やがてその語りが小説についての小説、メタノベルの様相を呈していく点も面白い。「主人公の思考など書くべきではない、人は、何も考えることができないのだから。…神は物語ることはない。」と語る主人公の「ぼく」は、「詩の持つ飛躍」に憬れる。そして「自己」の存在を疑い、生きる意味を模索していく彼と軌を一にして、この作品自体が何かに導かれるように断章風の散文詩へと展開していきます。

イギリスの唯美主義の文人ウォルター・ペーターは、「すべて芸術は絶えず音楽の状態に憧れる」といいましたが、言葉のもつ「実質」と「機能」の不分離性を問題視した作家は少なくありません。大江健三郎は「肉体⇨魂の死にあたって、内在化された詩がその人間の唯一の支え」であり、「魂の死である狂気にたちむかうための支えもまた、その狂気の接近を恐怖と苦痛とともに見すえている者にとって、かれの内部の錘、あるいは燃えるトゲたる、詩にはかならない」と述べています。小説は塹壕に置き去りにされるものだが、詩はその人の死までもにもある。なるほど人間の認知的世界を切り取る言語は、それ自体が孤絶した意味や美しさを有することを拒絶し、意味が上滑りすることがある。そして人間の思考や自己同一性は、「ぼく」が懷疑するよう

に胡散臭いものであるのかもしれない。しかしこの作品は結句、「痙攣する身体」の確かな感

覚に存在を見出しています。私は候補作品の世界に耽溺しながら、このような身体感覚と言葉の質量について考えました。言葉には重さがある。その重さが、世界のリアリティや、登場人物の實在感に繋がっているように感じます。

優秀賞受賞作はいずれも文章に質量と安定感がありました。説明的でない文体と情感で淡々と上品に物語が進行する『プリキに花束を』は、「陽だまりの世界」がもたらす小さな、しかし確かな救いを信じさせる作品であったし、時系列展開に工夫を凝らした『流れ星の里』におけるエディングの美しい描写にも魅了されました。死者との触れ合いを描いた『透明な不幸』もまた、主人公の抱く漠然とした不安に寄り添い、その不安が対話によって相対化されていく過程が丁寧に描かれていて、作者の文章に対する誠意を感じさせます。

「詩人は常に真実を語る嘘つきである」とはフランスの芸術家、ジャン・コクトーの言葉です。皆さんは小説を書くとき、一つの真実を伝えるために、全力で嘘を吐く。そこに質量と輪郭を与え、読者にその嘘をどれだけ信じてもらえるのか、挑戦する。それが技術であり、才能なのかもしれない。フィクションと現実。言葉は世界を切り取り、切り拓いていく。そして言葉によって表象される架空の物語世界には、確かに、今を生きる現実の手触りがあります。

●松岡浩史（まつおか・ひろし）

熊本大学大学院人文社会科学部（文学系）准教授。専門はシェイクスピアを中心とする英米演劇。

著書・共著に『文学と歴史の曲がり角―英米文学論集』（英光社、二〇一四年）、『ヘルメスたちの饗宴』（音羽書房、二〇一二年）、『シェイクスピアの広がる世界―時代・媒体を超えて「見る」テキスト』（彩流社、二〇一二年）、『世界の鏡としての身体―シェイクスピアからアニメーションまで』（身体表象文化学出版会、二〇〇八年）などがある。

## 講評 「混迷の時代」の通奏低音

選考委員 岩瀬 茂美

「アイデアはどんなところからでも生まれる」。英国の人気デザイナー、ポール・スミスさんは服作りのヒントをそう語る。彼の服の魅力は、伝統的なデザインと遊び心たっぷりな現代性の共存にある。五年前に都内であった展覧会で再現された仕事場は本や雑貨であふれ、混沌とした空間に創作の原点を感じさせた。

ただ、混沌からのひらめきが創作の一步だとしても、ゴールまでは長い道がある。村上春樹さんによると、「小説を書く―あるいは物語を語る―という行為はかなりの低速、ローギアでおこなわれる作業」だからだ。意識の下部に自ら下り、心の闇の底に下降して、必要なものを発見する。そして根気よく文章に転換していく過程が続くのだという。

そうして生まれた作品の世界は、読者に新しい発見を提示し、現実の世界がより深く見えるようになることがある。

東光原文学賞の選考委員を務めるのは五回目。いつも深く悩みながら選考している。作品はおまかに文章と構成、インパクトの3点から分析する。まず文章・文体が魅力的か、新しさを感

じるかどうか。文章には、作家のまなざしの深さが表れる。自分の心の奥や他者の存在、社会を見つめる視点が深い焦点で結ばれた作品は、読者の人生とも重なり、共感へとつながる強度を獲得する。

さらに構成・物語の完成度はどうか、独自の世界観を描き切れているかどうか、を考える。最後にインパクト。これは、作品の持つ熱量が心を揺さぶったかどうか、作家の「芯」を感じたか、作品に新しい発見があったかどうか、で判断している。

大賞「D」は、極めて高い作家性を感じさせる作品だ。世界を見つめるまなざしの深さを感じさせる文章が続き、一気に物語に引き込まれる。どこかに欠落を抱えた登場人物の造形も輪郭が際立ち、主題を追う展開にも緩みがない。笑い方の描写、湯船の場面、クルクル回すシャープペンシルの虚無感など、印象的な表現にあふれている。

優秀作「ブリキに花束を」は、作品の芯を貫く肯定的な世界観が最大の魅力だ。専業主夫、大人のひきこもり、認知症。社会的なテーマを盛りこみ、他者と自分自身の再発見による回復の過程が、誠実な文章で描かれる。

優秀作「透明な不幸」は、悪夢に導かれるように記憶の中の少女と再会する物語。他者（死者）との対話で、主人公は「息がつまりそうな不安」と向き合うすべを知る。リアルな会話を交え、骨格がしっかりしたストーリー展開だ。

優秀作「流れ星の里」は、いじめ自殺、ネット中傷など現代的で重い設定なのだが、饒舌な幽霊の存在が、読みやすい不思議な軽みを与えている。傷付いた内面の回復とともに、主人公の名

前が変化していく工夫も面白い。

このほか、アイドルグループや神様が登場する設定が面白い「チャンスの神様、女神様」、ハッキング技術の表現がリアルで脚本的な構造の「押しダメなら引いてみる」の二作品は、エンタメ度たっぷりで見み応えがあった。

二〇二〇年は県内でも、新型コロナウイルスの感染拡大や豪雨災害の発生が、数多くの命と穏やかな日常生活を奪った。今も、災害からの復興もコロナ禍の収束も先が見通せない。そうした「混乱の時代」を映すように、今回は喪失からの回復を模索するような作品が目立った。自身自身の心の奥を見つめるだけではなく、他者（死者）との対話が物語のカギとなる作品も少なくなかった。

他者の存在は自分を映す鏡ともなる。そこに、喪失の向こう側に「人のつながり」を求める作家の意志を感じた。不思議なことに、今回の四作は作風こそ違うものの、どこか同じ通奏低音が響き合う作品群ともなっている。

●岩瀬茂美（いわせ・しげみ）

熊本日日新聞社編集局次長。一九六三年、八代市生まれ。一九八八年、熊本日日新聞社入社。社会部、天草総局、編集本部、荒尾支局などを経て、二〇〇七年編集本部次長、二〇一一年社会部次長、二〇一二年同次長兼論説委員。二〇一四年文化生活部次長兼論説委員、二〇一七年編集委員兼論説委員、二〇一九年地方部長兼論説委員。二〇二〇年三月から現職。主な連載企画に「水俣病40年」「水俣病小史」「水俣病は終わっていない」（平和・協同ジャーナリスト基金賞特別賞）、「30代の地図」「熊本地震 連鎖の衝撃」「熊本地震 あの時何が」など。

# 第十三回熊本大学東光文学賞作品集

発行日 二〇二一年三月三十一日

編集・発行 熊本大学附属図書館

〒八六〇―八五五五

熊本県熊本市中央区

黒髪二―四〇―一

印刷 株式会社かもめ印刷



To Mr. Soseki

